

3. 9 昆虫類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

カテゴリー 分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A 類 (CR)	I B 類 (EN)						
初版1996	0		5	—	—	9	81	7	114	216
改訂第2版 2005	0	0	13	—	—	15	78	9	45	160
改訂第3版 2017	0	0	23	13	10	29	28	15	16	111

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧□類、危急種は絶滅危惧□類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

これまでに蓄積された情報—文献、研究者の知見、現地調査の結果—に基づいてレッドリストの候補種を選定した。対象は種または亜種であるが、種の学名が確定されていなくても特定できるものについては評価の対象とした。選定された掲載候補の全ての種について、昆虫分科会において、カテゴリーを慎重に評価し、決定した。前回の改訂で、絶滅危惧 I 類としてまとめていたものを、今回は絶滅危惧 I A 類と絶滅危惧 I B 類に分けて評価した。

(2) 本改訂で明らかになったこと

今回の改訂では、前回の改訂（2005年）より49種少ない111種（亜種を含む）を掲載した。41種が新たに加わり、90種（絶滅危惧 II 類の2種を含む）がランク外となった。絶滅が危惧される種は、前回から24種増え、52種（絶滅危惧 I A 類 (CR) 13種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 10種、絶滅危惧 II 類 (VU) 29種）となった。そのうち、新たに掲載されたのが23種（CR3種、EN4種、VU16種）、そのランクが上がったのが14種（CR+EN4種、VU10種）であった。また、絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) も前回より6種増えた。一方で準絶滅危惧 (NT) と情報不足 (DD) の種数が大幅に減少した。以上の結果は、昆虫類の生息状況についての知見が蓄積され、カテゴリーの評価が進展したことによる。また、上記の結果は昆虫類の生息環境が依然として改善されていないことも示している。

掲載種のほぼ半数にあたる54種が水生昆虫である。以前から、池や湿地に生息するコフキトンボなどのトンボ類、タイコウチなどの水生カメムシ類およびフチトリゲンゴロウなど大型の水生甲虫類は絶滅が危惧されていた。今回の改訂で、小型のゲンゴロウ類やミズスマシ類など16種が絶滅のおそれのある種（CR3種、EN5種、VU8種）として新たにリストに加わった。水生昆虫類、特に止水域に生息する多くの種の存続は引き続き危機的な状況にあると判断される。

沖縄県は多くの島々からなり、諸島ごとに、あるいは島ごとに固有種が存在する。これまでもイシガキニイニイやヤンバルテナゴコガネなどの固有種が数多くレッドリストに掲載されてきた。今回、ヒサマツサイカブトなどが新たに加わり、またそのランクが上がった種もある。島を単位としてみると、リュウキュウリモントンボのように、沖縄島では普通種であっても、慶良間諸島や伊平屋島の小さな個体群 (LP) は、絶滅が危惧される。

執筆者 小濱 継雄（琉球大学博物館（風樹館）・協力研究員）

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅危惧 I A 類 (CR)

和名 : イシガキニイニイ
 分類 : 半翅目 (カメムシ目) セミ科
 学名 : *Platypleura albivannata* M.Hayashi, 1974
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体長は雄で 20~24 mm、雌で 19~22 mm、前翅の開張は 63~70 mm、体は扁平で、体背面に緑褐色の斑紋がある。前胸背板の側縁は三角形に張り出す。前翅は先端部で暗色紋が小さくなり、透明部が広がる。また、雄では脈上に白粉を付着させているが、雌では全く見られない。後翅は外縁部を除き大部分が黒色であるが、翅端部の内側にも透明部がある。後翅の黒色部中央と翅垂部は乳白色。

近似種との区別 : 本種は宮古諸島に分布するミヤコニイニイ *P. miyakona* (Matsumura) に似るが、後翅翅垂部が全体乳白色である点で容易に区別される。

分布の概要 : 石垣島の固有種で米原のヤエヤマヤシ林周辺のみ分布が限られている。個体数は少なく、現在では危機的水準まで減少している。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島には 4 種のニイニイゼミが分布する。クロイワニイニイ *P. kuroiwa* Matsumura は沖縄諸島と奄美大島に分布し、ニイニイゼミ *P. kaempferi* (Fabricius) は沖縄島北部から北海道まで分布する。ミヤコニイニイは宮古諸島に、ヤエヤマニイニイ *P. yayeyamana* Matsumura は八重山諸島の石垣島と西表島に分布する。

生態的特徴 : 本種の成虫は 6 月上旬から 7 月下旬にかけて出現する。クワノハエノキ、ギランイヌビワ、オオバイヌビワ、カラスザンショウなどの嗜好樹木に止る。場所は直射日光のあたらない明るい枝上である。早朝 5 時頃と夕刻の 19 時頃、他のセミが鳴かない時間帯によく鳴く。交尾行動や産卵習性および幼虫期間などは不明である。

生息地の条件 : 湿度の高い常緑広葉樹林があり、良好な林縁環境が必須だと考えられるが、本種の分布地が限られている理由については不明である。

個体数の動向 : 危機的レベルまで減少しており、鳴き声を確認できなかった年もある。

現在の生息状況 : 近年はせいぜい数個体の鳴き声しか確認されず、2014~2015 年には未確認であったが、2016 年にはそれらしい声が聞かれている (未確定)。

学術的意義・評価 : 沖縄のニイニイゼミ属は系統的に 2 つの種群にわけられている。ニイニイゼミとヤエヤマニイニイ種群と、ミヤコニイニイ、クロイワニイニイ、イシガキニイニイ種群である。それらのうちミヤコニイニイとイシガキニイニイは最も近縁だとされている。その進化の過程や島の成立過程を究明するのに役立つに違いない。

生存に対する脅威 : 本種の生息地の一部は観光地となっており、人為的騒音 (車のエンジン音、観光客の話し声、売店のスピーカーから流される音楽など) による本種成虫の発音活動 (繁殖活動) への妨害や大勢の観光客の土壌踏み堅めによる土壌の乾燥化が本種幼虫の成育への悪影響を及ぼしている。

特記事項 : 日本に生息するセミの中では分布範囲が最も狭い。「種の保存法」の国内希少野生動植物種として捕獲が禁止されており、生息地一帯が「米原イシガキニイニイ生息地保護区」に指定されている。さらに、主生息地が「立入制限地区」として厳重に保護されている。ここ数年は成虫の確認個体数はわずかであり、絶滅がきわめて危惧されている。国内希少野生動植物種 (2002 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

原記載 : Hayashi, 1974. *Kontyû*, 42: 243.
 参考文献 : 林 正美 (編), 2000. 絶滅危惧種イシガキニイニイの棲息実態調査報告. *Cicada*, 15 (Supplement) : 1-36, 4pls.
 林 正美・税所康正, 2015. 改訂版 日本産セミ科図鑑. 誠文堂新光社, 東京.
 佐々木健志・山城照久・村山 望, 2006. 沖縄のセミ. 新星出版, 那覇。

執筆者名 : 林 正美

和名 : タイコウチ
 分類 : 半翅目 (カメムシ目) タイコウチ科
 学名 : *Laccotrephes japonensis* Scott, 1874
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体長は 30~38 mm (呼吸管を除く)。体は灰褐色ないし暗褐色。頭部小さく、複眼は光沢ある黒色、口吻は短く鋭い。小楯板は不規則な菱形、半翅鞘は腹部全面を被い、膜質部には網目状の脈がある。前脚は捕獲脚となり、腿節の基部近く内方に 1 本の頑丈な棘がある。中・後脚は遊泳用で、跗節は全て 1 節。体下面は背面と同色であるが赤褐色を帯びる。腹端には体長とほぼ等長の細長い呼吸管がある。

近似種との区別 : 同属の近似種タイワンタイコウチ *L. grossus* (Fabricius) は前腿節に棘を欠いているので区別できる。

<昆虫類>

分布の概要 : 本州、四国、九州、トカラ中之島、奄美大島、徳之島、沖縄島に分布し、国外では台湾、中国、朝鮮半島、マレーシアから知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種は琉球列島では奄美大島、徳之島、沖縄島に分布する。別種のタイワンタイコウチはわが国では石垣島、西表島、与那国島に分布する（国外では台湾、中国からインド）。

生態的特徴 : 水田、池・沼の浅い水域で水に落ちた枯れ葉のような姿をして生息する。水底に静止し、呼吸管の先端を水面に出して呼吸する。水生小動物を捕食する。

生息地の条件 : 安定した浅い止水域で、泥質の水底を好む。

個体数の動向 : 近年の確認記録は全くない。

現在の生息状況 : 不明。

学術的意義・評価 : 旧北区系の昆虫であり、沖縄島が分布の南限である。北方系水生昆虫がいかんして沖縄まで渡来したのかを解明するのに適当な材料であり、その生態を十分に解明する必要がある。

生存に対する脅威 : 水系の農業等による汚染、赤土の沈積、池沼の減少などが考えられる。

特記事項 : 刺激を与えると口吻の基部両側から悪臭のある乳液を分泌する。後胸腺（臭腺）はない。沖縄島からは坂口（1927）により初めて記録され、Takara（1957）は1956年に採集した2個体の標本を記録した。

原記載 : Scott, 1874. *Ann. Mag. Nat. Hist.*, [4], 14: 450.

参考文献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三（編）, 東海大学出版会, 神奈川県.
日本昆虫目録編集委員会（編）, 2016. 日本昆虫目録 第4巻 準新翅類 Paraneoptera.
Takara, T., 1957. Provisional list of Hemiptera (Heteroptera) in the Ryukyu Islands. *Sci. Bull. Agr. & Home Econ. Div. Univ. Ryukyus*, (4): 11-90.

執筆者名 : 林 正美

和名 : タイワンコオイムシ
分類 : 半翅目（カメムシ目） コオイムシ科
学名 : *Diplonychus rusticus* (Fabricius, 1781)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類（CR） **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類（CR）

形態 : 体長は15~16 mm、体は淡黄褐色で、扁平、楕円形で、頭部は扁平な短三角形である。前胸背は短梯形で前縁中央内方にくぼみがあり、微小点刻を散布し光沢がある。小楯板は正三角形。前翅は幅広く、腹部末端に達する。膜質部を欠く。脚は細長く扁平、前脚は最も短く太く捕獲脚となる。腹部下面は淡黄褐色で、各節の両側縁に1個の暗色斑紋がある。

近似種との区別 : 沖縄には本種以外のコオイムシは分布しないが、本土に分布するコオイムシとは、前胸背の後縁が広いこと、半翅鞘に網状脈を欠く点で区別できる。

分布の概要 : 日本では沖縄島と与論島、中国、台湾、フィリピン、東南アジア、インドに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種は沖縄島を分布の北限とし、東南アジアからインドにかけて広く分布し、コオイムシ *Appasus japonicus* Vuillefroy は九州、四国、本州、中国、朝鮮半島に、オオコオイムシ *Appasus major* (Esaki) は本州、北海道、朝鮮半島、シベリア、樺太に分布する。

生態的特徴 : 沖縄における生態はほとんど分かっていない。台湾における年間世代数も不明である。成虫、幼虫ともに水底の泥下に隠れ、時々水中に遊泳し稚魚や昆虫を捕らえ血液を吸収する。雄は背上に雌が産下した卵を一重に並べそれを背負いつつ、孵化するまでの間卵塊を背負った保育生活をする。コオイムシの名はこれに由来する。コオイムシの卵は長時間水中にいと窒息して死んでしまうので卵を背負った雄は1日の大半を水面上に卵塊を出した状態で生活をしている。雄は幼虫の孵化後は卵殻をはらい落とす。雌は産卵後、死んでしまう。

生息地の条件 : 雄は卵の保育のため水面上に長時間止まる必要があるため、水草と清水の存在が必要である。

個体数の動向 : 近年全く再発見されていない。

現在の生息状況 : 不明。

学術的意義・評価 : 亜社会性の種であり、わが国では沖縄島と与論島のみに分布する。

生存に対する脅威 : 陸水域（池沼、水田など）の減少、および赤土・農業等による水質汚染。

特記事項 : 沖縄で採集された標本はきわめて少なく、1960年代以降の標本はない。成虫は電灯に飛来する性質があるので、外灯の増設も個体数の減少に拍車をかけた可能性がある。

原記載 : Fabricius, 1781. *Species Ins.*, 2: 333.

参考文献 : 江崎悌三他, 1932. 日本昆虫図鑑. 北隆館, 東京.
林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三（編）, 東海大学出版会, 神奈川県.
日本昆虫目録編集委員会（編）, 2016. 日本昆虫目録 第4巻 準新翅類 Paraneoptera.
Takara, T., 1957. Provisional list of Hemiptera (Heteroptera) in the Ryukyu Islands. *Sci. Bull. Agr. & Home Econ. Div. Univ. Ryukyus*, (4): 11-90.

執筆者名 : 林 正美

和名 : タガメ
分類 : 半翅目（カメムシ目） コオイムシ科
学名 : *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：体長は65 mm内外。体は灰褐色ないし暗褐色。頭部は比較的小さく、複眼は光沢ある暗褐色。前胸背はやや半円形をなし、後縁近くに横溝があり、その前方は正中線に沿ってくぼみ、後方は隆起する。半翅鞘は大きく、膜質部の脈はほぼ平行に走る。口吻は短く、前腿節は強大で捕獲脚をなし、先端には鋭い爪がある。中後脚には長毛が密に列生し、やや扁平で遊泳脚となる。

近似種との区別：与那国島に同所的に分布するタイワンタガメ *L. indicus* Lepeletier et A.-Serville はさらに大型で、複眼が球形で大きく突出し、前胸背に暗色の縦条があることで区別される。

分布の概要：北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布し、国外では朝鮮半島、中国、アッサム、台湾、インドに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：タガメは与那国島以北に分布し、タイワンタガメは与那国島以南の台湾、中国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、インドに分布する。

生態的特徴：捕食肉食性で魚、カエルなどを捕獲し、その血液を吸う。成虫は6月から10月まで採集されている。卵は水面上の茎などに卵塊として産まれるようである。分布は局所的である。

生息地の条件：池沼や水田などの止水または清水域で水量が安定している広くて深い水域。水草の存在も不可欠である。

個体数の動向：近年、宮古島、沖縄島などから数例が記録されている。

現在の生息状況：繁殖例は確認されていないが、少数ながら維持されていると推測される。飼育個体の遺失も考慮に入れる必要があるかもしれない。

学術的意義・評価：大型水生半翅類で、水系環境の自然度を知る上で、指標となる種である。

生存に対する脅威：水質汚濁と水系の開発・減少、および外灯の増加。

特記事項：1956年に2個体が採集され、その後30年余その姿を見ることがなかったが、1988年に西表島で、1991年に石垣島で採集され、1994年には沖縄島でも数個体が採集された。また、1998年には与那国島からも発見された。近年、本種の属名が変更されている (Perez Goodwyn, 2006; Aukema *et al.*, 2013)。

原記載：Vuillefroy, 1864. Ann. Soc. Entomol. Fr., 33: 141.

参考文献：Aukema, B., C. Rieger and W. Rabitsch, 2013. Catalogue of the Heteroptera of the Palearctic Region, Vol. 6 (Supplement). Netherlands Entomological Society, Amsterdam.
林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.
Perez Goodwyn, P. J., 2006. Taxonomic revision of the subfamily Lethocerinae Lauck & Menke (Heteroptera: Belostomatidae). Stuttgart Beitr. Naturk., [A], (695): 1-74.

執筆者名：林 正美

和名：タイワンタガメ
分類：半翅目 (カメムシ目) コオイムシ科
学名：*Lethocerus indicus* (Lepeletier et Audinet-Serville, 1825)
カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態：体長は60~70 mmで、タガメ *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy) よりさらに大型。体は灰色で、複眼が大きく球形に突出し、前胸背中央に暗色の1縦条があり、両側に同色の2縦条がある。後縁には横しわを欠き、小楯板及び前翅に暗色条がある点でタガメと区別される。

近似種との区別：タガメは体は光沢のない灰褐色ないし暗褐色。頭部は比較的小さく、複眼は光沢ある暗褐色。前胸背はやや半円形~台形をなし、後縁近くに横溝があり、その前方は正中線に沿ってくぼみ、後方は隆起する。半翅鞘は大きく、膜質部の脈はほぼ平行に走る。

分布の概要：わが国の与那国島とそれ以南の台湾、中国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、インドに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：近縁種のタガメはわが国の与那国島以北と国外の朝鮮半島、中国、台湾、インドに分布する。

生態的特徴：近縁種のタガメ同様、捕食肉食性で水棲昆虫、魚類、蛙・オタマジャクシなどを捕獲し、その血液を吸う。卵は水面上の茎などに卵塊として産まれるようである。水面上の茎などに産卵された卵塊が乾燥すると死んでしまうので、雄は夜間に水中と卵塊の間を行き来して卵塊が乾燥しないように給水する保育を行う。

生息地の条件：止水または清水域で水量が安定している広くて深い水域。水草の存在も不可欠である。

個体数の動向：近年の確認例なし。

現在の生息状況：不明 (絶滅に近い危機的な状況と思われる)。

学術的意義・評価：大型水生半翅類で、水系環境の自然度を知る上で、指標となる種である。

生存に対する脅威：水質汚濁と水系の開発、水田や池沼の激減。

特記事項：沖縄 (与那国島) で採集された標本はきわめて少なく、1980年代以降の採集記録はない。水田では農薬散布で生息が困難となり、池・沼は各種開発で減少している。タイワンタガメは中国や東南アジアで広く食用にされ、特にタイでは需要が多く、市場でタケのザルに入れられて販売されている。

原記載：Lepeletier and Audinet-Serville, 1825. Encycl. Méth. (Olivier ed.), 10: 272.

参考文献：林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.
林 正美・佐々木健志, 2001. 与那国島におけるタガメの分布記録. Rostria, (50): 54-55.

執筆者名：林 正美

和名：ツブゲンゴロウ

分類：鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科

学名：*Laccophilus difficilis* Sharp, 1873

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態：逆卵状の体形をした体長 4~5 mm のゲンゴロウ。頭部は短く幅が広く、背面・腹面ともにやや膨隆する。上翅は黄褐色で、明瞭な斑紋が認められない（上翅後方に不明瞭な暗色紋を呈することはある）。

近似種との区別：同属のサザナミツブゲンゴロウ *L. flexuosus* やシャープツブゲンゴロウ *L. sharpi* などは、上翅に明瞭な斑紋があることにより、本種と区別ができる。

分布の概要：県内では、沖縄島・久米島・石垣島・西表島および与那国島に分布する。国内では北海道・本州・四国・九州・甌島列島・トカラ列島および奄美諸島、国外では中国および朝鮮半島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：県内からは同属 6 種が知られ、ウスチャツブゲンゴロウ *L. chinensis*、サザナミツブゲンゴロウ、コウベツブゲンゴロウ *L. kobensis*、ミナミツブゲンゴロウ *L. pulicarius* 及びシャープツブゲンゴロウの 5 種は沖縄諸島および八重山諸島に分布し、ナカジマツブゲンゴロウ *L. nakajimai* は与那国島に分布する。

生態的特徴：成虫は、灯火に飛来する。採集時に水から上げると、かなり高く跳躍して逃避する。

生息地の条件：植物の多い浅い水域に生息する。

個体数の動向：1990 年頃までは八重山諸島を中心に生息が確認されていた。

現在の生息状況：県内における近年の採集例はないようで、絶滅に瀕している状況であると考えられる。

生存に対する脅威：池沼や湿地の開発、水質汚染。

特記事項：小浜島の分布記録が「琉球列島産昆虫目録 増補改訂版（東清二監修，2002，沖縄生物学会）」に載っているが、同目録作成時の資料を調べた結果、誤植であることが判明した。

原記載：Sharp, D., 1873. Trans. Ent. Soc. Lond, 1873: 53.

参考文献：阿部光典，1991. 与那国島の水生昆虫採集記録. 神奈川虫報，(97)：11-13.

神奈川県，2008. 神奈川県レッドデータブック 2006 WEB 版.

<http://conservation.jp/tanzawa/rdb/>，2016 年 9 月閲覧.

神奈川県立博物館（編），1995. 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録，(8)：5-64.

松井英司，1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類(1). 北九州の昆蟲，37(2)：69-76.

執筆者名：青柳 克

和名：マダラゲンゴロウ

分類：鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科

学名：*Rhantaticus congestus* (Klug, 1832)

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類（CR）

形態：楕円形の体形をもち、背面がまだら模様を呈する中型のゲンゴロウ。体長は 9 mm 前後。体は黄色で、上翅の中央部および後方に密集した黒点からなる不規則な斑紋がある。後胸腹板翼片部の前縁は強く湾曲する。後脛節端刺の先端は二叉状となる。後跗節の第 1~4 節の後縁は全面に渡って剛毛を具える。

近似種との区別：県内における近似種として、ウスイロシマゲンゴロウ *Hydaticus rhanoides* とリュウキュウオオイチモンジシマゲンゴロウ *H. pacificus sakishimanus* が挙げられる。両種とも、後胸腹板翼片部の前縁がほぼ直線状となること、後脛節端刺の先端は尖ること、本種と区別できる。

分布の概要：国内では南大東島のみ分布する。国外では中国南部・台湾・フィリピンなど、東洋区全域に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：本種は 1 属 1 種であり、近縁な種はいない。

生態的特徴：止水性。池および水溜りにて、多数のウスイロシマゲンゴロウに混じって生息していた。

生息地の条件：不明。

個体数の動向：南大東島で 1991 年に 3 頭、翌年に 2 頭の採集記録がある。これ以外の記録はないと思われる。

現在の生息状況：近年の採集例はないと思われる。

学術的意義・評価：国内では南大東島のみで確認される種であり、海洋島である南大東島にすむ昆虫類の由来を研究するうえで重要な存在と考えられる。

生存に対する脅威：護岸工事などの池沼開発、ティラピアなどの外来魚による捕食。

特記事項：特になし。

原記載：Klug, 1832. Symb. Physicae, Insectes Madagascar, 3: 136.

参考文献：環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），2015. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5 昆虫類. ぎょうせい，東京.

森 正人・北山 昭，2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.

野村周平，1991. 南大東島で日本初記録のマダラゲンゴロウを発見. 甲虫ニュース，(96)：5.

執筆者名：青柳 克

和名：フチトリゲンゴロウ
 分類：鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科
 学名：*Cybister limbatus* (Fabricius, 1775)
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：体長 33～39 mm で、背面は緑色を帯びた暗褐色で光沢があり、頭楯、上唇、前胸背および上翅の側縁部に淡黄色の帯が有り始端部で釣針の返し状に広がる。雄の前胸背は前縁部に点刻がある他は平滑であるが、雌では中央部を除き筋状の密な点刻がある。雄は附節の両側に、雌では内側のみに遊泳毛を有する。体下面は暗赤褐色で光沢があり、腹部第 3～5 節の側方に黄褐色紋をもつが、雌では不明瞭な個体も見られる。

近似種との区別：奄美諸島以南には同属で形態的によく似たヒメフチトリゲンゴロウ *C. rugosus* が分布するが、本種に比べやや小型で、体下面の後胸腹板と後基節が中央部を除き黄褐色であることから区別できる。

分布の概要：トカラ列島の宝島、奄美諸島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島に分布する。国外では中国、台湾、フィリピン、ベトナム、タイ、インドネシア、インドなどに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本に分布するゲンゴロウ属 *Cybister* は 7 種あり、そのうちトビイロゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ、フチトリゲンゴロウ、ヒメフチトリゲンゴロウの 4 種が沖縄県に分布する。本州にも分布するコガタノゲンゴロウを除く 3 種は、いずれも琉球列島から東南アジアにかけて分布する南方系の種で、琉球列島が分布の北限である。

生態的特徴：水生植物が繁茂する比較的水深のある池沼や放棄水田などに生息するが、牧場内のため池や貯水槽などの人工的な水環境にも見られる。成虫と幼虫ともに、ヤゴやおタマジヤクシなど小型の水生物を補食する。蛹化は水際の土中で行われる。成虫は灯火に飛来する。

生息地の条件：繁殖には、周囲が土で覆われた水生植物の繁茂する安定した水環境と餌となる小型の水生物が豊富なことが必要である。また、幼虫の天敵となる大型の外來魚や外來カメ類などが侵入していないことも条件となる。

現在の生息状況：沖縄県内では、1999 年に宮古島で採集された個体を最後に 17 年間も発見例がないことから、すでに絶滅した可能性が高い。

学術的意義・評価：琉球列島は本種の分布北限であるため、熱帯系のゲンゴロウ類の日本への分布拡大の過程やそれともなう環境適応の研究などに役立つ。また、肉食性の大型の水生物で生息環境の変化に影響を受けやすいため、水環境の自然度を示す指標生物ともなる。

生存に対する脅威：個体数減少の主な要因は、開発による自然池沼の減少、水田の畑地化やため池の減少、放棄水田の草地化による生息地の消失、農薬の使用や水生外來生物の侵入による生息環境の悪化などである。また、生息地が限られ個体数も極端に少ないことから、違法採集による影響も甚大である。

特記事項：国内希少野生動物植物種 (2011 年)。

参考文献：東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄.
 刈部治紀・北野 忠・中島 淳・丸山宗利, 2015. フチトリゲンゴロウ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 26.
 北野 忠・唐真盛人・水谷 晃・崎原 健・河野裕美, 2010. 西表島における大型ゲンゴロウ類の生息状況. 沖縄生物学会誌, 48: 113-120.
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231pp.
 佐渡山安常・佐々木健志, 2016. 宮古島から初めて確認されたフチトリゲンゴロウ *Cybister limbatus* (Fabricius) の記録. *Pulex*, (95): 693-694.

執筆者名：佐々木健志

和名：ガムシ
 分類：鞘翅目（コウチュウ目） ガムシ科
 学名：*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky, 1853
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリ：準絶滅危惧 (NT)

形態：体長 30～40 mm で、日本のガムシ科の中では最大。体は楕円形で、体色は暗緑色を帯びた光沢のある黒色。触角は短く混紡状で黄褐色、腹部下面は無毛である。胸部下面の中央にある棘状の長い突起（後胸突起）は、腹部第 2 節に達する。

近似種との区別：沖縄県内には同属のコガタガムシ *H. bilineatus cashimirensis* が分布するが、本種は体長 23～28 mm とガムシに比べ小型で体型もやや細く、触角が赤褐色で腹部下面に細毛を有し、後胸突起が腹部第 4 節に達することなどで区別できる。

分布の概要：北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐、甌島列島、種子島、屋久島、トカラ宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾などに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本に分布するガムシ属には、本種の他に本州から琉球列島にかけて分布するコガタガムシと北海道東部に分布するエゾガムシ *H. dauricus* がある。いずれの種も生息地の減少が懸念されており、環境省レッドリストに掲載されている。

<昆虫類>

- 生態的特徴** : 成虫と幼虫ともに、湿地、池沼、水田などの止水域に生息する。成虫は藻類や水生植物のほか小動物の死骸なども食べ、幼虫はタニシやモノアラガイなどの巻貝を好んで捕食する。雌は尾端から絹糸状の糸を分泌して煙突状の突起のある卵嚢を作り、水面の水草などに付着させる。蛹化は水際の土中で行われる。成虫は灯火に飛来する。
- 生息地の条件** : 繁殖には、湿地や池沼、休耕田などの水生植物や巻貝類が豊富な安定した止水域が必要である。また、本種の捕食者となる大型の外来魚やカメ類、ザリガニなどが生息していないことも必要である。
- 現在の生息状況** : 沖縄島では1970年代までは南部の八重瀬町や那覇市首里などにも生息していたが、1978年10月に国頭村与那で採集された個体を最後に40年近く記録がない。西表島では1995年に浦内川近くの水田での採集例を最後に、また石垣島では2001年に底原の外灯下で死骸の一部が発見されて以降の記録はなく、沖縄島、西表島、石垣島ではすでに絶滅した可能性が高い。与那国島では2002年と2008年に成虫が確認されているが、個体数は極めて少ない。
- 学術的意義・評価** : 日本のガムシ類の中では最大種で生息環境の変化に影響を受けやすいため、止水環境の自然度を示す指標生物となる。
- 生存に対する脅威** : 1970年以降の開発や畑地化にともなう湿地や水田の減少、農業などの水質汚染、圃場整備などによる生息環境の悪化のほか、生息地に侵入した外来動物（テラピア類・カメ類・アメリカザリガニなど）による捕食も本種の個体数減少の要因となっている。
- 特記事項** : 与那国島での早急な生息調査と保全対策が必要である。
- 参考文献** : 阿部光典, 1988. 琉球新記録 石垣島のガムシ. 昆虫と自然, 23(13): 5-6.
東 清二, 2005. ガムシ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 那覇, 234.
林 成多, 2015. ガムシ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室（編）, ぎょうせい, 東京, 400.
北野 忠・河野裕美, 2014. 西表島において絶滅もしくは減少傾向にある大型水生昆虫. 西表島研究 2013, 37-44.
佐々木健志, 2016. 琉球大学博物館（風樹館）に収蔵されている沖縄県内で採集されたガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsk の標本記録. *Pulex*, 95: 695-696.
佐藤正孝, 1998. 琉球列島の水生昆虫類 III. 甲虫ニュース, 121: 7-13.
高橋泰美, 1990. ガムシの西表島での記録. 月刊むし, (236): 34.
- 執筆者名** : 佐々木健志

和名 : ヨナグニマルバネクワガタ
分類 : 鞘翅目（コウチュウ目） クワガタムシ科
学名 : *Neolucanus insulicola donan* Mizunuma, 1985
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類（CR）

形態 : 体長は雄 35~63 mm、雌 38~50 mm。体色は、雌雄ともに赤色を帯びた光沢のある黒色。複眼は完全に縁取られ、前縁は外側に強く張り出し、先端は直角から鋭角に尖る。雄の大顎には短歯型、中歯型、大歯型があり、大顎基部には上方へ向く歯状突起がある。雌の前胸背板は幅広く側縁は丸みを帯び、側縁後角は強く湾入する。頭胸部の点刻は弱く光沢がある。頭楯は横長の台形。

近似種との区別 : 名義タイプ亜種であるヤエヤママルバネクワガタ *N. i. insulicola* とは、本亜種のほうが上翅と腹部がやや短く体型は丸みを帯び、雄の大顎がやや短く眼縁突起の前縁がより尖るなどの点で区別できるが、個体によっては区別しにくい場合もある。近縁なアマミマルバネクワガタ *N. protogenetivus protogenetivus* やオキナワマルバネクワガタ *N. okinawanus* とは、眼縁突起の張り出しが本亜種よりも弱く先端が直角から鈍角となることや、アマミマルバネクワガタの雄は中歯型か小歯型の個体がほとんどで、大顎の中央から基部にかけての歯状突起の発達が悪く、またオキナワマルバネクワガタの雄では大顎基部の歯状突起を欠くなどの点で区別できる。

分布の概要 : 与那国島の固有亜種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : マルバネクワガタ *Neolucanus* 属は、琉球列島に3種2亜種が分布し、ヤエヤママルバネクワガタが石垣島と西表島に、オキナワマルバネクワガタが沖縄島と久米島に、アマミマルバネクワガタが奄美大島、徳之島に、ウケジマルバネクワガタ *N. p. hamaii* が請島にそれぞれ分布する。分子系統解析の結果、本亜種を含むヤエヤママルバネクワガタは、沖縄諸島や奄美諸島に分布する他の2種よりも、台湾から東南アジアにかけて分布するマキシムスマルバネクワガタ *N. maximus* に近縁であることが示されている。

生態的特徴 : スダジイやオキナワウラジロガシなどが生育する自然度の高い森林に生息する。成虫の発生期間は10月上旬~11月下旬。幼虫は大径木に形成された樹洞や腐朽した根部などに貯まった腐植物を食べて生育する。幼虫期間は2年ほどで、成熟した幼虫は腐植物中に蛹室を作って蛹化する。産卵数は50~200個で、成虫の寿命は1~2カ月である。

生息地の条件 : スダジイやオキナワウラジロガシなどの大径木が生育する自然度の高い湿潤な森林で、幼虫の成育場所となる腐朽の進んだ枯死木や樹洞を有した大径木が点在していることが必要である。

現在の生息状況 : 与那国岳、インビ岳、宇良部岳周辺の森林に局所的に生息しており、個体数は極めて少ない。

学術的意義・評価 : 琉球列島はマルバネクワガタ属の北限地域で、本種の近縁種は台湾から東南アジアにかけて分布することから、琉球列島の地史と関連したマルバネクワガタ属の分布拡大の過程や種分化を研究する上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 森林公園や展望台などの整備にともない生息地の森林が伐採されたことに加え、林道設置、下草刈り、台風被害などによって林内の乾燥化が進んでおり生息環境が悪化している。これまでの森林開

発によって樹洞が形成されるような大径木が減少しており、繁殖木の枯渇も懸念される。また、違法採集による繁殖個体の消失や繁殖木の破壊なども個体数減少の一因となっている。

- 特記事項 : 国内希少野生動物植物種 (2011年)。
 原記載 : 水沼哲郎, 1985. タテヅノマルバネクワガタ種群の再検討. 月刊むし, (171): 15-23.
 参考文献 : 荒谷邦雄, 2015. ヨナグニマルバネクワガタ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類”, ぎょうせい, 東京, 32.
 細谷忠嗣・荒谷邦雄, 2006. 琉球列島におけるマルバネクワガタ属の分子生物地理. 昆虫と自然, 41(4): 5-10.
 定木良介・林 辰彦・土屋利行, 2014. 月刊むし昆虫図説シリーズ4 日本のマルバネクワガタ. むし社, 東京, 136pp.
 下地幸夫, 2009. 商業的大量捕獲によって絶滅寸前に追い込まれたヨナグニマルバネクワガタ. 野生生物保護, 12(1): 21-26.
 岡島秀治・荒谷邦雄 (監修), 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑. 学習研究社, 東京, 300pp.

執筆者名 : 佐々木健志

和名 : ヒサマツサイカブト
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科
 学名 : *Oryctes hisamatui* Nagai, 2002
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体長 45~55 mm。体色は黒色から赤褐色で個体によって変異がある。雌雄共に頭角を有し、大型の雄では長く発達し後方に強く湾曲する。前胸背板前部は深く陥没し、後縁中央に山状の弱い突起が雄では3つ、雌では2つある (不明瞭な個体もある)。前胸背板の陥没部の周囲には帯状の浅い溝があり、雌ではその後方中央に長方形の浅い窪みがある。上翅の点刻は細かく弱い光沢がある。雌の腹端部には黄褐色の長毛を密生するが、雄では無毛である。

近似種との区別 : 同所的に分布する外来種のサイカブト *O. rhinoseros* とは、以下の点で識別できる。①サイカブトに比べて体に厚みがあり、胸部背面後方が高くせり上がる、②雄の胸部背面前部の陥没部の後縁にある山状の弱い突起は、サイカブトでは2つ、ヒサマツサイカブトでは3つある、③雄の胸部背面中央の窪みを取り囲んでいる帯状の浅い溝は、サイカブトでは後方で途切れるが、ヒサマツサイカブトでは繋がる、④雌の胸部背面の後方中央に長方形の浅い窪みがある、⑤上翅の点刻はヒサマツサイカブトに比べ粗く、上翅の光沢も弱い。

分布の概要 : 南大東島の固有種

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内では、外来種であるサイカブトが大東諸島のほか、与那国島から奄美大島及び九州の一部にかけて分布する。外部形態から近縁な種とされるオオサイカブトムシ *O. gnu* は、フィリピン、スリランカ、マレーシア、インドネシア、ニューギニアに分布する。

生態的特徴 : 生態については不明であるが、南大東島のピロウ *Livistona chinensis* 林に生息し、サイカブトと同様に幼虫は枯死したピロウの幹の腐植物を餌にしていると推察される。成虫の発生期は 6~11 月で、灯火に飛来する。

生息地の条件 : 繁殖場所となるピロウの枯死木が常に供給されるような大きなピロウ林が必要である。

現在の生息状況 : 過去5年間で数個体の発見例しかなく、生息個体数は極めて少ないものと推察される。

学術的意義・評価 : 海洋島である南大東島の昆虫相の形成過程や *Oryctes* 属の海洋分散と種分化を研究する上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 大東諸島では、2000年前後にサイカブトが侵入しピロウ林に大きな被害を与えており、本種の繁殖場所の減少や種間競争による影響が懸念される。また、農地整備や道路設置などでピロウ林の減少や分断が生じており、生息環境が悪化している。大東諸島には外来種であるオオヒキガエル *Rhinella marina* とミヤコヒキガエル *Bufo gargarizans miyakonis* が高密度で生息しており、灯火に飛来した昆虫類などを頻りに捕食していることから、本種への被害も懸念される。

特記事項 : 県内で最も絶滅に瀕した昆虫類の一つであり、早急な生息調査と保護対策が必要である。

原記載 : Nagai, S., 2002. A new species and a new record of the dynastid beetle from the Ryukyu Islands, Southwest Japan (Coleoptera, Scarabaeidae, Dynastinae). Jpn. J. syst. Ent. 8(1): 45-48.

参考文献 : Dechambre and Chaume, 2001. Les Coleopteres du Monde The Beetles of the World Vol. 27 *Oryctes*. Hillside Books, Canterbury, UK. 72pp.

田川陽一・佐藤 勝・永井信二, 2003. 採集されたヒサマツサイカブトムシ♂ (?). 月刊むし, (384): 12-15.

岡島秀治・荒谷邦雄 (監修), 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑. 学習研究社, 東京, 300pp.

執筆者名 : 佐々木健志

和名 : ダイトウスジヒメカタゾウムシ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科
 学名 : *Torishimazo daitoensis* (Voss, 1971)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体長 4.1~5.5 mm。上翅は卵形で全面が鱗片に覆われる。複眼が斜め後方へ突出し、上翅の各間室

<昆虫類>

には剛毛を持つ1列の点刻があり、上翅間室の点刻は条溝の点刻よりはるかに小さい。前胸背板の点刻はより小さく疎らで、その間部は点刻直径の半分より広い。

近似種との区別 : 同属で伊豆諸島の鳥島に分布するトリシマスジヒメカタゾウムシ *T. watanabei* や小笠原諸島に分布するスジヒメカタゾウムシ *T. lineatus* に似るが、本種の上翅間室の点刻は点刻列のものより小さく、前胸背板の点刻は他の2種より疎らでやや小さく点刻間隔が直径の半分以上であることなどから区別できる。

分布の概要 : 大東諸島(南大東島・北大東島)の固有種

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 以前はオガサワラヒメカタゾウムシ属 *Ogasawarazo* に含まれていたが、頭部は点刻のみで隆起条がない、吻先端の傾斜部に鱗片がない、雄交尾器の細長い開口部が先端広報の背面にあるなどの特徴から、現在はスジヒメカタゾウムシ属 *Torishimazo* に分類されている。同属の近縁種は、伊豆諸島の鳥島と小笠原諸島に5種が分布する。

生態的特徴 : 詳しい生態については不明であるが、成虫は3~5月に海岸近くのクサトベラの葉上で発見されている。成虫は飛翔できない。

生息地の条件 : 海岸部に生育するクサトベラなどの低木類に依存して生活していると考えられるが、詳細は不明である。

現在の生息状況 : 1965年に北大東島で6個体が採集されて以降、50年近くも発見例がなかったが、2012年に新たに南大東島で生息が確認された。両島ともに、生息個体数は極めて少ないものと推察される。

学術的意義・評価 : スジヒメカタゾウムシ属は、小笠原諸島を中心に5種が生息しており、本種だけが小笠原諸島に隔離分布している。このため、両諸島の地史や昆虫相の形成過程、スジヒメカタゾウムシ属の海流分散や種分化に関する研究などで重要な種となる。

生存に対する脅威 : 海岸部の開発や道路整備などによる海岸植生の破壊、耕作地で使用される農薬の影響などが懸念される。また、大東諸島に高密度で定着している外来種のオオヒキガエル *Rhinella marina* とミヤコヒキガエル *Bufo gargarizans miyakonis* による捕食の可能性もある。

特記事項 : 本種はオガサワラヒメカタゾウムシ属の亜属 *Torishimazo* とされていたが、独立したスジヒメカタゾウムシ属 *Torishimazo* となった。保全対策に必要な生息調査を早急に実施する必要がある。

原記載 : Voss, E., 1971. Über Attelabiden und Curculioniden von den Japanischen Inseln. In Chujo (ed.), *Coleoptera of the Loo-Choo Archipelago* (III). Memoirs of the Faculty of Education, Kagawa University., Part 2 (202): 43-55.

参考文献 : 林州匡夫・森本 桂・木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑 IV. 保育社, 大阪, 438pp.
Kojima, H. and K. Morimoto, 2012. Rediscovery of a celeuthetine weevil, *Ogasawarazo daitoensis* (Coleoptera, Curculionidae) after an interval of nearly half century. *Jpn. J. Syst. Entomol.*, 18(2): 257-260.
小島弘昭・高桑正敏, 2015. ダイトウスジヒメカタゾウムシ. ”改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 50.
森本 桂・中村剛之・官能健次, 2015. The Insects of Japan 日本の昆虫 Vol. 4. 日本昆虫学会「日本の昆虫」編集委員会 編, 権歌書房, 福岡, 758pp.

執筆者名 : 佐々木健志

和名 : タイワンツバメシジミ名義タイプ亜種

分類 : 鱗翅目(チョウ目) シジミチョウ科

学名 : *Everes lacturnus lacturnus* (Godart, 1824)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 前翅長 13 mm 内外。裏面の斑紋は雄雌同じ、雄翅表は紫藍色、雌翅表は暗褐色、まれに前翅基半部に弱く青白色鱗をあらわすことがある。

近似種との区別 : 本亜種は、翅裏面の黒斑が小さいこと、雄の翅表面の黒縁が広いことで、屋久島以北に分布する日本本土亜種 *E. l. kawii* と区別できる。ツバメシジミ *E. argiades* は翅裏面の斑紋が一樣であるのに対し、本亜種では黒点が明瞭で目立ち、尾状突起が長いことなどで区別できる。

分布の概要 : 本亜種は、日本を含む東洋区~オーストラリア区に広く分布する。国内では奄美諸島と沖縄島に分布する。沖縄島では国頭村与那と恩納村安富祖の2箇所だけで生息が確認されている。八重山諸島での記録は台湾からの迷蝶と考えられる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本本土亜種は屋久島以北の九州、四国および本州の一部に分布する。ツバメシジミは屋久島以北、北海道まで広く分布し、沖縄県では迷蝶としての記録がある。

生態的特徴 : 食草のシバハギの開花に合わせて6月、8~10月に出現する。卵は蕾に産みつけられ、幼虫は子房や莢の中の柔らかい種子を食べる。

生息地の条件 : 生息地は、林道や農道沿いの裸地から草原に移行する途中の非常に不安定な環境であり、シバハギは他の植物が繁茂すると消滅する。

学術的意義・評価 : 本亜種は、沖縄県では沖縄島が唯一の生息地であり、生物地理学的に貴重である。

生存に対する脅威 : 沖縄島の生息地では、シバハギの生育が確認されていない。

特記事項 : 特異な環境に生息する蝶で、生息地の保全は困難と考えられる。沖縄島において最後に本種成虫が確認されたのは1995年10月で、その後21年間記録がない。

原記載 : Godart, 1824. *Ency. Méth.*, 9: 660 (Polyommatus).

参考文献 : 西平守孝, 1959. タイワンツバメシジミ沖縄に産す. このは会会報, 1(2): 46.
長嶺邦雄, 1985. 沖縄島での蝶の幼生期の記録(1984年). 琉球の昆虫, (10): 62-70.
日本昆虫目録編集委員会(編), 2013. 日本産昆虫目録 第7巻 鱗翅目. 日本昆虫学会, 東京.

白水 隆, 1960. 原色台湾蝶類大図鑑. 保育社, 東京.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.
 浜 祥明, 1975. 沖縄本島産のタイワンツバメシジミ. 昆虫と自然, 10(3): 7-8.
 野林千枝, 1996. 1990~94年 沖縄島および周辺離島の蝶の記録. 琉球の昆虫, (16): 21-37.

執筆者名: 比嘉正一・野林千枝

2) 絶滅危惧 I B 類 (EN)

和名: **アオナガイトトンボ**
 分類: 蜻蛉目 (トンボ目) イトトンボ科
 学名: *Pseudagrion microcephalum* (Rambur, 1842)
 カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態: 細身で大型のイトトンボ。雄は腹長 28~33 mm、後翅長 18~22 mm。雌は腹長 28~32 mm、後翅長 19~22 mm。雌雄で体色が異なる。雄は青色の地に黒色の条斑がある。雌は緑がかった橙褐色の地に褐色の条斑がある。雄の尾部上付属器は側面から見ると先端が 2 叉している。

近似種との区別: 雄は一見、ムスジイトトンボ *Cercion sexlineatum* (Selys) の雄に似るが、本種の眼後紋は丸く大きく、尾部上付属器が長く突出しているため容易に識別できる。雌は同属のアカナガイトトンボ *P. pilidorsum pilidorsum* (Brauer) の雌に似るが、本種は地色が明るい緑褐色で、腹部背面の褐色条が細いことで区別できる。

分布の概要: 台湾以南、南はフィリピンからオーストラリアまで、西は中国南部からインドまで広く分布する。日本では与那国島だけに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 同属のアカナガイトトンボは沖縄島、久米島、石垣島、西表島、竹富島および与那国島に分布する。

生態的特徴: 成虫は 3 月から 12 月にかけて出現する。成熟した雄は水辺になわばりをもち、雌が現れると交尾を行う。交尾後、雌雄連結して水面の藻などにとまって水面下の植物組織に産卵する。交尾・産卵行動は午後に多く観察される。幼虫は水生植物の豊富な樹陰のある緩やかな流れにすむ。

生息地の条件: サンゴ石灰岩の崖下からわき出る清流。

現在の生息状況: 田原川の上流部などごく限られた場所でしか見つかっていない。同じ場所でも年により個体数の増減が大きく、ほとんど見つからない年もある。

学術的意義・評価: 与那国島は本種の分布北限であり、日本のトンボ相を解明する上で貴重な材料である。

生存に対する脅威: 生息地が非常に限られており、人為的な環境の改変や自然災害による土砂流入等により生息地が失われるおそれがある。

特記事項: 生息地の保全対策を早急に立てる必要がある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原記載: Rambur, J. P., 1842. Histoire naturelle des insectes. Nevropteres, Roret, Paris, xvii+534pp.

参考文献: 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執筆者名: 焼田理一郎

和名: **トビイロヤンマ**
 分類: 蜻蛉目 (トンボ目) ヤンマ科
 学名: *Anaciaeschna jaspidae* (Burmeister, 1839)
 カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態: 雄は腹長 45~52 mm、後翅長 41~46 mm。雌は腹長 43~47 mm、後翅長 42~48 mm。雌雄で複眼の色が異なる。成熟雄は複眼が鮮やかな青色で、雌の複眼は緑色。胸部に黄緑色の斑紋があり、体色は赤褐色で淡黄色~淡青色の斑紋がある。翅は全体的に黄色みが強い。

近似種との区別: 同属のマルタンヤンマ *A. martini* (Selys) は、雄の胸部が濃い青色であること、雌とも腹部に斑紋がないことで区別できる。

分布の概要: 台湾以南、中国、東南アジア、オセアニアまで広く分布する。日本ではトカラ列島以南の琉球列島に分布するが、小笠原諸島や静岡県で一時的に発生したこともある。県内では、伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島、南大東島から記録がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 同属のマルタンヤンマは、日本では奄美大島が分布の南限である。

生態的特徴: 成虫は、八重山諸島ではほぼ 1 年中見られる。生殖活動や摂食は、朝夕の薄暮時に観察されるが、秋季~冬季は日中でも活動する。雌は、湿地の泥や抽水植物の茎などに産卵する。幼虫は抽水植物の豊富な湿地や池にすむ。

生息地の条件: 抽水植物の豊富な湿地、池。

現在の生息状況: 八重山諸島や沖縄島周辺の離島では、湿地や水田環境の変化・減少により、ほとんど見られなくな

<昆虫類>

っている。沖縄島でも、限られた場所でしか見られなくなっている。
学術的意義・評価 : 大型のトンボ類で、湿地環境の自然度を測る上で、指標となる種である。
生存に対する脅威 : 農薬の使用や、耕作放棄による乾田化、宅地化により生息地が失われるおそれがある。
特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Burmeister, 1839. Neuroptera. "Handbuch der Entomologie, vol. 2", Enslin., Berlin, 840.
参考文献 : 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執筆者名 : 焼田理一郎

和名 : **タイワンタイコウチ**
分類 : 半翅目 (カメムシ目) タイコウチ科
学名 : *Laccotrephes grossus* (Fabricius, 1787)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は 34~37 mm で、タイコウチ *L. japonensis* Scott よりやや大型。体は灰褐色~暗褐色で、斑紋はない。前脚腿節には棘を欠くことで、タイコウチと容易に区別される。複眼が大きく突出し、前胸背中央に暗色の 1 縦条があり、両側に同色の 2 縦条がある。後縁には横皺を欠き、小楯板及び前翅に暗色条がある点でタガメと区別される。

近似種との区別 : タイコウチとは前脚腿節の棘の有無、エサキタイコウチ *L. maculatus* (Fabricius) とは体サイズで区別できる。

分布の概要 : わが国では八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島。国外では台湾、中国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、インドに広く分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種のタイコウチとは分布域が異なり、国内で 2 種が同所的にみられる場所はない。

生態的特徴 : 生態および習性は近縁種のタイコウチとほぼ同じ。捕食肉食性で水棲昆虫、魚類、カエル (オタマジャクシ) などを捕獲し、その血液を吸う。成虫はほぼ一年中みられる。

生息地の条件 : 浅い止水域で水量が安定している池沼や水田。密生しない水草の存在も不可欠である。

個体数の動向 : 近年、短期間で激減した。

現在の生息状況 : 非常に少なくなったと考えられる。水域の復活による回復を期待したい。

学術的意義・評価 : 大型水生半翅類で、水系環境の自然度を測る上で、指標となる種である。

生存に対する脅威 : 水質汚濁と水系の開発、水田や池沼の減少で個体数は少ない。

特記事項 : 石垣島と西表島では以前から少なく、近年では与那国島でも激減した。これは、多くの水田が放棄され、良好な生息環境 (陸水域) がほとんどなくなったことによる。過去に比較的多産していた与那国島でさえも急速に減少し稀となり、絶滅が危惧される。生息環境である開放水域の回復など、早急な施策が必要である。

原記載 : Fabricius, 1787. Mant. Ins., 2: 277.

参考文献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. "日本産水生昆虫", 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執筆者名 : 林 正美

和名 : **エサキタイコウチ**
分類 : 半翅目 (カメムシ目) タイコウチ科
学名 : *Laccotrephes maculatus* (Fabricius, 1775)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 小型で、呼吸管を除く体長は 16~18 mm。体背面は様に暗褐色で、腹面はやや淡色となる。前脚腿節の基部には小さな突起がある。

近似種との区別 : 沖縄に分布する他の 2 種とは、体サイズでははっきりと区別される。すなわち、タイコウチやタイワンタイコウチでは体長が 30 mm を超えるのに対して、本種では 20 mm に満たない。また、前脚腿節基部の突起 (隆起) はないが、その形や大きさでも明らかに異なる。

分布の概要 : 日本では与那国島だけに分布。国外では台湾をはじめとして東南アジアに広く分布する。

生態的特徴 : 水草の豊富な水路・池沼・湿地などに棲み、田植え後の水田にも少なからずみられる。川などの流水域でなく、止水域に限る。水田以外では、抽水植物のある比較的浅い水域を好むようである。成虫はほぼ一年中みられる。

生息地の条件 : 抽水植物などの水生植物が豊富な、水量が比較的安定した止水域。

個体数の動向 : 生息地点は減少しているものの、減少傾向はそれほど大きくない。

現在の生息状況 : 一部の好適環境には少数ながら安定して生息している。

学術的意義・評価 : 東南アジアに広く分布する本種が、八重山諸島の中でも与那国島だけに分布することは、琉球列島の生物地理を論ずる上で貴重な存在となっている。このことは、与那国島と台湾・中国大陸との関連性を示唆するものである。

生存に対する脅威 : 生息環境である水域の埋め立てが行われている。また、多くの水田が放棄され、本種が生息できる

水域が激減している。狭い範囲でも生息可能であるが、それだけ産地の絶滅とも関連する。
 原 記 載 : Fabricius, 1775. Syst. Entomol., 692.
 参 考 文 献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.
 Tomokuni, M., 1995. Growth of *Laccotrephes maculatus* (Heteroptera, Nepidae) with notes on its biology. Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., Tokyo, (4): 189-195.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : コブイトアメンボ
 分 類 : 半翅目 (カメムシ目) イトアメンボ科
 学 名 : *Hydrometra annamana* Hungerford et Evans, 1934
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 大型のイトアメンボで、体長は 11~14 mm。体は黒灰色~灰褐色で、おもに短翅型 (ときに長翅型)。触角の第 2 節は第 4 節とほぼ同じ長さ。雄では腹部第 7 腹板に 1 対の瘤状の隆起がある。
 近似種との区別 : イトアメンボ *H. albolineata* (Scott) に似るが、雄の第 7 腹節に隆起があることで区別される。また、オキナワイトアメンボ *H. okinawana* Drake は体サイズが小さいこと、触角の第 4 節が第 2 節より明らかに長いことで区別される。
 分布の概要 : 奄美諸島、沖縄島~与那国島の島々に分布する。国外では、台湾、中国、ベトナム、ラオス、タイなどから知られる。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種のイトアメンボは日本本土から奄美大島にかけて分布する。奄美大島では両種が生息するが、2 種同時に採集されたことはない。それぞれの生息条件や生息のための微環境についてはわかっていない。
 生態的特徴 : 止水域 (池沼、水田、湿地) などにみられ、開放的な水域を好む。水辺近くの水草間の地上で生活する。驚かすと、水草間を素早く歩いて逃亡する。
 生息地の条件 : 安定した広い止水域 (池沼、水田、湿地)。水草の存在も不可欠である。
 個体数の動向 : 近年減少傾向が高い。
 現在の生息状況 : 局所的となり、各産地では個体数が減少している。
 学術的意義・評価 : 大型水生半翅類で、水系環境の自然度を知る上で、指標となる種である。
 生存に対する脅威 : 水質汚濁と水系の開発、水田や池沼の減少など、陸水域環境の悪化により、近年激減している。
 特 記 事 項 : 従来、琉球列島の分布域ではむしろ普通にみられていた。ところが、近年の陸水域環境の悪化により、短い間に明らかな減少がみられた。この減少傾向を勘案すると、このままの状態では絶滅が危惧される。保護対策が必要である。
 原 記 載 : Hungerford and Evans, 1934. Ann. Hist. Nat. Mus. Natl. Hung., 28: 68.
 参 考 文 献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.
 執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : リュウキュウヒメミズスマシ
 分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ミズスマシ科
 学 名 : *Gyrinus ryukyuensis* M.Satô, 1971
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 楕円状の体形で、背面が強く隆起した小型のミズスマシ。体長は 4~5 mm で、背面は滑沢で黒く、前脚は橙色。上翅の点刻列は強く、側方ではやや溝状となる。第 8 腹板は半円形で、中央に細毛からなる条線を欠く。
 近似種との区別 : 県内に近似種はいない。
 分布の概要 : 琉球列島の固有種。奄美大島・徳之島・沖縄島・伊平屋島・伊是名島・久米島・石垣島・西表島および与那国島に分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内では同属の 6 種が知られ、それらは北海道から九州までに分布する。
 生態的特徴 : 水面生活に特化した昆虫で、水面の波を利用して餌を探す。おもに池などの止水域に棲むが、河川中流の緩流域でも見られる。
 生息地の条件 : 生息には植物が繁茂できる岸辺環境が必要である。
 個体数の動向 : 1990 年頃までは、沖縄諸島 (特に沖縄島の北部地域) で産地・個体数とも多かった。その後、各地で減少し、安定した産地はほとんど無くなった。
 現在の生息状況 : 伊平屋島・伊是名島・石垣島および与那国島では、近年、採集例がない。沖縄島の北部地域 (金武町以北) および西表島では局地的であるが、現在も少数生息している。久米島の現状は不明。
 学術的意義・評価 : 琉球列島の固有種であることから、同列島の多様性を評価する際に本種の存在は貴重である。
 生存に対する脅威 : 池や河川の護岸整備、湿地の埋め立てなど、池沼・湿地および河川環境の開発や水質汚濁。
 特 記 事 項 : 本種は、かつてヒメミズスマシ *G. gestroi* Régimbart に含まれていたが、1971 年に新種記載された。したがって、県内の古い記録はヒメミズスマシとして掲載されている。
 原 記 載 : Satô, M., 1971. Kontyû, 39(3): 273-275.
 参 考 文 献 : 川合禎次・谷田一三 (編), 2005. 日本産水生昆虫 - 科・属・種への検索, 東海大学出版会, 神

奈川.

松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.
松井英司, 1991. 沖縄本島・石垣島・西表島の水生昆虫類 (続き). 甲虫ニュース, (95): 11-12.
佐藤文保, 2006. 伊平屋島の小動物 (2001~2005年の目撃記録). 琉球の昆虫, (29): 1-15.

執筆者名: 青柳 克

和名: ヤマトホソガムシ
分類: 鞘翅目 (コウチュウ目) ホソガムシ科
学名: *Hydrochus japonicus* Sharp, 1873
カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態: 細長い体形で、背面は青緑色の金属光沢を呈する小型の水生甲虫。体長は 3 mm 前後。複眼は大きく、左右に突出する。前胸背の肩は明瞭に張り出し、背面には不規則な凹陥があり、基部は上翅幅より狭い。上翅の点刻は深く、列状となる。体下面は細毛で覆われる。

近似種との区別: 県内に近似種は知られていない。

分布の概要: 県内では、沖縄島・伊平屋島・石垣島・西表島および与那国島に分布する。国内では本州・四国・九州および種子島、国外では中国・台湾・アッサム・ベトナム・タイ及びフィリピンに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 国内では同属の 3 種が知られ、それらは北海道から九州までに分布する。

生態的特徴: 水生植物がある池や湿地・水田などの浅い場所に生息する。成虫は、灯火に飛来することもある。幼虫は、国内からは未発見である。

生息地の条件: 植物が豊富に繁茂する止水域が必要である。

個体数の動向: 1990 年頃までは、西表島に多く見られ、その他の地域では少数見られていた。

現在の生息状況: 西表島では近年も確認されているが、その他の地域では採集例がないようである。沖縄島・伊平屋島および石垣島では絶滅に瀕している状況であると推測される。与那国島における生息状況は不明。

生存に対する脅威: 開発による池沼や湿地の消失、農薬汚染。

原記載: Sharp, D., 1873. Trans. Ent. Soc. Lond, 1873: 64.

参考文献: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), 2015. レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 5 昆虫類, ぎょうせい, 東京.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.

執筆者名: 青柳 克

和名: マルヒラタガムシ
分類: 鞘翅目 (コウチュウ目) ガムシ科
学名: *Enochrus subsignatus* (Harold, 1877)
カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態: 短楕円状の体形で、黄褐色に不明瞭な暗褐色の縦長紋をもつ中型のガムシ。体長は 5 mm 程。小顎髯は触角より長く、第 2 節は全体ほぼ同じ太さで、内側へ弱く湾曲する。上翅は後方へ程よく丸まり、中央部で最も幅が広くなり、亜会合線をもつ。腹部第 5 節 (末端節) の先端は丸まる。

近似種との区別: 同属のサトミヒラタガムシ *E. satomii* は、体が黒色であり、腹部第 5 節の先端が湾入すること、キヒロヒラタガムシ *E. simulans* は、上翅に亜会合線を欠き、10 点刻列を持つことにより、本種と区別ができる。また、近似のスジヒラタガムシ属 *Helochares* は、小顎髯の第 2 節は先端に向かって太くなり、外側へ弱く湾曲すること、上翅は後方でやや広がる (先端側 1/3 で最も幅広くなる) ことにより、本種と区別ができる。

分布の概要: 県内では、沖縄島・伊平屋島・伊是名島・久米島および西表島に分布する。国内では本州・四国および九州、国外では朝鮮半島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 県内から同属 5 種が知られ、チビヒラタガムシ *E. esuriens* 及びウスグロヒラタガムシ *E. uniformis* は沖縄諸島および先島諸島、キベリヒラタガムシ *E. japonicus* は沖縄島、サトミヒラタガムシは沖縄諸島および八重山諸島、キヒロヒラタガムシは沖縄諸島に分布する。

生態的特徴: 水生植物が生える池沼や湿地・水田などの止水域に生息する。成虫は灯火に飛来することがある。

生息地の条件: 水生植物が豊富な止水域が必要である。

個体数の動向: 1990 年頃までは、伊是名島や久米島に多く見られ、その他の地域でも少数みられていた。

現在の生息状況: 伊是名島では、近年、採集例がない。一方、沖縄島・久米島および西表島では、近年も確認されている。伊平屋島については、比較的新しい記録があることから、現在も生息していると推測される。

生存に対する脅威: 開発による池沼や湿地の減少、水質汚濁。

原記載: Harold, E. V., 1877. Deutsche entomologische Zeitschrift, 21: 342.

参考文献: 青柳 克, 2014. 伊平屋島からヒラタドトムシ・ヒメドトムシなど水生甲虫の初記録, 琉球の昆虫, (38): 192-196.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.

執筆者名：青柳 克

和名：ヤンバルテナゴコガネ

分類：鞘翅目（コウチュウ目） コガネムシ科

学名：*Cheirotonus jambar* Y. Kurosawa, 1984

カテゴリ：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態：体長は雄 50～65 mm、雌 45～60 mm。体色は前胸背版が光沢のある緑銅色から赤銅色、上翅は緑色を帯びた黒色で前縁や側縁に不規則な黄褐色の小紋を散在するが、個体による変異が著しい。体下面の側縁部は淡黄色の長毛で密に覆われ、脚と腹面は黒色。雄の前脚脛節は 20～30 mm と長く、内側に端刺と亜端刺を備え、大形の個体では端刺の先端が鈎状となる。

近似種との区別：国内に近似種は分布しない。中国南部に分布するヤンソンテナゴコガネ *C. jansonii* は、上翅側縁に赤褐色の帯紋があることから、また台湾に分布するタイワンテナゴコガネ *C. maclayi* は、上翅に明瞭な黄褐色斑点があり、前脚脛節の端刺が短く内側に湾曲し、尾節版に長毛を有することから区別できる。

分布の概要：沖縄島の固有種。沖縄島北部の通称”やんばる”と呼ばれる地域の自然度の高い森林に生息する。近年、生息が確認されているのは、大宜味村、東村、国頭村の森林で、主要な生息地には米軍の北部演習場が含まれる。

近縁な種及び群との分布状況の比較：最も近縁な種は、中国南部に分布するヤンソンテナゴコガネである。また、台湾には種群の異なるタイワンテナゴコガネが分布している。

生態的特徴：幼虫はスダジイ、オキナワウラジロガシ、イスノキなどの樹洞内に堆積した腐植物を食べて育ち、樹洞以外での繁殖は確認されていない。幼虫期間は 3～4 年で、秋に羽化した成虫はそのまま蛹室内に留まり、翌年の 8 月～9 月に出現し、1 ヶ月ほどの間に交尾と産卵を終え死亡する。雄は灯火に飛来するが、雌の飛来は稀である。野外での詳しい生態については知られていない。

生息地の条件：スダジイ、オキナワウラジロガシ、イスノキなどの大径木が生育する自然度の高い湿潤な森林で、幼虫の餌となる腐植物が堆積した樹洞木が点在していることが必要である。

現在の生息状況：発見当初は名護市嘉陽の森林でも確認されていたが、現在は大宜味村以北の森林に局所的に分布する。繁殖木の出現頻度は、自然度の高い森林でも 1 ha 当たり 0.6 本程度である。また、年間に得られる本種の目撃情報は、0～5 件程度と非常に少ない。

学術的意義・評価：分子系統解析の結果、本種は地理的に近い台湾のタイワンテナゴコガネより、中国南部からベトナムにかけて分布するヤンソンテナゴコガネに近縁なことが示されている。本種は琉球列島がアジア大陸と接続していた頃に大陸の辺縁部に分布していたテナゴコガネの遺存種であり、テナゴコガネ属の系統進化や琉球列島の地史を研究する上で重要な種である。

生存に対する脅威：個体数減少の最も大きな要因は、森林伐採、農地開発、ダム建設などによる森林破壊である。また、林道設置や下草刈による林内の乾燥化は、生息環境の悪化に繋がっている。過去の大規模な伐採によって樹洞が形成されるような大径木が残る森林は限られており、繁殖に不可欠な腐植物を有する樹洞木の供給が不足している可能性がある。さらに、繁殖に適した数少ない樹洞が、違法採集によって破壊されることも深刻な問題である。

特記事項：国指定天然記念物(1985年)。国内希少野生動物種(1996年)。IUCN カテゴリ：Endangered(EN)。

原記載：Kurosawa, Y., 1984. Discovery of a new long-armed scarabaeid beetle (Coleoptera) on the Island of Okinawa. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo. (A), 10: 73-78.

参考文献：荒谷邦雄・細谷忠嗣, 2006. 外来生物法とテナゴコガネ亜科について. 昆虫と自然, 41(13): 4-9. 東 清二・金城正勝・佐藤文保, 1986. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 27 集 ヤンバルテナゴコガネ実態調査報告書 II. 沖縄県教育委員会, 那覇, 38pp.

池原貞雄・黒澤良彦・新納義馬・東 清二・金城正勝・日越国昭, 1985. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 26 集 ヤンバルテナゴコガネ実態調査報告書 I. 沖縄県教育委員会, 那覇, 38pp.

細谷忠嗣・荒谷邦雄・福地壮太・佐々木健志・当山昌直, 2005. ミトコンドリア 16SrRNA 遺伝子からみたテナゴコガネ亜科の系統関係. 日本鞘翅学会第 18 回大会講演要旨集, 15-16.

執筆者名：佐々木健志

和名：イリオモテボタル

分類：鞘翅目（コウチュウ目） オオメボタル科

学名：*Rhagophthalmus ohbai* Wittmer, 1994

カテゴリ：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態：体長は雄 8～10 mm、雌 15～20 mm。雄の体色は黒色で全身に褐色の毛を有する。複眼は巨大で頭部の 2/3 以上を占め、頭部腹面では口器を除いてほとんどが複眼で覆われる。触角は 12 節で基部付近は黒褐色であるが、先端に向かうにつれ淡褐色となる。雌の体色は淡黄色で、体型は細長く幼虫型で無翅である。腹部の各体節側面及び背面と第 7 腹節に発光器を有する。

近似種との区別：国内に近似種は分布しない。

分布の概要：石垣島・西表島・小浜島に分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較：同属の近縁種が、台湾及び中国南部からタイやミャンマーにかけて分布する。

生態的特徴：アダンが混生する海岸林から耕作地周辺、集落内の石垣、山地の森林まで多様な環境に生息する。

<昆虫類>

成虫は11月下旬から3月上旬にかけて出現し、日没直後に活動し、雌のみが地上で尾端の発光器を発光させ雄を誘引する。通常、雌が発光すると直ちに雄が飛来し交尾に至るため、雌が発光が確認できるのは日没後15~30分程度と非常に短い。雌は石垣の隙間、石の下、浅い地中などに産卵し、孵化まで抱卵して保護する。抱卵中は尾端の発光器ではなく、各体節にある発光器を発光させる。日本に分布するホタル類の中で、行動に応じて発光パターンを変化させるのは本種だけである。雄の腹部にも発光器があり、通常は発光しないが強い刺激を受けるとかすかに発光する。幼虫はヤスデ類を餌としているが、野外での詳しい生態については不明。

- 生息地の条件 : 人里環境にも適応した種であるが、本来の生息場所は森林の林縁部である。幼虫の餌となるヤスデ類が豊富な、落葉などが堆積した適度な湿り気のある場所を好む。集落や耕作地周辺にも生息するが、周囲に林や御嶽林がある場所に限られる。本種の配偶行動では、雌が発光によって雄が誘引されるため、生息場所の周辺に外灯などの光源のないことも必要である。
- 現在の生息状況 : 西表島では海岸林から山地の森林まで広く分布するが、石垣島と小浜島では分布は局所的で個体数も少ない。各島の分布状況については、さらに詳細な調査を必要とする。
- 学術的意義・評価 : 近縁種が台湾から中国南部、東南アジアにかけて分布することから、オオメボタル科に属するホタル類の系統進化や種分化及び琉球列島の地史や生物地理を研究する上で重要な種である。また、本種の特異な発光行動は、ホタル類の発光行動の進化に関する研究にも役立つ。
- 生存に対する脅威 : 特に、石垣島や小浜島では生息地が局所的で個体数も少ないため、宅地造成や農地改良による生息地の改変のほか、古い石垣の改修や農薬散布などの軽微な環境変化でも容易に絶滅に繋がる可能性がある。また、外灯などによる配偶行動の攪乱も本種の繁殖に大きな影響を与えている。
- 特記事項 : 小浜島で確認されている生息地は、小浜集落周辺と大岳の2カ所のみで個体数も極めて少ない。絶滅が危惧されるため、早急な保護対策が必要である。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。
- 原記載 : Wittmer, W. und N. Ohba, 1994. Neue Rhagophthalmidae (Coleoptera) aus China und benachbarten Landern. Jpn. J. Ent., 62(2): 341-355.
- 参考文献 : Kawashima, I. and H. Sugaya, 2003. An additional new species of the genus *Rhagophthalmus* (Coleoptera, Rhagophthalmidae) from Taiwan, with a key to the males of the Taiwanese and Japanese species. Elytra, 31(2): 353-359.
大場信義, 1996. ヤスデを捕食するイリオモテボタルの幼虫. 全国ホタル研究会誌, 29: 21-22.
大場信義・後藤好正・川島 逸郎, 1996. イリオモテボタルの外部形態・習性および生息環境. 横須賀市博研報(自然), 44: 1-19.
大場信義, 1997. イリオモテボタルの飼育. 横須賀市博研報(自然), 45: 51-55.

執筆者名 : 佐々木健志

3) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名 : カラスヤンマ慶良間亜種(アサトカラスヤンマ)
分類 : 蜻蛉目(トンボ目) ミナミヤンマ科
学名 : *Chlorogomphus brunneus keramensis* Asahina, 1972
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態 : 黒色の地に黄色条斑がある大型のトンボ。腹長は雄50~53mm、雌52~56mm。後翅長は雄46~49mm、雌50~52mm。翅胸前面に八字状の黄色い斑紋がある。雄は翅先に褐色斑がある。雌は翅のほとんど全体が濃褐色。腹部の黄斑は消失傾向が強く、雌では第4~6節の黄斑を欠く。原名亜種カラスヤンマ *C. b. brunneus* Oguma より小型で、島嶼性矮小型と考えられる。
- 近似種との区別 : 原名亜種に比べやや小型で、雄の翅端の黒褐色斑が大きく、雌の濃褐色帯は著しく発達し翅全体に及ぶ。
- 分布の概要 : 慶良間諸島の渡嘉敷島と阿嘉島のみに生息している。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : カラスヤンマとオキナワミナミヤンマ *C. okinawensis* Ishida が沖縄島に、イリオモテミナミヤンマ *C. iriomotensis* Ishida が西表島に分布する。
- 生態的特徴 : 成虫は6月中旬から8月上旬にかけて見られる。基本的な生態はカラスヤンマとほぼ同じと考えられるが、観察例は少ない。成虫は早朝と夕刻に、谷間や樹冠上を飛翔し、摂食する。雄は木漏れ日のさす溪流の水面上を、流れに沿って数mの範囲を往復飛翔する。交尾は樹上の下枝に止まって行われる。雌は非常に浅い砂地に、斜め下方に腹端を打ちつけるように産卵する。幼虫は砂質底に浅く潜って生活する。
- 生息地の条件 : 山間の森林に囲まれた溪流の上流域。
- 現在の生息状況 : 渡嘉敷島では一部の川で見つかっており、個体数が非常に少ない。阿嘉島では記載以来の正式な記録がない。
- 学術的意義・評価 : 慶良間諸島の固有亜種。亜種分化や島嶼矮小化の材料として貴重。
- 生存に対する脅威 : 渡嘉敷島、阿嘉島とも小島で生息範囲が狭く、人為的な環境の改変や自然災害による土砂流入等、河川環境のかく乱。渡嘉敷島では生息地のひとつの川の堰堤建設により生息環境が悪化した。数少ない既知産地での過度な採集圧。
- 特記事項 : 亜種和名は発見者である沖縄のトンボ研究家安里進氏に因む。

IUCN カテゴリー：Critically Endangered(CR)。
 原 記 載：Asahina, S., 1972. Additional notes to the knowledge of the odonate fauna of Taiwan and the Ryukyus. Tombo, 15(1/4): 2-9.
 参 考 文 献：尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.
 執 筆 者 名：焼田理一郎

和 名：コフキトンボ
 類 別：蜻蛉目（トンボ目） トンボ科
 学 名：*Deielia phaon* (Selys, 1883)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形 態：中型のトンボ。雌雄ほぼ同じ大きさで、腹長 22～31 mm、後翅長 28～39 mm。雌の尾毛の先端が下方に曲がっているのが特徴。雄の体色は、若い（未成熟の）ときは黄色、成熟すると粉をふいて青白色になる。雌は 2 タイプあり、雄と同様に体色が青白色のもの（同色型）と、黄色のもの（異色型）がある。同色型雌の翅は透明。異色型は翅の基部が橙黄色で、翅先近くに帯状の褐色斑があり、オビトンボとも呼ばれる。この翅の褐色斑の大きさは変異があり、帯状のものから、ほとんど消失しているものまである。地域によって、雌の型の出現頻度に違いがみられる。北海道のものは全て異色型、東北～中部地方では両型がみられ、近畿～九州地方ではほとんど全て同色型である。沖縄島産はすべて異色型で、翅の褐色斑が消失する傾向がある。特に、秋に出現する個体は小型で、翅の褐色斑が消失する傾向が強い。

近似種との区別：近似種なし。
 分布の概要：中国東北部～南部、朝鮮半島、日本および台湾に分布し、国内では北海道から琉球列島にかけて分布する。沖縄県内では沖縄島と久米島・伊是名島に分布し、石垣島からも記録がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較：1 属 1 種。
 生態的特徴：成虫は 4 月～11 月に現れる。季節消長は年 2 山型。若い個体は岸辺の植物に群がってとまる。成熟雄は岸辺になわばりをもち、植物に止まってなわばりを見張り、時々パトロールを行う。雌は単独で、水面低く飛んで、藻などに連続打水産卵を行う。夕方暗くなるまで活動する。
 生息地の条件：低地の抽水植物が繁茂する池、沼、湿地などに生息するが、沖縄島ではダムなど人工的な大きな池に生息しており、このような池の岸辺の抽水植物の茂った場所で見られる。
 現在の生息状況：沖縄島では中南部にある数か所のダムや池で確認されているにすぎない。久米島・伊是名島では生息地が 1 か所しかないようである。石垣島における生息状況は不明、少なくとも 1963 年以降の記録はない。

学術的意義・評価：雌の 2 型の出現率の地域差は興味深い問題であり、これを解明する材料として貴重である。
 生存に対する脅威：ダムや池沼の改修工事や土砂の流入。ボタンウキクサやホテイアオイなど水面を覆う水草の異常な繁茂による産卵場所の消失。かつて那覇市の龍潭池や金城ダムに多産したが、これらの池では浚渫、改修工事後、全く見られなくなった。

特 記 事 項：1959 年 8 月に石垣島で採集された標本（2 雌）が大阪市立自然史博物館に保管されているが、その後は石垣島から確認されていない。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原 記 載：Selys-Longchamps, M. E., 1883. Les Odonates du Japon. Ann. Soc. Ent. Belg., 27: 82-143.
 参 考 文 献：青柳 克, 2009. 沖縄県伊是名島からコフキトンボなど 4 種の新分布記録. 月刊むし, (466): 29-30.
 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執 筆 者 名：焼田理一郎

和 名：シオカラトンボ
 類 別：蜻蛉目（トンボ目） トンボ科
 学 名：*Orthetrum albistylum speciosum* (Uhler, 1858)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形 態：日本で最もなじみのあるトンボのひとつ。雄は腹長 30～40 mm、後翅長 35～44 mm。雌は腹長 32～41 mm、後翅長 35～44 mm。体色は黄褐色の地に黒斑がある。未熟のうち雌雄で体色に差はない。縁紋は黒色。成熟すると雄は腹部第 6 節まで青白色の粉を生じる。雌は緑色味が増して麦わら色になり、ムギワラトンボと呼ばれる。まれに雌でも雄のように白粉を帯びるものがある。

近似種との区別：ホソミシオカラトンボ *O. luzonicum* (Brauer) は、雌雄とも縁紋が褐色で、雄は成熟すると全身に青灰色の粉を生じる。

分布の概要：日本、台湾、朝鮮半島から中国東北部～中部に分布する。日本ではほぼ全国に分布し、普通に見られるが、沖縄県では沖縄諸島の沖縄島、渡嘉敷島、伊平屋島、久米島に分布が限られている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：シオカラトンボ属は日本に 9 種（その内の 1 種は 3 亜種に分けられる）分布し、そのうち 5 種 2 亜種が沖縄県に分布している。ハラボソトンボ *O. sabina* (Drury) は沖縄諸島・大東

<昆虫類>

諸島・宮古諸島・八重山諸島に、ホソミノシオカラトンボは、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、小浜島、波照間島、与那国島に、コフキショウジョウトンボ *O. pruinosum neglectum* Rambur は、八重山諸島に、オオシオカラトンボ中琉球亜種 *O. melania ryukyuense* Sasamoto and Futahashi は伊平屋島、沖縄島、渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島、久米島に、オオシオカラトンボ八重山亜種 *O. m. yaeyamense* Sasamoto and Futahashi は、石垣島、西表島、与那国島に分布する。他にタイワンシオカラトンボ *O. glaucum* (Brauer) が西表島及び石垣島から記録されているが、詳細は不明である。

生態的特徴： 県内では成虫は2月下旬～10月下旬に見られる。沖縄島では、平地の開けた環境にある池には本種が生息し、同属のオオシオカラトンボ中琉球亜種は丘や山手の木立の多い池に見られる。若い個体は水域をはなれ、草地などで生活する。成熟した雄は水辺にもどり、なわばりをもつ。交尾はなわばり周辺で草や地面にとまって行う。雌はなわばり内で連続打水産卵を行う。産卵中、雄は雌の上空をホバリングしながら警護する。幼虫は植物につかまり、あるいは泥底に浅く潜って生活する。

生息地の条件： 平地から低山地の池、沼、水田、湿地、河川の淀みなど広範な止水域に生息する。

現在の生息状況： 沖縄島では、かつて水田地帯に多く見られたが、水田の著しい減少により、生息地が局在化し、個体数が少なくなっている。離島からは最近の記録がなく、激減していると考えられる。

学術的意義・評価： 日本では、ほぼ全国に分布する普通種であるが、沖縄の個体群は最南端の個体群であり貴重。

生存に対する脅威： 平地から低山地の人間の生活に近い場所に生息するため、宅地開発等による生息地の破壊や池沼・河川の改修工事による、生息環境のかく乱。

特記事項： IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

原記載： Uhler, 1858. Descriptions of new species of Neuropterous Insects collected by the North Pacific Expedition under Capt. John Rodgers. Proc. Acad. Nat. Sci. Philad., 1858: 29-31.

参考文献： 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執筆者名： 焼田理一郎

和名： ハマコオロギ (リュウキュウハマコオロギ)

分類： 直翅目 (バッタ目) ヒバリモドキ科

学名： *Taiwanemobius ryukyuensis* Ôshiro et Ichikawa, 1997

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

形態： 体長は雄8～9 mm、雌8.5～10 mm。翅は無い。体背面は青灰色を帯びた白色で黒斑があり、光沢を帯びる。腹部腹面は淡青色。脚は淡い象牙色で黒斑がある。体色は生息地の砂礫に紛れて見失いやすい。

近似種との区別： 台湾産の *T. formosanus* Yang et Chang は、体サイズ、顔の形、頭胸部背面の色などが違うとされ、ハマコオロギより背面が暗色である。

分布の概要： 奄美諸島、沖縄島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： *T. formosanus* は台湾の東海岸に分布する。

生態的特徴： 満潮線付近の石下や漂着物の下にひそみ、潮が引くと潮間帯を徘徊する。野菜や肉片を食べることが確認されており、雑食性で打ち上げられた有機物を食べると推定される。周年発生と考えられるが、生活史はほとんど分かってない。

生息地の条件： 直径5～10 cm程度の玉石が積み重なる砂浜。県内の産地は小河川の流入がある場合が多い。台風時に避難できる十分な面積も必要と思われる。

個体数の動向： 2012年の大型台風通過後は個体数が激減し、3年後でも十分に個体数が回復していない状況であった。

現在の生息状況： 県内では沖縄島北部の東側海岸からしか知られていない。生息地の面積は極めて小さく、個体数は少ないと推定される。

学術的意義・評価： 中琉球の固有種で、琉球列島の成立過程を考察するうえで重要。

生存に対する脅威： 護岸工事など海浜部の開発。台風などの自然災害。原油流出による海洋汚染も脅威である。内陸からの汚水の流入も生息環境を悪化させる恐れがある。

原記載： Ôshiro, Y. and A. Ichikawa, 1997. Jpn. J. syst. Ent., 3: 277-280.

参考文献： 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名： 杉本雅志

和名： ホラアナゴキブリ先島諸島亜種 (ミヤコホラアナゴキブリ)

分類： 蜚蠊目 (ゴキブリ目) ホラアナゴキブリ科

学名： *Nocticola uenoi miyakoensis* Asahina, 1974

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU)

形態： 体長は雄4.5 mm、雌5.0 mm。小さく弱々しいゴキブリ。雄は細身で小さな翅がある。雌は無翅。複眼は退化し、線状の個眼の集まりか、またはこれを欠く。成虫は鉛色、幼虫は白色。

近似種との区別： ホラアナゴキブリ喜界島亜種 (キカイホラアナゴキブリ) *N. u. kikaisensis* Asahina は雄の前翅・後翅とも小さく鱗状。基亜種ホラアナゴキブリ *N. u. uenoi* Asahina の雄の前翅はより大きく、雄の第4腹

節の背板腺の彫刻は浅い。

- 分布の概要： 先島諸島の固有亜種。宮古島、石垣島、西表島、波照間島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： ホラアナゴキブリ属は、琉球列島を含む太平洋、インド洋および西アフリカ地域に、16種以上が分布している。日本からは1種3亜種が知られる。基亜種は沖縄島、与論島、沖永良部島に、喜界島亜種は喜界島に、先島諸島亜種は宮古諸島・八重山諸島に分布する。
- 生態的特徴： 洞窟やシロアリの巣を含む地下浅層に生息し、洞内に流入する有機物や菌類、小型コウモリ類の糞などを食べると考えられる。
- 生息地の条件： 鍾乳洞、防空壕、森林内のシロアリ巢中など多湿な環境。
- 個体数の動向： 詳細は不明だが、洞窟環境は各地で悪化しており、本種の個体数は減少傾向にあると推測される。
- 現在の生息状況： 宮古島では1972年以降の記録がない。
- 学術的意義・評価： 洞窟環境の指標種として重要。
- 生存に対する脅威： 鍾乳洞の破壊、水没。土地改良や観光整備などの周辺の開発。地下水位の低下による洞内の乾燥、や汚染、それに伴う小型コウモリ類の減少、消失も減少の要因となりうる。
- 特記事項： 得られている標本はわずかで、宮古島産と八重山諸島産の詳細な形態比較は今後の課題である。
- 原記載： Asahina, 1974, Mem. Natr. Sci. Mus, 7: 145-156, 1Pl.
- 参考文献： 日本直翅類学会（編），2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研，東京。
朝比奈正二郎，1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店，東京。
鈴木知之，2010. 西表島にてミヤコホラアナゴキブリをイエシロアリの巣から採集. 月刊むし，(474): 45.

執筆者名： 杉本雅志

- 和名： カマドウマ栗国島亜種
- 分類： 直翅目（バッタ目） カマドウマ科
- 学名： *Atachycines apicalis nabbieae* Sugimoto et Ichikawa, 2003
- カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

- 形態： 体長 17 mm 前後。褐色で後腿節の外側以外に明瞭な斑紋はない。後腿節下面のトゲは外側 0 本、内側 3~6 本。雄の擬腹板は平坦で上部側葉は薄く赤褐色を帯び、突出物を欠くか、かすかに突出する。
- 近似種との区別： 同島には他のカマドウマ科の昆虫は分布していない。
- 分布の概要： 栗国島の固有亜種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 本州、四国、九州に基亜種カマドウマ *A. a. apicalis* (Brunner von Wattenwyl)、屋久島に *A. a. yakushimensis* Sugimoto et Ichikawa、沖永良部島と与論島に *A. a. panauruensis* Sugimoto et Ichikawa、沖縄島・久米島・浜比嘉島・奄美大島・徳之島に *A. a. gusouma* Sugimoto et Ichikawa がそれぞれ分布する。
- 生態的特徴： 石灰岩洞窟とその周辺の森林に生息し、多化性と考えられるが、詳しい生態は分かっていない。雑食性と考えられる。
- 生息地の条件： 洞窟や周辺の樹林。
- 個体数の動向： 発見されて以来、個体数は減少していない。
- 現在の生息状況： 生息地の環境はほとんど変化しておらず、個体数も以前と同様に安定している。
- 学術的意義・評価： 生物地理の観点から貴重。
- 生存に対する脅威： 洞窟の破壊および消失、土地改良などの開発による森林の消失、地下水位の低下による洞内の乾燥。
- 原記載： Sugimoto, M. and A. Ichikawa. 2003. Tettigonia, (5): 1-48.
- 参考文献： 日本直翅類学会（編），2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研，東京。

執筆者名： 杉本雅志

- 和名： タラマハヤシウマ
- 分類： 直翅目（バッタ目） カマドウマ科
- 学名： *Diestrammena taramensis* Sugimoto et Ichikawa, 2003
- カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

- 形態： 大型のカマドウマ。体長 19~24 mm。全体褐色、後脚を中心に不明瞭な斑がある。後腿節下側のトゲは外側 0~1 本、内側 3~6 本。
- 近似種との区別： 多良間島に他のカマドウマ類は生息しない。オオハヤシウマ *D. nicolai* Gorochov によく似るが、体が小さく、後脚第一付節は幅広くなく、雄の擬腹板の上縁のくぼみがより深いこと、上部側葉の側角は角ばらないこと、産卵管が少し長めであることで区別できる。
- 分布の概要： 多良間島の固有種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： オオハヤシウマが石垣島と西表島に、ヨナグニハヤシウマ *D. hisanorum* Sugimoto et Ichikawa が与那国島に分布する。
- 生態的特徴： 石灰岩洞窟に生息し、成虫は6~8月に見つかっている。生活史や生態はほとんど分かってない。
- 生息地の条件： 洞窟と周辺の樹林が必要。
- 個体数の動向： 不詳。
- 現在の生息状況： 数ヶ所の小さな洞窟から見つかっている。個体数は少ない。

<昆虫類>

学術的意義・評価 : 生物地理上重要。
生存に対する脅威 : 洞窟の破壊、消失、水没。土地改良など生息地周辺の開発、地下水位の低下による洞内の乾燥。
原 記 載 : Sugimoto, M. and A. Ichikawa, 2003. *Tettigonia*, (5): 1-48.
参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : **アケボノアメイロウマ**
分 類 : 直翅目 (バッタ目) カマドウマ科
学 名 : *Neotachycines elegantipes* Sugimoto et Ichikawa, 2003
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 体長 7~12 mm。明るい橙褐色、後脚腿節に暗褐色の斑がある。前脚腿節末端内側のトゲは痕跡的。
近似種との区別 : 西表島に生息する他のカマドウマ類は、胸背部や前・中脚に斑紋がある。沖縄諸島に生息するハスオビアメイロウマ *N. obliquofasciatus* Sugimoto et Ichikawa に似るが、本種より脚が短く、前・中脚腿節先端の可動棘が短いこと、後腿節内側の斑紋が上面に向かって薄くなることで区別できる。

分布の概要 : 西表島の固有種。
生態的特徴 : 石灰岩洞窟に生息する。生活史や生態はほとんど分かっていない。
生息地の条件 : 不明。比較的多くの個体が見つかった石灰岩洞窟は、水が枯れ、一部で崩落が起きていた。
個体数の動向 : 数ヶ所の石灰岩洞窟から低密度で見つかっており、個体数が少ない。
現在の生息状況 : 西表島内において石灰岩地域は限られ、本種の生息数は少ない。
学術的意義・評価 : 生物地理上重要。
生存に対する脅威 : 洞窟の破壊、消失。土地改良など開発。
原 記 載 : Sugimoto, M. and A. Ichikawa, 2003. *Tettigonia*, (5): 1-48.
参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : **ウスイロキマダラウマ**
分 類 : 直翅目 (バッタ目) カマドウマ科
学 名 : *Neotachycines pallidus* Sugimoto et Ichikawa, 2003
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 体長 9.3~11.7 mm。淡赤褐色で斑紋はほとんどなく、前胸の背面に弱い光沢がある。後脚腿節のまだら模様は不明瞭で、下側のトゲは外側 0 本、内側 1~2 本。
近似種との区別 : 宮古島と伊良部島に他のカマドウマ類は知られていない。イブシキマダラウマ *N. obscurus* Sugimoto et Ichikawa やボカシキマダラウマ *N. mira* (Gorochov) によく似るが、本種は体色が淡く、ほとんど斑紋がなく、雌の産卵器が後腿節長の 55%以上と長いことで区別される。

分布の概要 : 宮古諸島の固有種。宮古島と伊良部島に分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 奄美・沖縄諸島にイブシキマダラウマ、石垣・西表島にボカシキマダラウマが分布する。
生態的特徴 : 地下水を伴う石灰岩洞窟から見つかっている。成虫は 8 月と 12 月に採集されている。
生息地の条件 : 地下水が流れる石灰岩洞窟。
現在の生息状況 : 数ヶ所の小さな石灰岩洞窟から見つかっているだけで、個体数は少ない。
学術的意義・評価 : 生物地理上重要。
生存に対する脅威 : 洞窟の破壊や消失。土地改良などの開発、地下水位の低下による洞内の乾燥。
特 記 事 項 : 「琉球列島産昆虫目録 増補改訂版 (東清二監修, 2002, 沖縄生物学会)」のミヤコカマドウマ (*Atachycines* sp. 3) は本種のことである。
原 記 載 : Sugimoto, M. and A. Ichikawa, 2003. *Tettigonia*, (5): 1-48.
参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : **オキナワキリギリス**
分 類 : 直翅目 (バッタ目) キリギリス科
学 名 : *Gampsocleis ryukyuensis* Yamasaki, 1982
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 頭部から翅端まで 51~58 mm (体長は 37~48 mm)。体の大部分が緑色で、背面は褐色、翅に 1 列の黒斑が点在するが、消失する傾向がある。
近似種との区別 : 本州に分布するヒガシキリギリス *G. mikado* Burr は頭部から翅端まで 25~42 mm で翅が短く、雄の発音器が大きく、体は褐色の部分が多く、翅の黒斑は 3 列まで発達する傾向にある。本州、四国、九州から奄美大島にかけて分布するニシキリギリス *G. buergeri* (de Haan) は頭部から翅端まで 29~44 mm で、本種に酷似する。本種は大型で脚と翅が長いことで上記 2 種と区別できるが、ニシキリ

- 分布の概要 : ギリスとの確実な識別は現状では困難である。
 沖縄島、伊平屋島、野甫島、伊是名島、伊江島、瀬底島、古宇利島、屋我地島、栗国島、久米島、宮古島、伊良部島。
- 生態的特徴 : ススキ原などの草地で見られる。成虫は6~9月に出現する。主に昼間に「ギー」「チョッ」と断続的に鳴く。雑食性で、幼虫中齢以降は肉食性が強くなる。土中に産卵し、卵越冬する。
- 生息地の条件 : 低木やススキが混生する草地。
- 個体数の動向 : 減少傾向にあり、沖縄島のいくつかの生息地では近年確認されてない。宮古島では10年以上確認されておらず、絶滅した可能性がある。伊良部島でも近年ほとんど確認されていない。
- 現在の生息状況 : 沖縄島では本部半島周辺に個体数が多いが、その他の地域では生息地が点在し個体数が少ない。
- 学術的意義・評価 : 分子系統解析の結果から、本種は大陸からの遺存種と示唆されており、琉球列島の生物相の成り立ちを考えるうえで貴重である。
- 生存に対する脅威 : 開発などによる生息地の消失、除草剤や殺虫剤の散布。もし、他の地域から移入された別種のキリギリスと交雑が可能であれば、これは本種の生存に大きな脅威となる。
- 特記事項 : 最近、宮古諸島の下地島で発見されたが、在来個体群か移入個体群か、検討を要する。
- 原記載 : Yamasaki, T., 1982. *Annotnes. zool. jpn.*, 55(2): 118-124.
- 参考文献 : 小浜継雄, 2016. 伊是名島でオキナワキリギリスを採集. *Pulex*, (95): 696-697.
 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
 奥山風太郎, 2016. 鳴く虫ハンドブック. 文一総合出版, 東京.
- 執筆者名 : 杉本雅志

- 和名 : ツダナナフシ
- 分類 : 竹節虫目 (ナナフシ目) ナナフシ科
- 学名 : *Megacrania tsudai* Shiraki, 1937
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD) (ヤエヤマツダナナフシ)
- 形態 : 体長 101~119 mm、体幅 8~9 mm、太い体型の大型種。触角は短い。背面は濃緑色で光沢がある。翅と体腹面は黄緑色。
- 近似種との区別 : 県内に近似種は生息していない。
- 分布の概要 : 宮古島、石垣島、西表島。国外では台湾(南端)、緑島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の近縁種はフィリピンからニューギニア、オーストラリア北部にかけて分布する。
- 生態的特徴 : 海岸のアダン林で見られる。成虫は7~10月に多い。日中は葉と葉の隙間や葉の中心の溝に嵌っており、夜間、アダンの葉を食べる。前胸からミント臭の液を噴射する。単為生殖で、雄は飼育下の1例しか知られていない。産卵は落下式で、アダンの葉腋に糞とともに溜まっている。卵が海流に乗って分布を広げると考えられる。
- 生息地の条件 : 海岸のアダン群落。
- 個体数の動向 : 従来知られていた複数の生息地で確認できなくなっており、個体数は減少傾向にある。
- 現在の生息状況 : 西表島のいくつかの生息地は近年消失、もしくは生息が確認できなくなっている。宮古島では近年確認できないという。石垣島の状況は不明。
- 学術的意義・評価 : *Megacrania* 属の北限種。
- 生存に対する脅威 : アダン林の破壊。採集圧。
- 特記事項 : 単為生殖種で飼育法が確立されている。
- 原記載 : Shiraki, T., 1933. *Dobutugaku Zasshi*, 45(532-533): 109.
- 参考文献 : 市川顕彦, 2015. ヤエヤマツダナナフシ. “レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 456.
 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
- 執筆者名 : 杉本雅志

- 和名 : ダイトウヒメハルゼミ
- 分類 : 半翅目 (カメムシ目) セミ科
- 学名 : *Euterpnosia chibensis daitoensis* Matsumura, 1917
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形態 : 体長は 25~30 mm、前翅の開張は 55~64 mm、体は細長く、体表はやや光沢があり、胸背は褐色と淡緑色で明瞭な斑紋はない。頭部前縁と額頭、翅先端部は黒色、腹背の節間膜は淡く、腹部に淡色横帯がある。個体により胸背がかなり黒化するものがある。雄の腹弁は小さく、両側の弁はかなり離れている。
- 近似種との区別 : 本属はヒマラヤ東部から日本にかけて約 20 種が知られ、台湾では種類がとくに多い。日本では本種 (ヒメハルゼミ *E. chibensis*) の他に、沖縄諸島固有のオキナワヒメハルゼミ *E. okinawana* Ishihara と八重山に分布するイワサキヒメハルゼミ *E. iwasakii* (Matsumura) の 2 種が生息している。さらに、ヒメハルゼミは原名亜種のヒメハルゼミ *E. ch. chibensis* Matsumura、と本亜種に分けられている。オ

<昆虫類>

キナワヒメハルゼミは頭部が幅広く、雄の第8腹胸背板に白粉を厚く装い、胸背の黒条が細い。ヒメハルゼミは頭部が前胸背の最大幅より狭く、体背面の斑紋は明瞭で、黒条は太く明瞭、雄の第8背板は白粉で覆われず、各節間膜が淡色であるなどの違いで分けられる。イワサキヒメハルゼミはヒメハルゼミと色彩、斑紋が似るが、体が細く、胸背の黒条が細いなどの違いがある。

分布の概要： 大東諸島（南大東島・北大東島）の固有亜種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 全ての種・亜種の分布は全く重ならない。ヒメハルゼミは徳之島から本土にかけて分布し、ダイトウヒメハルゼミは南北大東島に分布し、オキナワヒメハルゼミは沖縄島とその周辺離島（伊平屋島、渡嘉敷島、久米島）に、イワサキヒメハルゼミは八重山諸島（石垣島、西表島、与那国島）に分布する。

生態的特徴： 本種の成虫は3月上旬から7月下旬にかけて出現する。南大東島での最盛期は3月下旬から4月中旬、北大東島での最盛期は5月上旬である。本種は南北大東島ともに岩礁で囲まれ、その上に成立しているアダン、ハマゴウ、クサトベラなどからなる海岸林に生息する。また、南大東島ではその内側の外幕を形成する林に生息する。生息植物としてアダン、シマグワ、ガジュマル、シャリンバイ、モクマオウ、ピロウ、ススキなどが確認されている。

生息地の条件： 本亜種が生息していくには安定した十分な湿気のある森林の存在が必要だと考えられる。農薬は葉害が少ないものを少量散布しており、その面からの負の要因は減少したといえる。

個体数の動向： 北大東島では最良の生息地が中半破壊されたことにより、激減している。

現在の生息状況： ダイトウヒメハルゼミは1950年代までは島の外幕や内幕と呼ばれる防風林や島の中央部の森に生息していた。1960年代になってサトウキビ害虫の発生に対してBHCなどの有機塩素系殺虫剤が使用されていたが、抵抗性系統の害虫が発生するようになり、それにつれて薬剤散布量が2~3倍にも増加した。その結果、農薬害から逃れた個体群が海岸のアダン林や外幕の一部で生き伸びることができ、現在まで生存していると考えられる。しかし、海岸のアダン林は浅いサンゴ石灰岩土壌で乾燥しやすいことや、潮風に見舞われることが多く生息環境は厳しい。南大東島では、局所的ながらも生息数がやや安定しているが、北大東島では主要生息地が道路建設で大きく分断され、生息に大きな打撃を与えている。

学術的意義・評価： 沖縄島が大陸島であるのとは違って南北大東島は海洋島であり、沖縄島とは400kmも離れている。ダイトウヒメハルゼミの沖縄島由来説には疑問が生じている。南大東島の開拓は1899年に主として八丈島からの開拓者によって始められた。本亜種は1917年に記載されているので、タイプ標本はそれ以前に採集されたものである。開拓後わずか10年そこそこである。そのような期間に人為的に琉球のどこから植物とともに持ち込まれたのだろうか？遺伝子構造等の比較から、沖縄島産は固有の別種であり、本亜種は徳之島産に近いことがいわれている。

生存に対する脅威： 北大東島個体群は環境破壊により、主生息地が悪化（道路建設による分断）し、決定的なダメージを受けた。

特記事項： 南・北大東島に生息する唯一のセミである。分布域がきわめて狭い。北大東島個体群は危機的な状況である。本個体群が絶滅する危険は高く、北大東島産は「絶滅危惧IA類(CR)」として扱うのが妥当と考えられる。

原記載： Matsumura, 1917. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 6: 203.

参考文献： 林正美・税所康正, 2015. 改訂版 日本産セミ科図鑑. 誠文堂新光社, 東京.
奥土春夫, 1999. ダイトウヒメハルゼミの生態. 沖縄生物学会誌, 37: 29-36.
佐々木健志・山城照久・村山望, 2006. 沖縄のセミ. 新星出版, 那覇.

執筆者名： 林正美

和名： マダラアシミズカマキリ

分類： 半翅目（カメムシ目） タイコウチ科

学名： *Ranatra longipes* Stål, 1861

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 呼吸管を除く体長は24~29mm。体は黄褐色~灰褐色で、呼吸管は前翅より長い。前脚はとくに細長。

近似種との区別： 同サイズのヒメミズカマキリ *R. unicolor* Scott とは、前脚の長さ、その腿節中央部の2小突起の並び方、呼吸管の長さ（ヒメミズカマキリでは前翅長より短い）などで区別できる。

分布の概要： 八重山諸島（石垣島、小浜島、西表島、与那国島）と、それ以南の台湾、タイ、インドに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近似種のヒメミズカマキリは沖縄諸島・大東諸島以北に分布し、わが国ではこれら2種が同所的にみられる場所はない。

生態的特徴： 抽水植物などの水生植物が豊富な池沼や水路に生息する。水中で生活し、水草にとまって他の水生小動物を捕食する。

生息地の条件： 水草の豊富な池沼や水路（止水域）。

個体数の動向： 減少傾向にあるが、大きな変化は見られない。

現在の生息状況： 局所性がみられる。

学術的意義・評価： 大型水生半翅類で、水系環境の自然度を知る上で、指標となる種である。

生存に対する脅威： 水質汚濁と水系の開発、水田や池沼の減少で個体数は少ない。

特記事項： 西表島や与那国島では比較的普通にみられたが、近年は減少し、生息地も大幅に縮小した。水田放棄、開発による陸水域消失に起因すると思われる、早急な保護対策が必要である。

原記載： Stål, 1861, Öfvers. Kongl. Vet.-Akad. Förh., 18: 203.

参 考 文 献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : ツヤセスジアメンボ

分 類 : 半翅目 (カメムシ目) アメンボ科

学 名 : *Limnogonus nitidus* (Mayr, 1865)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 細身の小型種で、体長は 6.7~9.2 mm。光沢のある黒色で、前胸背中央の黄色の縦線がない。腹端部 (第7腹節結合板) の両側は針状に後方に突出する。通常は長翅型であるが、ときに無翅型が現れる。

近似種との区別 : 同属の2種、セスジアメンボ *L. fossarum* (Fabricius) とホソミセスジアメンボ *L. hungerfordi* Andersen とは、前胸背の黄色条と腹端部の形状で区別できる。前胸背側方の黄色帯はセスジアメンボでは連続せず、腹端部が針状に突出するのは本種のみである。

分布の概要 : わが国では北大東島、南大東島、石垣島、与那国島から記録されている。国外では、中国からインドシナにかけて分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の3種の中では、本種がもっとも局所的な分布を示している。それらの島では他の2種も分布するが、生息環境が異なっている。また、本種の分布が大東島と石垣島の間が空白であることも奇異である。

生態的特徴 : ほぼ全面が木陰となる池沼や草で密に被われた水路など、暗い水面に生息する。産地がきわめて少ないので、琉球での生態についてはほとんどわかっていない。南大東島では林内の池などにみられ、浮葉植物上で静止しているのが観察される。同じような暗い水域に生息するヒメセスジアメンボ *Neogerris parvulus* (Stål) と棲み分けし、本種の方がやや明るい環境にみられる。

生息地の条件 : 暗い止水域。影をつくる森林や水草の存在も不可欠である。

個体数の動向 : 南大東島以外では、再発見されていない。

現在の生息状況 : 南大東島では局所的に生息しているが、個体数動向はほぼ安定している。その他の地域では不明。

学術的意義・評価 : 水生植物の豊富な水域環境の指標となる種である。

生存に対する脅威 : 生息に適した水域の減少。

原 記 載 : Mayr, 1865. *Verhandl. K.-K. Zool.-Bot. Ges. Wien*, 15: 443.

参 考 文 献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : トゲアシアメンボ

分 類 : 半翅目 (カメムシ目) アメンボ科

学 名 : *Limnometra femorata* Mayr, 1865

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 雄の方が大きい大型のアメンボで、体長は雄で 21~23 mm、雌で 17~19 mm。体背面は赤味を帯びた褐色で、中央には細い黒色の縦条紋がみられ、胸部側縁には淡黄白色の縦条線が走る。腹部背面は強く橙色を帯びる。触角は長く、先端節 (第4節) は黄白色となる。中脚と後脚の先端部も黄白色。雄の中脚腿節端には内側に伸びる刺があり、その両側には10~13本の小さな疣状突起が1列に並ぶ。

近似種との区別 : 本属の種は他にない。体色、雌雄のサイズ、触角と脚の色などによって、他の沖縄産の種からは容易に区別できる。

分布の概要 : 与那国島だけに分布する。国外では、台湾 (緑島、蘭嶼のみ)、フィリピン、ボルネオ、マレーシアなどに広く分布する。

生態的特徴 : 成虫 (長翅型のみ) はほぼ一年中みられるが、幼虫は6~7月と10月頃に多い。全天が木々に被われた暗い谷の水溜まり (止水域または緩流域) に生息する。暗い水面では数個体~数十個体が生活し、普段はほとんど動かない。しかし、水網などで掬うと、すぐに飛び立ち、ジャングル内に逃げ込む。

生息地の条件 : 樹林内の暗い水域。大きな岩影の水溜まりにもみられることから、閉鎖的な水域に限って生息すると考えられる。

個体数の動向 : 生息環境の減少による局所化や個体数減少の傾向がみられる。

現在の生息状況 : 産地は局所的ながら、危機状況ではない。

学術的意義・評価 : 与那国島だけに分布し、西表島や石垣島からは発見されていない。台湾本土にも分布せず、明らかにフィリピン系昆虫の分布パターンを示す (八重山諸島の昆虫相を構成する重要な要素の一つ)。

生存に対する脅威 : 水系の開発。水域自体が消失するだけでなく、現水系が涸れていることが多い。

原 記 載 : Mayr, 1865. *Verhandl. K.-K. Zool.-Bot. Ges. Wien*, 15: 443.

参 考 文 献 : 林 正美, 1997. 琉球列島における水生・半水生半翅類の分布. *Rostraria*, (46): 17-38.
林 正美, 2003. カメムシ類 (半翅目) Hemiptera. “琉球列島の陸水生動物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂光 (編著), 東海大学出版会, 神奈川県.

林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三(編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執筆者名 : 林 正美

和名 : ヒメフチトリゲンゴロウ

分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

学名 : *Cybister rugosus* (Macleay, 1833)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 卵形の体で、背面は黒色で体側縁を縁取る黄色の条紋をもつ大型のゲンゴロウ。体長は27~33 mm。腹面は黒色で、後胸腹板と後基節の側方は黄褐色。

近似種との区別 : 同属のフチトリゲンゴロウ *C. limbatus* とコガタノゲンゴロウ *C. tripunctatus orientalis* は、いずれも後胸腹板と後基節が全体的に暗褐色を呈することにより、本種と区別できる。

分布の概要 : 県内では、沖縄島・伊平屋島・伊是名島・屋我地島・久米島・池間島・石垣島・西表島・与那国島および南大東島に分布する。国内では奄美大島・徳之島・沖永良部島及び与論島、国外ではミャンマー・インド・スリランカ等に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内から同属3種が知られ、フチトリゲンゴロウは宮古島・西表島および与那国島、トビイロゲンゴロウ *C. sugillatus* とコガタノゲンゴロウは県内ほぼ全域に分布する。

生態的特徴 : 水生植物が生えた池沼・湿地などの止水域に生息する。深いダムから浅い湿地まで、多様な水域で見られる。

生息地の条件 : 水生植物が繁茂する水域が必要である。

個体数の動向 : 1995年頃までは、沖縄島や西表島で多くの個体が見られ、その他の地域にも少数が生息していた。

現在の生息状況 : 西表島では減少しており、八重山諸島の他の島も減少傾向にあると推測される。一方、沖縄島では良好な産地が複数確認されている。伊是名島・屋我地島・久米島・池間島および南大東島では少数個体が確認されている。

生存に対する脅威 : 圃場整備など池沼や湿地の開発、採集圧が指摘されている。

原記載 : Macleay, 1833. *Annulosa Javanica*, Paris, 4: 136.

参考文献 : 阿部光典, 1989. 沖縄県産 Hydradephaga の記録. 甲虫ニュース, (87, 88): 9-12.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.
北野 忠・河野裕美, 2014. 西表島において絶滅もしくは減少傾向にある大型水生昆虫. 西表島研究 2013, 東海大学沖縄地域研究センター所報, 37-44.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類(1). 北九州の昆蟲, 37(2): 69-76.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : オキナワスジゲンゴロウ

分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

学名 : *Hydaticus vittatus* (Fabricius, 1775)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 楕円形の体で、黒色の上翅に左右それぞれ2本の黄色の明瞭な縦条紋をもつ中型ゲンゴロウ。体長11~14 mm。頭部は黄褐色で後頭部が黒色、前胸背は黒色で両側縁は黄褐色となる。

近似種との区別 : 同属のリュウキュウオオイチモンジマゲンゴロウ *H. pacificus sakishimanus* は、上翅基部に黄色の横帯紋とそれに連なる不明瞭な斑紋があることにより、本種と区別できる。また、ウスイロシマゲンゴロウ *H. rhantoides* は、黄褐色の上翅全面に小黒色点紋を密に装うことにより、本種と区別ができる。

分布の概要 : 県内では、沖縄島・宮古島・石垣島および西表島に分布する。国内では屋久島・中之島・宝島・奄美大島・徳之島および沖永良部島、国外では中国・台湾・ミャンマー・ネパール及びインドに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内から同属2種が知られ、リュウキュウオオイチモンジマゲンゴロウは沖縄島・西表島および与那国島、ウスイロシマゲンゴロウは県内のほぼ全域に分布する。

生態的特徴 : 水草の茂った池沼や放棄水田などに生息する。水質の良い水域を好む。成虫は灯火によく飛来する。

生息地の条件 : 水生植物が豊富で、水質が良好な止水環境が必要である。

個体数の動向 : 1990年頃までは八重山諸島で多く見られた。

現在の生息状況 : 西表島ではいまだ多いが、石垣島では近年減少している。沖縄島では以前から稀な種であったと考えられ、現在も極めて局地的に見られるのみである。宮古島では、近年、採集例がない。

生存に対する脅威 : 湿地の開発や水田整備、農薬汚染、採集圧。

原記載 : Fabricius, 1775. *Syst. Ent. App.*, 825.

参考文献 : 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.
北野 忠・唐真盛人・水谷 晃・崎原 健・河野裕美, 2011. 西表島における中・小型ゲンゴロウ類の生息状況. 沖縄生物学会誌, (49): 121-133.
松井英司, 1991. 沖縄本島・石垣島・西表島の水生甲虫類. 甲虫ニュース, (94): 5-6.

森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : ニセコケシゲンゴロウ

分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

学名 : *Hyphydrus orientalis* Clark, 1863

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態 : 体長は3.8~4.5mm。体は短卵形。背面は黄褐色~赤褐色で、上翅に複雑な暗褐色紋があるが、この紋は個体によって変異が多い。触覚、口枝、脚は黄赤褐色。

近似種との区別 : 日本にはケシゲンゴロウ属 *Hyphydrus* が5種1亜種認められ、沖縄県内には本種とタイワンケシゲンゴロウ *H. lyratus* Swartz とコケシゲンゴロウ *H. pulchellus* Clark の3種が生息する。本種は、体型が短卵形であることでやや細いタイワンケシゲンゴロウと、後脛節の長いほうの端刺の縁は一方がノギリ状になることで、端刺の縁が滑らかなコケシゲンゴロウと区別される。

分布の概要 : 国内では琉球列島(沖縄島、西表島、与那国島)と本州(静岡県)で確認されている。国外では台湾などから知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 元々稀な種のように、沖縄県に広く分布する同属のタイワンケシゲンゴロウやコケシゲンゴロウと比較して本種が確認された島自体が少ない。

生態的特徴 : 放棄水田や水草の多い池沼などに生息する。生活史については明らかにされていない。

生息地の条件 : 水草が多く、水質の良好な池沼や放棄水田などから採集されているが、本種の生息に必要な環境要因の詳細については明らかではない。

個体数の動向 : 従来の記録が少なく、沖縄島や西表島、本州(静岡県)では近年の採集記録を聞かない。与那国島では既知産地の多くで本種が確認されていないことから、個体数は確実に減少していると考えられる。

現在の生息状況 : 与那国島では確実な産地は限られる。沖縄島・西表島・本州(静岡県)では近年の採集報告を聞かない。

学術的意義・評価 : 本州(静岡県)の個体群とは、雄の前・中跗節の形状や、雌の背面の光沢など、形態に差異がみられることから、本種の分類に関しては検討を要するものと考えられる。

生存に対する脅威 : 開発や水田の放棄等による湿地環境の消失。

特記事項 : 県内で近似種ケシゲンゴロウの古い記録がある。しかし、ケシゲンゴロウは本種と外見による区別が困難であるうえ、当時は本種の存在が認識されていなかった可能性が高い。また近年における県内でのケシゲンゴロウの記録がないことから、それらの記録は本種をケシゲンゴロウとして記録した誤情報の可能性がある。

原記載 : Clark, H., 1863. Trans. Roy. ent. Soc. Loud., (3) 1: 419.

参考文献 : 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.

北野 忠・記野 直人・長谷川 洋・北山 昭, 2000. 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録ー本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心としてー. 甲虫ニュース, (129): 7-9.

森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京.

野村 周平・紙谷 聡志, 1994. 与那国島で採集した水生甲虫(食肉亜目). 新筑紫の昆虫, 3: 14-16.

執筆者名 : 北野 忠

和名 : コウベツブゲンゴロウ

分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

学名 : *Laccophilus kobensis* Sharp, 1873

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 体長は3.4~3.8mm。体は逆卵形。背面は緑がかった黄褐色で、上翅には黒色の不明瞭な縦条模様があるほか、基部後方に浅いV字状の淡色横帯がある。腹面、脚も背面とほぼ同色である。

近似種との区別 : 日本に産するツブゲンゴロウ属 *Laccophilus* 11種中7種が琉球列島に分布する。このうち、本種にごく近縁のコウベツブゲンゴロウ種群としては、ツブゲンゴロウ *L. difficilis* Sharp とナカジマツブゲンゴロウ *L. nakajimai* Kamite, Hikida et Satô が知られる。両種とも体サイズがより大きく、前者は上翅がほぼ無紋であること、後者は上翅の基部に模様がなく、縦条模様が明瞭であることなどから区別が可能である。

分布の概要 : 国内では八重山諸島(石垣島、西表島)と本州、四国、九州で確認されている。国外では中国から知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 与那国島の固有種であるナカジマツブゲンゴロウを除き、琉球列島に産する同属他種は列島内に比較的広く分布する。

生態的特徴 : 池沼や水田で見られることもあるが、落ち葉が堆積したややすす暗い湿地に多い。産地は局所的であるが、生息地ではしばしばまとまって見られる。生活史は不明である。

生息地の条件 : 森林内およびその周辺部の湿地環境が残されていること。

個体数の動向 : 西表島では複数の既知産地で確認されなくなっている。さらに石垣島では近年の採集報告を聞かない。

<昆虫類>

いことから、本種は減少傾向にあると推察される。

- 現在の生息状況 : 西表島では、確実な産地は限られている。石垣島では近年の採集報告を聞かない。
学術的意義・評価 : 閉鎖的な湿地環境の指標種。本種は本州、四国、九州と広く分布するのに対し、南西諸島では八重山諸島の石垣島、西表島のみで確認されている点で、生物地理学的に興味深い。
生存に対する脅威 : 開発による湿地環境の消失や、農地整備等のための森林の伐採など。
原 記 載 : Sharp, D., 1873. Trans. Ent. Soc. Lond, 1873: 53.
参 考 文 献 : Kamite Y., N. Hikida and M. Satô, 2005. Notes on the *Laccophilus kobensis* Species-group (Coleoptela, Dytiscidae) in Japan. Elytra, Tokyo, 33(2): 617-628.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.
森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京.

執 筆 者 名 : 北野 忠

和 名 : ナカジマツブゲンゴロウ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科
学 名 : *Laccophilus nakajimai* Kamite, Hikida & M. Satô, 2005
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 体長は 3.9~4.6 mm。体型は卵型で、扁平。背面はやや緑がかった黄褐色で光沢がある。腹面は黄褐色。上翅に褐色の 6 縦条模様があるが、基部には模様がなく、幅広く黄褐色部が広がる。また、上翅背面中央部に W 字状の褐色斑紋が、やや後方の会合部から後端部にかけて逆 V 字状にみえる褐色斑紋がそれぞれある。頭部と胸部背面には目立つ模様はない。

近似種との区別 : 日本列島にはツブゲンゴロウ属ゲンゴロウ 11 種が分布し、そのうち 7 種が琉球列島に分布する。琉球列島に産する種の中ではコウベツブゲンゴロウによく似るが、コウベツブゲンゴロウでは背部の縦条模様のうち 2~3 列が基部に到達することや、上翅基部に模様があること、上翅背面の模様が明瞭な斑紋様にならないことなどから区別が可能である。また、本種の方がやや体サイズが大きい。その他の種とは上翅斑紋の特徴や体サイズ、体色等の特徴から区別が容易。

分布の概要 : 与那国島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 与那国島には同属のミナミツブゲンゴロウ、ウスチャツブゲンゴロウ、サザナミツブゲンゴロウ、シャープツブゲンゴロウの分布記録がある。いずれも琉球列島に広く分布する種である。

生態的特徴 : 森林内を流れる薄暗い細流の落ち葉の堆積した淀みや、草原内の細流に生息する。基本的に流水性種と考えられるが、浅い止水性の湿地でも採集されることがある。繁殖期を含めて生活史の大部分について明らかでない。

生息地の条件 : 森林や草原を伴った浅い流れの淀みのある水域。

個体数の動向 : 個体数に関する科学的データはないが、現在の与那国島の森林環境の状況は決して良い状態ではなく、保水力も低下していると考えられることから、個体数も減少傾向にあると推測される。

現在の生息状況 : 年によって生息地が干出することがあり、生息状況は不安定である。

学術的意義・評価 : これまでのところ与那国島でしか発見されておらず、生物地理学的に重要な種である。また、止水性種が多いツブゲンゴロウ属の中では珍しく、主に流れのある環境の淀みに生息しており、生態的にもきわめて特異である。

生存に対する脅威 : 森林環境の悪化による流水環境の不安定化は本種の生息に大きな影響を与えるものと予想される。したがって、森林伐採、河川開発、土地造成、道路建設、水質汚濁等による水環境の悪化は大きな脅威となる。

原 記 載 : Kamite, Y., N. Hikida and M. Satô, 2005. Elytra, Tokyo, 33(2): 622-623.

参 考 文 献 : Kamite, Y., N. Hikida and M. Satô, 2005. Notes on the *Laccophilus kobensis* species-group (Coleoptera, Dytiscidae) in Japan. Elytra, Tokyo, 33(2): 617-628.

執 筆 者 名 : 中島 淳

和 名 : ツマキレオオミズスマシ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ミズスマシ科
学 名 : *Dineutus australis* (Fabricius, 1775)
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 卵形の体で、背面は黒色をした中型ミズスマシ。体長は 7.8~8.4mm。

近似種との区別 : 同属のオキナワオオミズスマシ *D. mellyi* は体長 15~20mm と大きいこと、オオミズスマシ *D. orientalis* は上翅の側縁が黄色く縁取られ、先端部に顕著な刺状突起をそなえることにより、本種と区別できる。

分布の概要 : 県内では、沖縄島・伊平屋島・伊是名島・渡名喜島・宮古島・石垣島・西表島・小浜島および与那国島に分布する。国内ではトカラ列島および奄美群島、国外では台湾・マレーシア・スダ列島・フィリピン・ニューカレドニア・オーストラリアなどに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内では同属 2 種が知られ、オキナワオオミズスマシは沖縄島および八重山諸島、

生態的特徴 : オオミズスマシは県内のほぼ全域に分布する。主に池などの止水域に生息し、水面で生活する。水生植物が見られないコンクリート製貯水池でも目撃される。ときに、近縁種オオミズスマシと混じて生息していることがある。

生息地の条件 : 不明。

個体数の動向 : 1990年頃までは、沖縄島北部や八重山諸島（特に石垣島）では各地に見られ、とくに八重山諸島では個体数も多かった。

現在の生息状況 : 沖縄島・伊平屋島・渡名喜島・石垣島・西表島・与那国島などで少ないながら確認されており、生息環境は維持されていると思われる。一方、伊是名島・宮古島・小浜島などでは近年確認されていない。

生存に対する脅威 : 生息水域の消失、水質汚濁。

原記載 : Fabricius, 1775. Syst. Ent. App., 235.

参考文献 : 青柳 克, 2013. 渡名喜島の水生昆虫（トンボ・カメムシ・コウチュウ）. 琉球の昆虫, (37): 23-29.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.
松井英司, 1991. 沖縄本島・石垣島・西表島の水生甲虫類. 甲虫ニュース, (94): 5-6.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : **タイワンオオミズスマシ**

分類 : 鞘翅目（コウチュウ目） ミズスマシ科

学名 : *Dineutus mellyi mellyi* Régimbart, 1882

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧（NT）

形態 : 体長は15～20 mm。体は幅広い楕円型。背面は黒色で鋼鉄状の青い光沢がある。前肢・腹面は赤褐色で、中・後肢は黄褐色。

近似種との区別 : 日本にはオオミズスマシ属 *Dineutus* 3種が分布する。ツマキレオオミズスマシ *D. australis*、全国的に分布するオオミズスマシ *D. orientalis* を含め、全てが琉球列島に分布する。本種は体長が15 mmを越え、上翅側縁後方に刺状突起がなく側縁が様に丸まる点で、体長が15 mmに満たず、刺状突起がある他2種と区別できる。また、別亜種オキナワオオミズスマシ *D. m. insularis* とは、本亜種の方が光沢および体側縁の広がりや中央部の隆起がより強いこと、雄の交尾器中央片は先端へ狭まらないことなどで区別される。

分布の概要 : 本亜種は国内では与那国島からのみ知られ、国外ではインドから中国、台湾にかけて分布する。別亜種オキナワオオミズスマシは沖縄島と鹿児島県の宝島、徳之島、沖永良部島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本亜種は、国内では与那国島からのみ知られ、南西諸島に広く分布している同属2種や、複数の島に亘って分布する別亜種と比べて生息地そのものが限られる。

生態的特徴 : 木々に覆われたややうす暗い水域を好むようである。止水域で見られることもあるが、山間部にある小規模な流水域の淵で群泳していることが多い。生活史については不明である。

生息地の条件 : 水量が安定した山間部の流水域が存在すること。

個体数の動向 : 林道の整備によって流水域が消失したり、乾燥化が進んだりした場所があることから、減少傾向にあると推察される。

現在の生息状況 : 山間部の流水域であれば現在も生息していることが多い。しかし、降水量が極めて少ない年には水域が干上がることがあり、生息環境は不安定である。

学術的意義・評価 : 与那国島における山間部の流水域の指標種といえる。

生存に対する脅威 : 与那国島は山間部の面積が少なく、本種の生息地である水域自体が極めて限られている。そのため、小規模な土地の改変であっても本種の生息には大きく影響を及ぼす可能性がある。農地整理事業による土砂の流入や、干ばつ等の天災も脅威となり得る。また、本種は水面に生息していることから発見が容易なうえ、国内のミズスマシ科の中でも極めて大きいことから愛好家に人気があり、採集圧による個体数の減少も危惧される。

特記事項 : 複数の文献では、分布地として西表島・石垣島が挙げられているが、標本や採集データを伴った正式な記録はないことから、誤情報と考えられる。河川の本数が多く水量も豊富な両島に分布していないことは興味深い。

原記載 : Régimbart, 1882. Anns Soc. ent. Fr., (6)2: 399.

参考文献 : 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.
中根猛彦, 1987. 日本の甲虫(81). 昆虫と自然 22, (12): 36-40.
佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説(2). 甲虫ニュース, (38): 1-2.

執筆者名 : 北野 忠

和名 : **サトミヒラタガムシ**

分類 : 鞘翅目（コウチュウ目） ガムシ科

学名 : *Enochrus satonii* Nakane et Matsui, 1986

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態 : 長楕円状の体形で、黒色の中型ガムシ。体長は4.5 mm前後。小顎髯の第2節は全体ほぼ同じ太さで、

<昆虫類>

- 内側へ弱く湾曲する。上翅は後方へ程良く丸まり、中央部で最も幅広く、亜会合線をもつ。中胸腹板の隆起は高く大きく、球塊状で中央に小歯を有する。腹部第5節（末端節）の先端は湾入する。
- 近似種との区別 : 同属のウスグロヒラタガムシ *E. uniformis* は、体長が3.5 mm 前後と小さく、体が褐色ないし黒褐色であり、中胸腹板は先端が尖ることにより、本種とは区別ができる。キベリヒラタガムシ *E. japonicus* は、体長が5.5 mm 前後と大きく、中胸腹板は嚙状に突起することにより、本種とは区別ができる。
- 分布の概要 : 琉球諸島の固有種。沖永良部島・沖縄島・伊是名島・石垣島・西表島・小浜島および南大東島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内からは同属5種が知られ、チビヒラタガムシ *E. esuriens* 及びウスグロヒラタガムシは沖縄諸島および先島諸島、キベリヒラタガムシは沖縄島、キイロヒラタガムシ *E. simulans* は沖縄諸島、マルヒラタガムシ *E. subsignatus* は沖縄諸島および八重山諸島に分布する。
- 生態的特徴 : 水生植物がある池や湿地に生息する。
- 生息地の条件 : 植物が繁茂する止水域が必要である。
- 個体数の動向 : 1990年頃までは、各地に少数生息していた。
- 現在の生息状況 : 伊是名島および八重山諸島の3島では、近年、採集例がない。一方、沖縄島および南大東島では、2014~16年にかけて少数確認されている。沖縄島では、極めて局地的であるものの産地では安定して生息していると思われる。南大東島でも、生息状況は健全と思われる。
- 学術的意義・評価 : 琉球諸島の固有種であることから、同列島の多様性を評価する際に本種の存在は貴重である。
- 生存に対する脅威 : 不明。
- 特記事項 : キベリヒラタガムシは沖縄島に分布するとされているが、その分布記録の原典が不詳であること、「琉球列島の陸水生物（西田睦ら（編）、2003、東海大学出版会）」の水生甲虫リストに掲載されていないこと等から、本種の沖縄島の分布には疑問が残る。
- 原記載 : Nakane, T. and Matsui, E., 1986. *Journal of Law and Economics*, 2(2): 78.
- 参考文献 : 松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.
松井英司, 1991. 沖縄本島・石垣島・西表島の水生昆虫類 (続き). 甲虫ニュース, (95): 11-12.
- 執筆者名 : 青柳 克

- 和名 : コガタガムシ
- 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ガムシ科
- 学名 : *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* Redtenbacher, 1844
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態 : 長楕円状の体形で、背面は艶のある黒色をした大型ガムシ。体長23~28 mm。腹部には細毛が生え、光沢を欠く。脚は黒色。中胸腹板隆起の中央に溝を有し、後胸腹板突起は長く、腹部第4節に達する。
- 近似種との区別 : 同属のガムシ *H. acuminatus* は体長33~40 mm と大きく、後胸腹板突起は腹部第2節までと短く、腹部は無毛で光沢があること、近似種コガムシ *Hydrochara affinis* は体長16~18 mm と小さく、脚が赤褐色であることにより、本種と区別ができる。
- 分布の概要 : 県内では沖縄島・伊平屋島・伊是名島・伊計島・阿嘉島・久米島・池間島・石垣島・西表島・小浜島・与那国島・北大東島および南大東島に分布する。国内では本州・四国・九州・奄美群島など、国外では中国・朝鮮半島・台湾・東南アジア等に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内からは同属1種が知られ、ガムシは沖縄島や八重山諸島に分布する。
- 生態的特徴 : 水生植物が生えた湿地や水田に生息する。灯火に飛来する。
- 生息地の条件 : 植物が繁茂する止水域が必要である。
- 個体数の動向 : 1990年頃までは、伊平屋島・伊是名島・沖縄島および石垣島に多く見られ、その他の地域でも少数が生息していた。
- 現在の生息状況 : 沖縄島・伊平屋島・伊計島・池間島や八重山諸島などで生息を確認しており、低密度ながら生息状況は維持されている。伊是名島・阿嘉島および大東諸島は減少傾向と推測される。
- 生存に対する脅威 : 農薬汚染、湿地の開発。
- 原記載 : Redtenbacher, L., 1844. *Kaschmir und das Reich der Siek. Vierter Band. Zweite Abtheilung*, 513.
- 参考文献 : 北部ダム生態系保全検討委員会 (監), 2002. 沖縄北部地域における生物調査データ. 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 名護市.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.
佐藤正孝・楠井善久, 1984. 琉球列島伊平屋島、伊是名島、久米島の水生甲虫類. 北九州の昆虫, 31(1): 43-45.
- 執筆者名 : 青柳 克

- 和名 : オキナワマルチビガムシ
- 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ガムシ科
- 学名 : *Pelthydrus okinawanus* Nakane, 1982
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)
- 形態 : 上翅後半が狭まる、菱形に近い楕円状の体形をもち、全体が黒色のガムシ。体長は3 mm 前後。上翅

- の点刻列を欠き、小顎髭の第3節（末端節）は第2節より長い。
- 近似種との区別： 県内に近似種はいない。
- 分布の概要： 沖縄島の固有種で、中部（東海岸では金武町、西海岸では恩納村）以北に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 国内では、同属のマルチビガムシ *P. japonicus* M. Satô が本州と四国に分布する。
- 生態的特徴： ガムシ科の水生物としては珍しく、溪流に棲む。
- 生息地の条件： 流れにたなびく木の根や、瀬に堆積する落ち葉など、流水中で本種が掴まって生活できる環境が必要と思われる。
- 個体数の動向： 宜野座村以北に少数生息すると考えられていたが、近年、名護市や恩納村・金武町から多くの産地が確認された。
- 現在の生息状況： 国頭村や東村などの北部地域では局所的に分布し、生息密度も低い。名護市や恩納村などの中部地域では、広範にみられ生息密度も高い。
- 学術的意義・評価： 沖縄島の山地溪流に生息する在来昆虫のうち、自然の豊かな北部地域で産地・個体数が少なく、比較的開発が進んでいる中部地域で産地・個体数が多い種は稀であり、特異な分布特性をもつ種として注目される。
- 生存に対する脅威： 河川の開発による生息環境の消失や悪化。
- 原記載： Nakane, T., 1982. XXXV. Rep. Fac. Sci., Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.), (15): 101-111.
- 参考文献： 青柳 克, 2014. オキナワマルチビガムシ、沖縄島中部に多産す。琉球の昆虫, (38): 175-178.
藤原淳一・山下大輔, 2009. オキナワマルチビガムシの記録。甲虫ニュース, (166): 11-12.
- 執筆者名： 青柳 克

- 和名： **ダイトウヒラタクワガタ**
- 分類： 鞘翅目（コウチュウ目） クワガタムシ科
- 学名： *Dorcus titanus daitoensis* (Fujita et Ichikawa, 1986)
- カテゴリー： 絶滅危惧II類（VU） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧II類（VU）
- 形態： 体長は雄24～50 mm、雌21～33 mm。雄の大顎は太短く、小形の個体でも第一内歯がよく発達する。体型は幅広でずんぐりしており、脚は太短く脛節の幅がやや広い。体色は赤褐色から暗褐色であるが、褐色味の強い個体が多い。
- 近似種との区別： 日本の各亜種は、雄の交尾器の他に、体型、雄の大顎の太さや長さ、湾曲の程度、第一内歯の突出位置、裏面の微毛の有無などによって区別される。本種は、形態的にはオキナワヒラタクワガタ *D. t. okinawanus* に似るが、交尾器の顕著な差異に加え、体の幅が広く脚が太短い、雄の大顎の第一内歯がより基部に位置し、小型個体でもよく発達するなどの点で区別できる。
- 分布の概要： 大東諸島（南大東島・北大東島）の固有亜種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： ヒラタクワガタ *Dorcus titanus* の仲間は、東南アジアから日本にかけて広く分布しており、25 亜種に分類される。そのうち日本には 12 亜種が分布し、沖縄県には本亜種のほかに、オキナワヒラタクワガタ、サキシマヒラタクワガタ *D. t. sakishimanus* の3 亜種が生息する。
- 生態的特徴： 南大東島の防風潮林（内幕と外幕）、神社周辺の林、耕作地に残されたドリーネ周辺の林などに生息する。成虫は4～12月に出現し、幼虫はモクマオウやリュウキュウマツのほか、タブノキなどの広葉樹の朽木にも見られる。成虫は灯火にはほとんど飛来しない。野外での詳しい生態については不明である。
- 生息地の条件： 安定した生息地には、幼虫の生育に必要な朽木が常に供給されるまとまった林が必要である。
- 現在の生息状況： 大東諸島は森林のほとんどがサトウキビ畑に開発され、まとまった林は神社周辺と島を取り囲むように二本の細い帯状に残された防風潮林（内幕と外幕）だけである。さらに、防風潮林のほとんどがピロウ林であるため、本種の繁殖に必要な広葉樹やリュウキュウマツなどの朽木に乏しく、個体数は少ない。
- 学術的意義・評価： 分子系統解析の結果から、本種は日本に分布するヒラタクワガタの各亜種のなかで最も初期に分化したことが示されており、海洋島である大東諸島の昆虫相の形成過程やヒラタクワガタ類の種分化を研究する上で重要な種である。
- 生存に対する脅威： 開発による防風潮林の減少や台風被害による林内の乾燥化が進んでおり、生息環境の悪化が懸念される。また、繁殖に適した朽ち木が乏しい大東諸島では、朽木を崩しての過度な採集が個体数減少の大きな要因となっている。このほか、大東諸島には外来種であるオオヒキガエル *Rhinella marina* とミヤコヒキガエル *Bufo gargarizans miyakonis* が林内も含めて高密度で生息しており、捕食による影響も懸念される。
- 特記事項： 近い将来、絶滅危惧I類となる可能性もあり、生息環境を保全するために保護区の設置などを検討する必要がある。
- 原記載： 藤田 宏・市川敏之, 1989. 大東諸島におけるヒラタクワガタの1新亜種。月刊むし, (189): 28-29.
- 参考文献： 荒谷邦雄, 2015. ダイトウヒラタクワガタ。“改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, ぎょうせい, 東京, 264.
五箇公一・小島啓史, 2004. 外来昆虫の引き起こす問題 外国産クワガタムシの輸入をめぐる。環境動昆, 15(2): 137-146.
Goka, K., H. Kojima and K. Okabe, 2004. Biological invasion caused by commercialization of stag beetle in Japan. Global Environmental Research, 8: 67-74.
岡島秀治・荒谷邦雄（監修）, 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑。学習研究社, 東京, 300pp.
- 執筆者名： 佐々木健志

和名 : オキナワマルバネクワガタ
分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) クワガタムシ科
学名 : *Neolucanus okinawanus* Sakaino, 1984
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 雄は体長 42.4~70.0 mm、雌は 40.0~55.6 mm。雄雌とも体色は黒色で体形はやや平たい。雄の大あごの形は体の大きさによって変化し、小歯型から大歯型まで連続してみられる。雄の大あごには先端のすぐ後方に上向きやや大きな歯状突起があるが、中央付近の背面にはない。眼縁縁取りはほぼ直角に張り出す。

近似種との区別 : 日本にはマルバネクワガタ *Neolucanus* 属が 4 種分布し、そのうち県内には本種と、ヤエヤママルバネクワガタ *N. insulicola*、チャイロマルバネクワガタ *N. insularis* の 3 種が生息する。ヤエヤママルバネクワガタとは雄の大あごと眼縁の縁取りの形状で区別できる。奄美大島、徳之島に生息するアマミマルバネクワガタ *N. protogenitivus* は最も近縁であるが、アマミマルバネクワガタは大型個体であっても大あごが長くない。オキナワマルバネクワガタ、ヤエヤママルバネクワガタ、アマミマルバネクワガタの 3 種はマルバネクワガタ属 *maximus* 種群に属し近縁である。チャイロマルバネクワガタは昼行性で上翅が赤褐色で体長が 18.8~36.6 mm と小型であることで容易に区別できる。

分布の概要 : 沖縄島北部、久米島。
生態的特徴 : 成虫は 9 月中旬~10 月下旬に出現し、夜行性で発生初期はスダジイなどの古木に集まるがその後林床を歩き回るようになる。日中は樹洞内や間隙に隠れていて姿を現さない。幼虫はスダジイなどの古木の樹洞内に溜まった腐植質を食しており、孵化後 2 年目の夏に蛹化して秋に羽化する。

生息地の条件 : スダジイの大木が生育する原生林の自然林。
現在の生息状況 : 沖縄島北部や久米島のスダジイの大木が生育する原生林の自然林にのみ生息。
学術的意義・評価 : マルバネクワガタ属はインド北東部、中国南東部、東南アジアなど東洋区に分布し、琉球列島には東南アジアから渡来し種や亜種に分化しており、琉球列島の地史や進化を考える上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 大規模な森林伐採やダム、林道の建設により生息地が狭められており、また森林の奥深くまで延びる林道によりロードキルや営利目的の採集がされやすくなっており個体数の減少が危惧される。

特記事項 : 国内希少野生動物植物種 (2016 年)。
原記載 : Sakaino H., 1984. On a stag-beetle of the genus *Neolucanus* Thomson from Ryukyus. (Coleoptera, Lucanidae). *Elytra*, 12(1): 8-12.
参考文献 : 東 清二ほか, 1987. オキナワマルバネクワガタ. “沖縄昆虫野外観察図鑑 2”, 沖縄出版, 30-33.
東 清二, 2013. 沖縄昆虫誌. 榕樹書林, 272pp.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅱ). 保育社, 514pp.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. 日本コガネムシ上科標準図鑑. 学研教育出版, 432pp.
黒澤良彦・岡島秀治・山口 進, 1988. クワガタムシ. 保育社, 207pp.
定木良介・林 辰彦・土屋利行, 2014. 日本のマルバネクワガタ. むし社, 136pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : クメジマカブトムシ
分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科
学名 : *Trypoxylus dichotomus inachchina* Kusui, 1976
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長は 40~50 mm。雄は黒色で光沢が著しく、前胸背板の角状突起は極めて短小、雌の前胸背板中央の縦溝はわずかに認められる程度で、前縁付近では 2 又しない。

近似種との区別 : 同所的に近似種は分布していない。オキナワカブトムシ *T. d. takarai* は、雄では前胸背板の角状突起はより長くなり、雌の前胸背板中央の縦溝はわずかに浅く、前縁付近では弱く 2 又する点で異なるが、本亜種と区別しにくい個体もいる。日本本土亜種 *T. d. septentrionalis* や原名亜種 *T. d. dichotomus* は、より大型で体色はより赤みを帯び、雄の頭部や前胸背の角状突起はより長いなどの差異がある。

分布の概要 : 久米島の固有亜種。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島やその周辺離島にオキナワカブトムシ、九州から北海道にかけて日本本土亜種が、中国や朝鮮半島に原名亜種が分布する。

生態的特徴 : 成虫は初夏に現れ、林内や林縁の広葉樹の樹液を吸汁する。雄が大顎で樹皮を円盤状に削りとり、樹液の浸出を促す行動も見られる。灯火にも飛来する。幼虫は樹洞の腐植や腐朽した倒木内に見られる。

生息地の条件 : 常緑広葉樹林内やリュウキュウマツとの混交林に生息する。亜熱帯気候下にある本県では林床の腐植の分解が早く、日本亜種の幼虫の主要な繁殖場となる林床の腐植層 (腐葉土) はほとんど発達しないことから、樹洞のような点在する腐植環境に依存して生息している。

現在の生息状況 : 個体数は多くないと考えられる。沖縄島亜種が生息する沖縄島北部の森林と比較して、本亜種の生息する久米島は沢沿いでも下草が少なく、林内は比較的乾燥した場所が多い。また、樹洞のあるよ

うな大木も非常に少なく、沖縄島亜種以上に厳しい現状にあると考えられる。
 学術的意義・評価 : カプトムシの系統進化を研究する上で貴重。
 生存に対する脅威 : 開墾や開発に伴う伐採等の森林改変、林内施業による下草刈りによる林内の乾燥化。一部マニアによる生息樹木を破壊しての採集やトラップによる捕獲も脅威となりうる。
 参考文献 : 楠井善久, 1976. 沖縄のカプトムシについて. 昆虫学評論, 29(1/2): 51-54.
 佐藤文保, 1994. 久米島の小動物. “久米島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館, 那覇, 26-64.
 下地幸夫, 2012. 沖縄のカプトムシ. 新星出版, 那覇, 47pp.

執筆者名 : 西山桂一

和名 : クメジマボタル
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ホタル科
 学名 : *Luciola owadai* M. Satô et Kimura, 1994
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧IA類 (CR)

形態 : 体長は、雄 12~14 mm、雌 15~16 mm。頭部と前胸背は橙黄色、上翅は黒色で、雄は複眼がより大きい。雄は腹部の2節、雌は1節が光る。幼虫は淡灰褐色で腹部各節に1対の脚状の鰭をもつ。成熟幼虫は25 mm前後で伸縮性があり、底質に潜る際は体を細めて1.5倍以上に伸びる。

近似種との区別 : ゲンジボタル *L. cruciata* と似るが、本種は前胸背が橙黄色で、ゲンジボタルは桃色であることで区別される。

分布の概要 : 久米島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県内に近似種は生息しない。分子系統解析の結果、国内産ホタル類のなかでは、本州から九州に生息するゲンジボタルに近縁とされる。

生態的特徴 : 成虫は3月後半から5月中旬に発生し、平年的に4月中旬から下旬が最盛期。雄は2~4秒間隔で発光する。雄同士が発光をシンクロさせ、時に数百個体が同時明滅する。雌は下草や茂みで弱く光る。成虫は上流へ飛翔移動する。これは溪流性昆虫に特有の幼虫の流下への適応と考えられる。産卵は河川内の苔が生えた岩などに行われ、数十個体以上の集団産卵も観察される。1雌あたりの産卵数は200~500卵である。幼虫は川底の礫裏や底質中に潜み、巻貝の一種カワニナを捕食する。成熟幼虫は2月後半から3月中旬の降雨時に上陸し、川岸の土中や石下で蛹化する。

生息地の条件 : 山地や丘陵地にある河川、赤土等の堆積がない耕作地にある川、湧水由来の水路に生息する。樹林内の沢では発生は少ない傾向がある。これは低照度でカワニナやその餌となる珪藻類が少ないためと考えられる。開墾により片岸が開けた環境では、適度に日が差し込むためカワニナも多く、多数の成虫が見られる。

現在の生息状況 : ほぼ全域の川に生息するが、数十個体以上の成虫が見られる川は数か所程度であり、本種が発見された当時の千個体を越える群飛は見られなくなっている。

学術的意義・評価 : 幼虫が水生のホタルは日本では本種とゲンジボタル、ヘイケボタル *L. lateralis* の3種のみである。久米島にのみ産し、県内からは近縁種を含めて生息が確認されておらず、大陸由来の遺存種として琉球列島の成り立ちを考えるうえで貴重である。

生存に対する脅威 : コンクリート護岸やダム開発、開墾等の河川の改変、農薬や肥料、河川沿い農地や農地・圃場整備により排水性が良くなった側溝からの赤土流入。河川に堆積した赤土は底質にすむ幼虫の活動やえら呼吸を阻害すると推測され、赤土や堆肥の流入が多い河川ではカワニナを含め減少が著しくおもな減少要因と考えられる。世界的に貴重な水生ホタルであり、本種の生息域は久米島(面積63km²)に限られることから、赤土対策など河川環境の保全についての継続的な取り組みが望まれる。

特記事項 : 1993年に発見され、1994年に新種記載された。地元ではホタル館の職員や有志による精力的かつ継続的な保全の取り組みが行われ成果をあげている。沖縄県指定天然記念物(1994年)。国内希少野生動植物種(2017年)。

参考文献 : 大場信義・東 清二・西山桂一・後藤好正・鈴木浩文・佐藤安志・川島逸郎, 1994. クメジマボタルの形態・生活史および習性. 横須賀市博物館報(自然), (42): 13-26.
 沖縄県教育委員会, 1997. クメジマボタル生息実態緊急調査報告書 沖縄県天然記念物調査シリーズ第37集. 沖縄県教育委員会, 那覇市, 61pp.
 佐藤文保, 2003. クメジマボタルの生息地とキザトサワヘビが発見された場所との関連性について. 全国ホタル研究会誌, (36): 18-26.
 鈴木浩文・山崎柄根・大場信義, 1998. DNAからみた日本産ホタルの系統進化. 全国ホタル研究会誌, (31): 35-39.

執筆者名 : 西山桂一

4) 準絶滅危惧 (NT)

和名 : サキシマヤマトンボ

<昆虫類>

分類名：蜻蛉目（トンボ目） ミナミヤマトンボ科
学名： *Macromidia ishidae* Asahina, 1964
カテゴリー： 準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

腹長 37～42 mm、後翅長 36～42 mm、複眼は成熟すると鮮やかな緑色となる。翅胸は金属光沢のある緑青色で黄色斑がある。腹部は黒色で背面に細い黄色条がある。石垣島、西表島の固有種とされていたが、2005年に台湾から記録された。山間の森林に覆われた溪流に生息し、幼虫は植物性沈積物の多い淵にいる。成虫は4月下旬～7月下旬に見られ、早朝や夕刻に活動し、昼間は川沿いの林の中で休止している。若い個体は川の上空や滝つぼの周辺でせわしげに上下移動しながら摂食する。特に石垣島では、ダム開発や近年の大型台風の襲来による河川環境のかく乱により、生息域の環境が悪化し、雄のなわばり争いが見られないほど個体数が減少している。人為的な環境の改変、自然災害による土砂流入等、河川環境のかく乱や既知産地での過度な採集圧が脅威となっており、2015年に石垣市自然環境保全条例に基づく保全種に指定されている。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

参考文献：尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
Wen-Chi Yeh, Hsin-Chieh Tang, Szu-Lung Chen and Mei-Hua Tsou, 2006. Three dragonflies (Odonata) newly recorded in Taiwan. *Formosan Entomol.*, 26: 187-195.
渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執筆者名： 焼田理一郎

和名：ウスバカマキリ
分類名：螳螂目（カマキリ目） カマキリ科
学名： *Mantis religiosa sinica* Bazyluk, 1960
カテゴリー： 準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー： 情報不足（DD）

本種は旧北区、東南アジアからアフリカまで広く分布する。12 亜種に分けられており、日本産は亜種 *M. r. sinica* Bazyluk とされる。体長 52～66 mm。国内では北海道、本州、四国、九州、沖永良部島、沖縄諸島、先島諸島、国外では朝鮮半島、中国、ロシア沿海地方に分布する。体色に緑色型と褐色型がある。前脚の基節に黒斑、腿節に黄斑があり、基節の黒斑の中に黄白色斑をもつ個体もある。草地性で、河川敷、海岸、湿地周辺の草丈の低い草地、あるいは裸地が混じる低木や双子葉植物が生える場所で見つかる。草の根際や地表にすることが多く、卵囊も地表の石や枯木から見つかる。沖縄では5月頃と10月頃の2回、成虫が出現する。灯火に飛来する。

特記事項： IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。
参考文献：日本直翅類学会（編），2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名： 杉本雅志

和名：コバネササキリ
分類名：直翅目（バッタ目） キリギリス科
学名： *Conocephalus japonicus* (Redtenbacher, 1891)
カテゴリー： 準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー： 該当なし

体長 11～17mm。通常は短翅型で、翅の先が腹端に届く程度である。稀に現れる長翅型では翅先が腹端をはるかに越える。体色に緑色型と褐色型の2型がある。緑色型は、腹部の黄色や赤褐色が目立つ。褐色型は個体数が少ない。後腿節下面に3、4本の小さな棘がある。産卵器の長さは体長と同程度。後脚の腿節下面に棘がない。産卵器は短く、体長の半分程度である。北海道、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、沖縄島、久米島、池間島、石垣島、西表島、与那国島、南大東島、中国、台湾に分布。湿地草原性で、ヒメガマやカヤツリグサ科、イネ科の草地に生息する。沖縄での周年経過はよくわかっていない。夜間、草の上部に登り、花穂や種、新芽をかじる。雄は発音するが、周波数が高く聞き取りにくい。卵は単子葉植物の茎と葉の隙間に産み付ける。湿地の消失、河川改修などにより生息地は減少している。

参考文献：日本直翅類学会（編），2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名： 杉本雅志

和名：ウスモンナギサズ
分類名：直翅目（バッタ目） ヒバリモドキ科
学名： *Caconemobius takarai* (Ôshiro, 1990)
カテゴリー： 準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー： 該当なし

体長 9～13 mm。体色変異がある。体が濃褐色の個体は腹部背面に一對の淡色横斑が並ぶが、淡色の個体では黄褐色の

頭部と腹部背面の褐色横斑を残して大部分が乳白色となる。後脚脛節背面の可動棘は内側に1本、外側に3本。本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原、対馬、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島に分布する。潮間帯の岩の割れ目や海蝕洞などに群れで棲む。防波堤の隙間や消波ブロックに生息する場合もある。夜間活動性。夜間、潮が引くと岩上や砂浜を徘徊し、甲殻類や魚の死体を食べる。沖縄ではほぼ1年中成虫が確認できる。体サイズや体色に地域差があり、島ごとに遺伝的な分化が起きている可能性がある。

原 記 載 : Ôshiro, Y., 1990. *Akitu, Kyoto, N. S.*, (117): 1-6.
参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : ヨナグニヒシバツタ
分 類 : 直翅目 (バッタ目) ヒシバツタ科
学 名 : *Hyboella aberrans* Ichikawa, 1994
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

体長 10~12 mm。褐色でずんぐりした短翅のヒシバツタ。複眼は小さく、頭頂を越えない。前胸背は幅広く、末端はあまり突出せず、腹端と膝を越えない。背面はやや扁平で、前胸背中央部の隆起が目立ち、側縁は肩より末端3/4程度まで太く縁取られる。与那国島と台湾に分布する。与那国島では3~6月に成虫が確認されている。湿地性で、水辺にの枯草上や疎に草が生えた地面で見つかる。跳躍力は強く、しばしば水面に飛び出し、水面を泳いだり、水中の植物にしがみついたりする。湿地の減少にともない生息地が減少している。移入されたカエル類が本種を捕食している可能性がある。

参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : クロイワゼミ
分 類 : 半翅目 (カメムシ目) セミ科
学 名 : *Muda kuroiwae* (Matsumura, 1913)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

体長は18~23 mm、前翅の開張は46~55 mm。体は背面全体が鮮黄緑色で斑紋はない。複眼は灰白色~橙灰色で幅広く、その幅は両眼間とほぼ等しい。雌の産卵管は第9節を越えて伸びる。沖縄諸島に固有の種で、沖縄島、久米島、瀬底島、浜比嘉島に分布するが、産地は局所的である。常緑広葉樹林の林縁部を好み、成虫は5月末から7月にかけて出現する。ホルトノキ、クスノキ、ガジュマルなど常緑広葉樹の葉上や小枝に止まって鳴く。強い日周期をもち、鳴く時間(合唱時間)は夕刻の19時頃から30分間程度で短い。近年の詳細な調査によって新たな産地が発見されているが、逆に、開発等による森林減少によって産地が減少している。

参 考 文 献 : 林 正美・税所康正, 2015. 改訂版 日本産セミ科図鑑. 誠文堂新光社, 東京.
佐々木健志・山城照久・村山 望, 2006. 沖縄のセミ. 新星出版, 那覇.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : ヒメミズカマキリ
分 類 : 半翅目 (カメムシ目) タイコウチ科
学 名 : *Ranatra unicolor* Scott, 1874
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

ミズカマキリ *R. chinensis* Mayr に似ているが、小型で体長は24~32 mm。呼吸管が前翅より短く(体長の3分の2)、前腿節の突起は歯状で中央に近い所にあり、その斜後方に剛毛束をもった隆起がある点でミズカマキリと区別される。水田や池沼の水草の間に生息する。日本本土および琉球列島(沖縄島まで)、国外では朝鮮半島、ロシア極東、中国、カザフスタン、中東などに分布する。沖縄県では沖縄島、伊平屋島、久米島、北大東島、南大東島に分布し、日本では沖縄島が分布の南限である。水田の減少、農薬汚染などで個体数が減少し、現在では主に河川や山地の池沼に生息する。

参 考 文 献 : 朝比奈正二郎ほか, 1965. 原色昆虫大図鑑 III. 北隆館, 東京.
林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執 筆 者 名 : 林 正美

<昆虫類>

和名 : タイワンマツモムシ
分類 : 半翅目 (カメムシ目) マツモムシ科
学名 : *Enithares sinica* (Stål, 1854)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

体長は 8~9 mm。背面は光沢のある灰白色~銀灰色で、頭部は黄緑色または淡青色となる。触角の後方となる前胸背の側角付近は円く凹陷する。抽水植物の多い止水域 (池沼や水路など) を好み、陰となる水面近くに静止し、腹面を上にして泳ぐ。日本では沖縄島、宮古島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島に分布するが、沖縄島や宮古島からは近年の確認記録はない。国外では台湾、中国、ベトナム、フィリピンに分布する。

参考文献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執筆者名 : 林 正美

和名 : オキナワマツモムシ
分類 : 半翅目 (カメムシ目) マツモムシ科
学名 : *Notonecta montandoni* Kirkaldy, 1897
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

体長は 13~16 mm の大型美麗種。複眼は赤褐色、頭頂は淡黄色、前胸背に黒色紋があり、その周辺は淡黄色。前翅は赤褐色~赤橙色で黒点を散在し、膜質部は黒色。日本では沖縄島 (屋我地島を含む) だけに分布する。国外では中国、ミャンマー、インドに分布する。明るい開放的な水溜まり、山地の木陰となる池沼など、さまざまな止水域に局所的に生息するが、開発などによって生息地が縮小ときに消失している。

参考文献 : 東 清二ほか, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑 3. 沖縄出版, 沖縄
林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執筆者名 : 林 正美

和名 : サンゴアメンボ
分類 : 半翅目 (カメムシ目) サンゴアメンボ科
学名 : *Hermatobates schuhi* Polhemus et Polhemus, 2012
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

ピロッド状の黒色で、多数の毛が生えているため、灰黒色にみえる。左右の複眼は大きく離れ、胸部がきわめて大きく、一部の腹節と癒合する。腹部は特に短く、胸部後端の上側に付着する程度であり、後脚は体の後端近くにあるようにみえる。雄前脚の腿節と脛節は太くなり、内側 (腹面) には顕著な棘がある。体長は 3.4~4.0 mm。最近、学名が変更されている。干潮時に活動し、海面をハエのように敏捷に滑走する。日本ではトカラ列島の中之島と宝島、奄美大島、沖縄島、渡嘉敷島、久米島、石垣島、西表島に分布する。国外ではオーストラリア区に分布する。近年、陸地からの多量の赤土流失により本種の生息しているサンゴ礁域の海水が濁り、赤土粒子の付着によって本種の生息環境が悪化している。

参考文献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.
Polhemus, J. T., and D. A. Polhemus, 2012. A review of the genus *Hermatobates* (Heteroptera: Hermatobatidae), with descriptions of two new species. *Entomol. Am.*, 118: 202-241.

執筆者名 : 林 正美

和名 : サンゴミズギワカメムシ
分類 : 半翅目 (カメムシ目) ミズギワカメムシ科
学名 : *Salduncula decempunctata* Miyamoto, 1963
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

長翅型のみで、体長は 2.5~3.4 mm。体背面は黒色~黒褐色で、前翅上に約 10 個の黄白色紋をもつ (その数や大きさには変異がある)。サンゴ礁地帯および岩礁地帯の潮間帯に生息し、干潮時の晴れ間に岩上を断続的に歩き回り、驚かすと跳ね、時に短距離を飛翔する。日本ではトカラ中ノ島、奄美大島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島、波照間島に分布する。

参 考 文 献 : 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (編), 東海大学出版会, 神奈川県.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : **メダカダルマカメムシ**
 分 類 : 半翅目 (カメムシ目) カスミカメムシ科
 学 名 : *Astroscopometopus gryllocephalus* (Miyamoto, Yasunaga et M.Hayashi, 1996)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長は約4mm。体背面は光沢のある褐色で、前翅上に2対の不明瞭な淡褐色の円い紋をもつ。体形では標準的なカスミカメムシだが、頭部は著しく縦長で扁平となり複眼は最上部にある。触角は複眼の下方から生じ、口元から生えているように見える。本種はダルマカメムシ亜科に属し、狭い頭頂には2個の単眼がある。3~4月に山地の良好な照葉樹林に生息し、林縁に生育するシマトネリコの樹皮下で発見されるが、稀である。捕食肉食性と考えられるが、詳しい食性はわかっていない。石垣島と西表島の固有種。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫 (編), 2001. 日本原色カメムシ図鑑 第2巻. 全国農村教育協会, 東京.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : **タカラサシガメ**
 分 類 : 半翅目 (カメムシ目) サシガメ科
 学 名 : *Elongicoris takarai* Hidaka et Miller, 1959
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

体長は25~30mmの細長いカメムシ。体は淡黄褐色で、時に橙色を帯びる。腹部腹面の中央には暗色の縦条紋がある。主として密生したチガヤからなる、日当たりのいい乾性草原に生息する。近年の放牧地や農耕地の造成によるチガヤ草地の減少によりその数が少なくなった。沖縄島、石垣島、西表島に分布する。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫 (編), 2001. 日本原色カメムシ図鑑 第2巻. 全国農村教育協会, 東京.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : **ミヤモトサシガメ**
 分 類 : 半翅目 (カメムシ目) サシガメ科
 学 名 : *Stachytropha miyamotoi* Hidaka et Miller, 1959
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長は15~17mmで、体形は前種に似て細長い。腹端部はやや広がり扁平となる。光沢のない淡黄褐色で、触角や中脚はとても短い。中胸背小楯板は中央に深い縦溝があり、左右二つに分かれているように見える。前脚の腿節と脛節には数本ずつの頑強な刺がある。長翅型だが、前翅端は腹端に達せず、第7腹節中程までである。日本固有種で、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から記録されている。イネ科草本やカヤツリグサ類が優占する乾性草原にみられるが、時に湿地環境でも発見される。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫 (編), 2001. 日本原色カメムシ図鑑 第2巻. 全国農村教育協会, 東京.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : **イワサキヘリカメムシ**
 分 類 : 半翅目 (カメムシ目) ヘリカメムシ科
 学 名 : *Dasynus biguttatus* (Matsumura, 1913)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長15~20mm。体は暗黄褐色で、前翅革質部先端付近 (前翅中央付近) に淡色の横条紋がある。体腹面は黄褐色で、緑色を帯びるもの、橙色を帯びるものなど、色彩に変異がある。日本では沖縄島、石垣島、与那国島に分布する。国

<昆虫類>

外では台湾から記録されている。石垣島では琉球石灰岩地帯にみられるオオクサボク（ウドノキ）の粘性のある実から吸汁しているのが確認されている。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (編), 2012. 日本原色カメムシ図鑑 第3巻. 全国農村教育協会, 東京.
金城政勝・林 正美, 1998. 琉球列島産カメムシ数種の寄生植物. *Rostria*, (47): 35-38.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : フチベニヘリカメムシ
分 類 : 半翅目 (カメムシ目) ヒメヘリカメムシ科
学 名 : *Leptocoris rufomarginatus* (Fabricius, 1794)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

大型種で、体長は 15~25 mm。体は光沢のない黒色で、頭部、前胸背の両側および前翅の前縁は顕著に紅色となる。前翅膜質部は全体が黒色。日本では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。国外では台湾、東洋区、ミクロネシア、オーストラリア区から記録されている。海岸植生環境に局所的にみられ、アカギモドキに依存する。西表島の海岸林では、アカギモドキの実に同属のアカヘリカメムシ *L. augur* Fabricius と混生するのが観察されている。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (編), 2012. 日本原色カメムシ図鑑 第3巻. 全国農村教育協会, 東京.
金城政勝・林 正美, 1998. 琉球列島産カメムシ数種の寄生植物. *Rostria*, (47): 35-38.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : ホソツマジロカメムシ
分 類 : 半翅目 (カメムシ目) カメムシ科
学 名 : *Menida schultheissi* (Bredin, 1898)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

細身のカメムシで、体長は 5.5 mm 程度。体背面はやや光沢のある黒色で、前胸背の中央部・前翅革質部の大部分・中胸背小楯板の先端部および基側方にある 1 対の小斑などは淡褐色~黄白色である。頭部はきわめて大きく、その幅は体幅の 6 割を超え、触角は非常に長い。耕作地や林縁などの周辺にある、メヒシバが生育するような乾性草地の地表に発見されるが、産地は局所的で個体数も少ない。地上では素早く歩行する。日本ではトカラ中之島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島から記録され、国外ではフィリピンに分布する。

参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町.
石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (編), 2012. 日本原色カメムシ図鑑 第3巻. 全国農村教育協会, 東京.

執 筆 者 名 : 林 正美

和 名 : アマミヘビトンボ
分 類 : 広翅目 (ヘビトンボ目) ヘビトンボ科
学 名 : *Protohermes immaculatus* Kuwayama, 1964
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長は 28~42 mm、前翅の開張は 52~78 mm。体の大部分と翅の斑紋はレモンイエロー。幼虫は河川の上流域で流水中に生育し、水生昆虫などを捕食する。成虫は 4 月から 5 月に出現する。中琉球の固有種で、奄美大島、徳之島、久米島に分布する。沖縄県内では久米島だけに分布し、生息域も極めて限定される。奄美諸島産と久米島産とを比較すると、重要な分類形質である交尾器には差異がみられないが、翅の斑紋等に違いが認められ、久米島産は固有の個体群と考えられる。久米島にはキクザトサワヘビヤクメジマボタルなど河川に生息する遺存的な固有種が知られており、本種も大陸と陸続きであった時代の遺存種である可能性がある。生息域が小さな島の清流に限定されていることから、河川改修や赤土流入などによる生息環境の悪化が個体群の存続に強い影響を及ぼす懸念がある。

参 考 文 献 : 木村正明・林 文男, 2016. 日本産広翅目 (ヘビトンボ目) の最近の分類体系と和名について. 月刊むし, (541): 2-13.

執 筆 者 名 : 木村正明

和名 : コウトウコガシラミズムシ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガシラミズムシ科
 学名 : *Haliphus kotoshonis* Kano et Kamiya, 1931
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

逆卵形の体に小さめの頭部をもつ体長 3~4 mm の水生甲虫。上翅に亜合線を欠く。後基節板は腹部第 3 節までを覆い、側縁は縁取られない。県内では沖縄島・伊平屋島・久米島・石垣島・西表島および与那国島に、そのほか奄美大島や台湾などにも分布する。水生植物の多い池沼や湿地などに棲む。現在、県内各地での生息状況は維持されていると思われるが、今後、生息地の開発などにより数が減少する可能性がある。なお、近年、本種に近似する別種の存在が指摘されており、これまで本種として同定された標本・記録の中には、この近似種が混同されている可能性がある。本種は頭部に T の字状の黒い模様があるが、近似種は頭部に模様を欠く。

原記載 : Kano, T. and K. Kamiya, 1931. Trans. of the Kansai Ent. Soc., 2: 1-4.
 参考文献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 西原町.
 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), 2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : トビイロゲンゴロウ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科
 学名 : *Cybister sugillatus* Erichson, 1834
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

卵形の体で、背面は緑色を帯びた黒色をしたゲンゴロウ。体長 18~25 mm。県内に産するコガタノゲンゴロウ *C. tripunctatus orientalis* など同属の 3 種は、背面の体側縁に黄色の条紋を持つことにより、本種と区別ができる。県内では沖縄島・伊平屋島・伊是名島・久米島・池間島・石垣島・西表島・与那国島および南大東島、県外ではトカラ列島および奄美群島、国外では中国・台湾・東南アジア等に分布する。水生植物の茂る池沼や湿地、水田に生息する。現在、県内各地での生息状況は維持されていると思われるが、今後、生息地の開発や圃場整備などにより数が減少する可能性がある。

原記載 : Erichson, 1834. Nova Acta Leop. Carol., 16: 227.
 参考文献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 西原町.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : オオマルケシゲンゴロウ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科
 学名 : *Hydrovatus bonvouloiri* Sharp, 1882
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

背腹に強く膨隆した卵形の体を持ち、全体が暗褐色をした小型ゲンゴロウ。体長 3~4 mm。マルケシゲンゴロウ属中で本種のみが 3 mm を超えることから、同属他種と区別できる。県内では、沖縄島・伊平屋島・伊是名島・屋我地島・久米島・石垣島・西表島・小浜島および与那国島に分布する。国内では本州・四国・九州・甌島列島・トカラ列島、国外では中国・台湾・東南アジア等に分布する。水生植物が密生する池沼や湿地に生息する。現在、県内各地での生息状況は維持されていると思われるが、今後、生息地の開発などにより数が減少する可能性がある。

原記載 : Sharp, 1882. Sci. Trans. R. Dublin Soc., 2: 335.
 参考文献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 西原町.

執筆者名 : 青柳 克

和名 : シャープツブゲンゴロウ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科
 学名 : *Laccophilus sharpi* Regimbart, 1889
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

逆卵形で、上翅に波状斑紋をもつ体長 4 mm 程のゲンゴロウ。上翅の様子は基部で中断されるも、不明瞭な横帯を形成することで、同属他種と区別できる。県内では沖縄島・伊平屋島・伊是名島・伊計島・久米島・石垣島・西表島・小浜島および与那国島に、県外では本州・四国・九州・甌島列島・奄美群島などに、国外では中国・台湾・東南アジアなどに分布する。湿地、水田など浅い水域に生息し、灯火に飛来する。県内各地に見られるが、圃場整備など湿地の

<昆虫類>

開発により減少するおそれがある。

原 記 載 : Regimbart, 1889. Ann. Soc. Ent. Fr., 6(9): 151.
参 考 文 献 : 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 西原町.
執 筆 者 名 : 青柳 克

和 名 : ヤエヤママルバネクワガタ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) クワガタムシ科
学 名 : *Neolucanus insulicola insulicola* Y. Kurosawa, 1976
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

雄は体長 34.3~69.2 mm、雌は 38.4~57.0 mm。雄雌とも体色は黒色で体形はやや平たい。雄の大あごの形は体の大きさによって変化し、小歯型から大歯型まで連続してみられる。雄の大あごには、先端のすぐ後方と基部より 1/3 付近の背面に、上向きのやや大きな歯状突起がある。また、小歯型では先端後方の上向き突起は小さくなり、基部よりの突起は消失する。眼縁縁取りはほぼ直角かやや鋭角に張り出す。本種 (基亜種) は石垣島、西表島に分布する。与那国島には、亜種ヨナグニマルバネクワガタ *N. insulicola donan* が生息しており、体形が寸詰まりで丸みを帯びている。日本には本属が 4 種分布し、このうち県内には本種を含め、オキナワマルバネクワガタ *N. okinawanus*、チャイロマルバネクワガタ *N. insularis* の 3 種が生息する。沖縄島や久米島に分布するオキナワマルバネクワガタとは、雄の大あごと眼縁の縁取りの形状で区別できる。奄美大島、徳之島に生息するアマミマルバネクワガタ *N. protogenitivus* も近縁であるが、大型個体であっても大あごが長くない点が本種と異なる。本種と同所的に生息するチャイロマルバネクワガタは昼行性で、上翅が赤褐色で体長が 18.8~36.6 mm と小型であることから本種と容易に区別できる。成虫は 10 月初旬~12 月初旬にかけて出現する。夜行性で、発生初期はスダジイ、リュウキュウマツなどの古木に集まるが、その後林床を歩き回るようになる。幼虫はスダジイ、リュウキュウマツなどの古木の樹洞内に溜まった腐植質を食しており、孵化後 2 年目の夏に蛹化し秋に羽化する。石垣島では、天然林改良事業によりスダジイなどの古木が減少したため生息域が狭まっている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

参 考 文 献 : 東 清二ほか, 1987. ヤエヤママルバネクワガタ. “沖縄昆虫野外観察図鑑 2”, 沖縄出版, 26-29.
東 清二, 2013. 沖縄昆虫誌. 榕樹書林, 272pp.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社, 514pp.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. 日本コガネムシ上科標準図鑑. 学研教育出版, 432pp.
黒澤良彦・岡島秀治・山口 進, 1988. クワガタムシ. 保育社, 207pp.

執 筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : オキナワカブトムシ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科
学 名 : *Allomyrina dichotoma takarai* Kusui, 1976
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

沖縄諸島の固有亜種で、伊平屋島・沖縄島・瀬底島・伊江島に分布する。久米島には別亜種 *A. d. inchachina* が分布する。体長は 30~50 mm。雄は光沢のある黒色から黒褐色で、雌は一面に黄灰色の短毛を密生し光沢はなく暗褐色である。日本本土亜種 *A. d. septentrionalis* に比べ、体長に比べ雄の頭角と胸角の発達が悪い個体が多い。雌では前胸背板中央の縦溝が非常に浅く、前縁付近で横に弱く二分するなどの点で本土亜種と区別できる。沖縄島では、中部から北部地域にかけての森林に生息するが、中部や本部半島では分布は局所的で個体数も少ない。また伊平屋島、瀬底島、伊江島では採集記録が少なく、個体数は非常に少ないと推察される。分子系統解析の結果から、本亜種と久米島亜種は大陸などに分布する基亜種も含めた他の亜種とは遺伝的な差異が大きく、種としてのカブトムシの中では最も祖先的で独自性の高いことが示されている。森林伐採、ダムやゴルフ場建設のほか、中部地域での丘陵地の林や御嶽林の開発によって生息場所が狭められており、個体数は減少している。また、ペット用に移入された日本本土亜種が野外で繁殖している可能性も示唆されており、それらとの交雑や競合などによる本亜種の衰退が懸念される。

原 記 載 : 楠井善久, 1976. 沖縄のカブトムシについて. 昆虫学評論, 29(1/2): 51-54.
参 考 文 献 : 荒谷邦雄, 2015. オキナワカブトムシ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 5 昆虫類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 470.
掘 繁久, 1987. カブトムシ. “改訂沖縄昆虫野外観察図鑑 第 2 巻 甲虫目”, 沖縄出版, 沖縄, 82.
岡島秀治・荒谷邦雄 (監修), 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑. 学習研究社. 東京.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社, 大阪.

執 筆 者 名 : 佐々木健志

和名 : ノブオオオアオコメツキ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コメツキムシ科
 学名 : *Campsosternus nobuoi* Ôhira, 1966
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

体長は 30~35 mm、体全体が光沢のある緑青色ないし藍色の大型美麗種。触角は扁平で、第 3 節より先は鋸歯状を呈する。前胸腹板突起は水平状で太い。与那国島の固有種である。石垣島と西表島に生息する同属のヨツモンオオアオコメツキ *C. matsumurae* は前胸背板の両側前縁と後縁部に暗赤色の斑紋があり、体色が緑色である点で区別される。成虫は 6~8 月にみられ、日中、林縁を飛びまわり、カラスザンショウなどの樹液に集まる。また時として灯火に飛来する。幼虫は朽木内に住み他の昆虫類を食していると考えられる。狭小な与那国島では土地造成などの環境の変化により絶滅が危惧されるが、現時点での個体数は多い。

参考文献 : 青木一幸・鈴木 互, 2009. 月刊むし, (461): 62.
 大平仁夫, 1970. 日本のコメツキムシ. 昆虫と自然, 5(6): 15.
 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 保育社, 500pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : ノブオフトカミキリ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
 学名 : *Pebblephaeus nobuoi* (Breuning et Ohbayashi, 1966)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

体長は 15~22 mm。上翅端は内角が突出せず外角は短く突出する。上翅に灰白色の太くて密な微毛に覆われ、光沢を欠き無紋か不明瞭な波型の帯がある。触角は雄では茶褐色の単色か第 3~5 節がかすかに 2 色状、第 6 節基半で上翅端を越える。雌は第 3~6 節が茶褐色、灰白色の 2 色状、第 7 節で上翅端を越える。与那国島の固有種である。同島に生息する同属のウスイロフトカミキリ *P. yonagunii* は上翅端が強くえぐられ、内外角が鋭く尖ることで区別できる。また、石垣島、西表島に生息するイシガキフトカミキリ *P. ishigakianus* は上翅が細い褐色の微毛で被われ、波型の横紋が現れることで区別できる。成虫は 4~8 月に出現し広葉樹の枯枝などから得られる。幼虫はスダジイの根元から生えるひこばえなどを食している。森林伐採などの環境の変化により絶滅が危惧される。

参考文献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
 草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : タイワンハナダカバチ
 分類 : 膜翅目 (ハチ目) ギングチバチ科
 学名 : *Bembix formosana* Bischoff, 1913
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

体長は 13~18 mm、上唇が長く先端に向かって尖り「鼻高」の状態を呈す。胸から腹には黄白色と黒の縞模様の斑紋をもつ、美しく大型の狩人蜂である。本種の生態に関する報告例は少ないが、同属のニッポンハナダカバチ *B. niponica* と同様の生態と考えられる。本種の営巣活動は初夏に観察されている。国内では先島諸島のみに分布し、多良間島、水納島 (多良間村)、石垣島、竹富島、西表島から記録がある。国外では台湾に分布する。ニッポンハナダカバチは中国大陸から朝鮮半島、日本列島 (北海道~九州・屋久島まで) に広く分布する。繁殖には、まとまった規模の砂質の裸地が必要である。国内での生息域は海岸周辺に限定され、海岸林の内陸側が生育に適した場所である。このような場所は、古くから耕作地などとして人の生活に利用されており、自然状態での好適な繁殖環境は人口の少ない離島などにわずかに残っている。海岸近くの人工的な荒地での営巣も確認されているが、このような場所も改変されてしまう可能性が高く、生息基盤はかなり脆弱と言える。

参考文献 : 山根正気・幾留秀一・寺山 守, 1999. 南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説. 北海道大学図書刊行会, 北海道.
 渡辺恭平・小林純子・吉澤聡史, 2012. 西表島におけるタイワンハナダカバチの観察. つねきばち, (20): 53-54.
 寺山 守・須田博久 (編), 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. 東海大学出版部, 神奈川.

執筆者名 : 木村正明

和名 : ヨナグニサン
 分類 : 鱗翅目 (チョウ目) ヤママユガ科

<昆虫類>

学 名 : *Attacus atlas* (Linnaeus, 1758)
方 言 名 : アヤミハビル
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

世界最大級の蛾として知られ、雄は開帳 185 mm 内外、雌は開帳 200 mm 内外。年 3 化から 4 化で、成虫は 3 月から 11 月にかけて出現するが、それぞれの発生期間は短く、いつでも成虫が見られるというわけではない。アカギ、トベラ、ショウベンノキなど多くの植物が食餌植物として記録されている。与那国島ではキールンカンコノキとアカギが主要な食餌植物である。国内では石垣島、西表島、与那国島に分布。国外では台湾、中国、マレーシアからインド、スンダランドに広く分布する。与那国島では低地から山地まで島の広い範囲に生息しているが、西表島での生息地はおもに低地の樹林周辺に限られ、個体密度も高くない。石垣島では 1973 年に得られた標本を最後に記録が途絶えており、絶滅したものと考えられる。低地林の減少に伴い生息域は狭められている。

特 記 事 項 : 沖縄県指定天然記念物 (1985 年)。

参 考 文 献 : 木村正明, 2008. 南西諸島産蛾類概説. 昆虫と自然, 43(13): 23-27.
岸田泰則, 2011. ヤマムコガ科. “日本産蛾類標準図鑑”, 岸田泰則 (編), 学研教育出版, 東京, 1: 323-326.

執 筆 者 名 : 木村正明

5) 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

和 名 : リュウキュウルリモントンボ
分 類 : 蜻蛉目 (トンボ目) モノサシトンボ科
学 名 : *Coeliccia ryukyuensis ryukyuensis* Asahina, 1951
カ テ ゴ リ ー : 絶滅のおそれのある地域個体群(伊平屋島、慶良間諸島) (LP)

環境省カテゴリー : 該当なし

細身で大型のイトトンボ。翅胸前面にルリ色の斑紋がある。雄は腹長 37~44 mm、後翅長 23~29 mm、雌は腹長 36~42 mm、後翅長 23~29 mm。黄色の地に黒色条斑がある。成熟すると雄は胸が青色に、雌は黄緑色になるが、雌には 2 タイプあって、雄と同様に胸部が青い個体がある。尾端は雌雄とも黄色。沖縄諸島の固有亜種で、沖縄島、伊平屋島、久米島、渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島に分布する。亜種アマミルリモントンボ *C. r. amamii* Asahina は奄美大島と徳之島に分布する。雄の前肩条 (翅胸前面のルリ色の斑紋) に地理的変異がある。沖縄島産では前肩条は下半部だけで短い (数は少ないが、伊平屋型も見られる)。伊平屋島産では上端に不連続な斑紋があり、上端まで延びるものもある (伊平屋型)。渡嘉敷島産は基本的に沖縄島型であるが、この斑紋が消失している黒化型の個体もある。しかし、前肩条の地理的変異については十分調査されていない。成虫は 2 月~12 月に見られ、冬季には少ない。樹木の茂ったうす暗い水辺を好む。産卵は雌雄連結して、水中の植物に行われる。幼虫は落葉のたまった川の淀みや林内の水たまりで見つかる。沖縄島では沖縄市・読谷村以北の山間河川で普通に見られるが、伊平屋島や慶良間諸島の島々では生息域が狭く、人為的な環境の改変や自然災害による土砂流入等により、生息地が失われるおそれがある。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。

原 記 載 : Asahina, S., 1951. New dragonflies from the northeastern Asia (Odonata). *Kontyû*, 19(1): 15-22, 3pls.

参 考 文 献 : 安里 進, 1968. 沖縄諸島の蜻蛉 I 渡嘉敷島及び伊平屋島の蜻蛉類. *Tombo*, 11(3-4): 25-29.

尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.

渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執 筆 者 名 : 焼田理一郎

和 名 : チビサナエ沖縄諸島亜種 (オキナワオジロサナエ)
分 類 : 蜻蛉目 (トンボ目) サナエトンボ科
学 名 : *Stylogomphus ryukyuanus asatoi* Asahina, 1972
カ テ ゴ リ ー : 絶滅のおそれのある地域個体群(慶良間諸島) (LP)

環境省カテゴリー : 該当なし

日本最小のサナエトンボ。腹長 26~28 mm、後翅長 20~22 mm。翅胸前面は黒色で八字型の黄斑がある。胸部側面は黄色で 2 本の黒条がある。雄尾部上付属器は大部分が白く、側面から見ると後半は著しく反り返り先端がとがる。雌の尾毛は背面が白色でトゲ状。九州から奄美諸島にかけて分布するチビサナエ *S. r. ryukyuanus* Asahina の沖縄諸島亜種で、沖縄島と渡嘉敷島、阿嘉島に分布する。山地溪流に生息し、成虫は 5 月下旬から 8 月下旬に見られる。羽化最盛期は 6 月から 7 月で、川沿いで羽化後の個体の飛び立ちが多数観察される。しかしその後未熟・成熟成虫ともあまり見られなくなる。成熟した雄は樹冠に覆われた木漏れ日の差すような流れの岸の砂礫に止まっていることが多い。交尾は川沿いの葉上で行われる。産卵は雌単独で流れのゆるやかな浅い場所で行う。雌はホバリングを交えながら、間欠打水産卵を行う。幼虫は流れのゆるやかな砂泥底にすむ。沖縄島北部の溪流に多いが、阿嘉島の生息域は狭く、個

体数はかなり少ないと思われる。渡嘉敷島の生息状況についてはよく分かっていない。渡嘉敷島と阿嘉島では生息域が狭く、人為的な環境の変更や自然災害による土砂流入等により、生息地が失われるおそれがある。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。
 原記載 : Asahina, S., 1972. Additional notes to the knowledge of the odonate fauna of Taiwan and the Ryukyus. Tombo, 15(1/4): 2-9.
 参考文献 : 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.
 執筆者名 : 焼田理一郎

- 和名 : タイワンオジロサナエ八重山亜種 (ワタナベオジロサナエ)
 分類 : 蜻蛉目 (トンボ目) サナエトンボ科
 学名 : *Stylogomphus shirozui watanabei* Asahina, 1984
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(石垣島) (LP) 環境省カテゴリ : 該当なし

黒の地に黄色の条斑がある小型のサナエトンボ。腹長 31~32 mm、後翅長 23~25 mm。翅胸前面は黒色で八字型の黄斑がある。胸部側面は黄色でN字型の黒斑がある。雄尾部上付属器は白く、側面から見ると後半は反り返り先端がとがる。雌の尾毛は背面が白色でトゲ状。台湾に生息するタイワンオジロサナエ *S. s. shirozui* Asahina の八重山亜種で、石垣島と西表島だけに分布する。沖縄諸島に分布するチビサナエ沖縄諸島亜種(オキナワオジロサナエ) *S. ryukyuanus asatoi* Asahina に似るが、胸部側面の斑紋の違いで区別できる。山地溪流に生息し、成虫は5月中旬から8月下旬に見られる。羽化は中流域のゆるやかな流れの日当たりの良い場所で行われる。羽化直後のテネラルな個体の飛び立ちはよく観察されるが、未熟・成熟成虫ともあまり見ることができない。交尾行動についてはよく分かっていない。雌は単独で流れのゆるやかな浅い場所で、ホバリングを交えながら、間欠打水産卵を行う。幼虫は流れのゆるやかな砂泥底にみられる。現在確認されている石垣島の生息域は狭く、個体数はかなり少ないと思われる。生息環境が脆弱で、林道からの土砂流入や付近にある耕作地からの農薬流入等で容易に生息地が失われる可能性がある。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。
 原記載 : 朝比奈正二郎, 1984. ワタナベオジロサナエ (新称) の記載. ちょうちょう, 7(9): 7-9.
 参考文献 : 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.
 焼田理一郎, 2009. タイワンオジロサナエ八重山亜種を再発見. Tombo, 52: 15-16.
 執筆者名 : 焼田理一郎

- 和名 : ホソミシオカラトンボ
 分類 : 蜻蛉目 (トンボ目) トンボ科
 学名 : *Orthetrum luzonicum* (Brauer, 1868)
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(宮古島) (LP) 環境省カテゴリ : 該当なし

ほっそりとした体形のシオカラトンボの仲間。腹長 29~33 mm、後翅長 30~35 mm。翅胸、腹部は黄褐色で黒色の条斑がある。雄は成熟すると胸部、腹部全体に青灰色の粉を帯びる。国外では、インド、東南アジア、台湾などに分布する。国内では屋久島、トカラ列島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島などに分布する。ごく緩やかに水が流れているような湿地などに生息している。成虫の出現期は、沖縄島では4月から11月。八重山諸島では一年中見られる。成熟した雄は、植物などに静止して縄張りをもつ。雌は単独で密生する植物の間に潜り込み、連続的に打水産卵する。この間、雄が警護飛翔することもある。宮古島では生息地が2か所しかなく、それぞれ小面積で個体数が少ない。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Brauer, 1868. Neue und wenig bekannte vom Herrn Doct. Semper gesammelte Odonaten. Verh. Zool.-bot. Ges. Wien, 18: 169.
 参考文献 : 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.
 渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.
 執筆者名 : 焼田理一郎

- 和名 : コフキオオメトンボ
 分類 : 蜻蛉目 (トンボ目) トンボ科
 学名 : *Zyxomma obtusum* Albarda, 1881

<昆虫類>

カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(南・北大東島) (LP)

環境省カテゴリー：該当なし

やや細身の中型トンボ。翅端に広い褐色斑があるのが特徴。腹長 33~37 mm、後翅長 35~39 mm。全身が褐色。雄は成熟すると胸部、腹部、翅脈の大部分に白粉を帯びる。国外では、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、フィリピンなどに分布する。国内では本来、大東諸島の北大東島と南大東島のみ分布する。1996年に西表島、2001年には波照間島でも本種が採集され、西表島では数年間にわたり発生を繰り返したが、ここ数年は、確実な記録がない。八重山諸島には南方から飛来してきたと推定され、大東諸島に古くからいる個体群とは異なると考えられる。大東諸島では、林に囲まれた抽水植物がよく繁茂した池沼や、アダンが密生した大きな池などに生息している。成虫の出現期は3月下旬から12月上旬。薄明・薄暮に活動する。日中は池のまわりの林の中で休止している。成熟した雄は、早朝や夕刻に池の縁に沿って水面上10~20 cmの高さを、ホバリングをまじえながら直線的に3~7 mの範囲をパトロールする。暗い池の上を飛ぶ「白いトンボ」は印象的である。雄は産卵に来た雌を捕らえ、交尾する。交尾は飛びながら行われ、5~10秒で終わる。交尾後、雌は直ちに産卵する。産卵中、雄は雌の近くを往復飛翔し警護する。南・北大東島では生息範囲が狭く、南大東島のある産地では、ウキクサの大量発生により、産卵場所がなくなり、本種を含むトンボがほとんど見られなくなるなど、開発等の生息地の環境破壊がなくても生息地が失われる可能性がある。

原記載：Albarda, 1881. Neuroptera. Systematische lijst, met beschrijving der nieuwe of weinig bekende scoorten. Veth, Pieter Jan ed.: Midden-Sumatra, Reizen en onderzoekingen der Sumatra-Expeditie, uitgerust door het aardrijkskundig genootschap, 1877-1879. E. J. Brill, Leiden., 1, 26pp.

参考文献：尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ, 文一総合出版, 東京.
渡辺賢一・焼田理一郎・小浜継雄・尾園 暁, 2007. 沖縄のトンボ図鑑. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

執筆者名：焼田理一郎

和名：マダラゴキブリ

分類：蜚蠊目(ゴキブリ目) マダラゴキブリ科

学名：*Rhabdoblatta guttigera* (Shiraki, 1906)

カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(座間味島、阿嘉島) (LP)

環境省カテゴリー：該当なし

体長は雄 25 mm 内外、雌 30 mm 内外。腹端に届く程度の翅がある。全体に淡褐色で暗色斑が散在する。前胸背中央に大きな黒褐色斑があるが、斑紋は個体差が大きい。九州南部、種子島、奄美大島、沖縄諸島に分布し、トカラ列島にトカラマダラゴキブリ *R. takarana* Asahina、石垣島、西表島にヤエヤママダラゴキブリ *R. yaeyamana* Asahina が分布する。森林内を流れる溪流周辺の石下や落葉の間に棲み、浅い水中にも入る。夜間、枯葉を食べる。成虫は5~7月に多く、樹上で見られる。雄は薄暮に飛翔する。沖縄島では沖縄市以北の森林に普通に見られるが、座間味島と阿嘉島の生息地は局所的で環境基盤が脆弱で、森林の荒廃、除草剤や殺虫剤による水質悪化、河川上流域の開発による土砂の流入などで失われるおそれがある。

参考文献：日本直翅類学会(編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

青柳 克, 2017. 沖縄諸島3島からマダラゴキブリ初記録, ならびに幼虫におけるサツマゴキブリとの識別点. 月刊むし, (553): 42-43.

執筆者名：杉本雅志

和名：セグロイナゴ

分類：直翅目(バッタ目) イナゴ科

学名：*Shirakiacris shirakii* (Bolivar, 1914)

カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島) (LP)

環境省カテゴリー：該当なし

体長は雄 35 mm 前後、雌 50 mm 前後。全体褐色で前翅に小暗色斑を散らす。複眼に数本の縦縞がある。前胸背面は平たく、暗色でその両側に淡色線がある。後腿節下面と後脛節前半は赤橙色。後翅は透明。国内では本州・四国・九州・南西諸島に、国外では台湾、朝鮮半島、中国東部~北東部、カシミール、パキスタン、イランに分布する。沖縄島では、読谷村、嘉手納町、金武町、宜野座村から見つかっているが、生息場所は局所的である。沖縄島では6~8月に成虫が確認されており、卵越冬年1化と考えられる。沖縄島ではチガヤなどの草地と裸地が入り混じり、所々に木陰がある環境で見つかる。先島諸島の個体群は生態や形態に差異があり、イシガキセグロイナゴ *Shirakiacris* sp. とされる場合がある。

参考文献：日本直翅類学会(編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名：杉本雅志

和名：ツマグロゼミ

分類：半翅目(カメムシ目) セミ科

学 名 : *Vagitanus terminalis* (Matsumura, 1913)
 方言名 : ヌスピガーラ (宮古)
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(宮古島) (LP) 環境省カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(宮古島) (LP)

体は黒色の地に淡緑色、淡青色、橙黄色、茶色の斑紋があり、前翅の先端に小さな暗色紋のある小型の美しいセミで、体長は 19~27 mm。宮古島の個体は青味が強く、美麗である。わが国では宮古島以南に分布し、宮古島では産地が局限される。同島では集落、人家付近のイスノキに限って生息し、生息範囲もきわめて狭い。生息環境の減少により、絶滅の危険性がある。八重山諸島では石垣島、竹富島、黒島、小浜島、新城島、西表島、波照間島、与那国島に普通に見られる。国外では台湾、中国に分布する。宮古島での生息地は島南部の狭い地域（旧上野村および旧城辺町の一部）に限られる。イスノキに依存しているが、イスノキは耕作地化のため伐採されつつあり、生息範囲は縮小ぎみである。宮古島市の天然記念物に指定して保護するとともに生息木のイスノキの植林や増殖事業を行っている。

特記事項 : 宮古島市指定天然記念物 (1987 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。
 原記載 : 松村松年, 1939. 新日本千虫図解 1. 警醒社書店, 東京。
 参考文献 : 林 正美・税所康正, 2015. 改訂版 日本産セミ科図鑑. 誠文堂新光社, 東京。
 佐々木健志・山城照久・村山 望, 2006. 沖縄のセミ. 新星出版, 那覇。
 上野村教育委員会 (編), 1990. 上野村指定天然記念物 ヌスピガーラ ツマグロゼミ生態報告書。

執筆者名 : 林 正美

和 名 : アシプトカタピロアメンボ
 分類 : 半翅目 (カメムシ目) カタピロアメンボ科
 学 名 : *Rhagovelia esakii* Lundblad, 1937
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(宮古島) (LP) 環境省カテゴリ : 該当なし

体は光沢のない黒色で、脚の基部は淡褐色。顔は前方に突出せず、複眼は大きい。脚の附節は 3 節からなり、雄の前脚は太く、腹面中央付近に 2~3 本の小棘がある。中脚附節の爪は扇子状に広がる毛束に変化し、瞬発的な遊泳に適している。通常無翅型だが、ときに長翅型が現れる。溪流などの流水上で生活し、特殊な構造の中脚附節によって敏捷に滑走し、成虫と幼虫による小集団を形成する。石垣島と西表島の山地溪流にはごく普通にみられ、最近 (2013 年) に宮古島からも確認された。宮古島では流水環境がきわめて少なく、島内のごく限られた場所に生息する。個体数も多くなく、わずかな環境変化で絶滅する可能性が高い。

参考文献 : 青柳 克, 2013. 宮古島からアシプトカタピロアメンボ初記録. *Rostria*, (55): 25-26.
 東 清二 (監修), 2002. 琉球列島産昆虫目録 増補改訂版. 沖縄生物学会, 沖縄県西原町。
 林 正美・宮本正一, 2005. 半翅目. “日本産水生昆虫”, 川合禎次・谷田一三 (共著), 東海大学出版会, 神奈川県。

執筆者名 : 林 正美

和 名 : シロヘリハンミョウ琉球亜種 (オキナワシロヘリハンミョウ)
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ハンミョウ科
 学 名 : *Callytron yuasai okinawense* Hori et Cassola, 1989
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島) (LP) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

体長は 9~12 mm。成虫は沖縄島では 6~7 月海岸の岩礁や泥地の波打ち際に現れる。トカラ列島以南の南西諸島に生息する。屋久島以北~本州に生息するシロヘリハンミョウ *C. yuasai* の亜種である。シロヘリハンミョウとは側縁の白帯が発達することで区別される。海岸の岩礁地帯や河口のマングローブ帯に生息しているが、沖縄島においては護岸工事の影響で良好な生息環境が減少しており、個体数も減少している。先島諸島では生息に適した環境が多く残されており、西表島では海岸から内陸部まで見られる。

参考文献 : 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社, 514pp.
 長田 勝, 2009. オキナワシロヘリハンミョウ. 佐々木健志 (編) 琉球大学資料館 (風樹館) 収蔵タイプ標本目録. 琉球大学資料館 (風樹館), p16.

執筆者名 : 松村雅史

和 名 : ダルマガムシ属の一種
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ダルマガムシ科
 学 名 : *Hydraena* sp.
 カテゴリ : 絶滅のおそれのある地域個体群(渡名喜島・座間味島) (LP) 環境省カテゴリ : 該当なし

前胸と上翅の接点が狭まり、やや細いだるま状の体形をした微小な甲虫。体長は 1.5 mm 内外。体は全体的に暗褐色を

<昆虫類>

呈し、前胸背と上翅は密に点刻され、上翅端は丸まる。小顎髭は触角より長く、第4節(末端節)は第3節より長い。渡名喜島及び座間味島に分布する。県内からは同属種が6種知られ、沖縄島にオキナワダルマガムシ *H. okinawaensis* 及びサウタケダルマガムシ *H. sautakei*、伊平屋島にイヘヤダルマガムシ *H. iheya*、西表島にイリオモテダルマガムシ *H. iriomotensis*、ヤエヤマダルマガムシ *H. socius* 及びサトウダルマガムシ *H. satoi* がそれぞれ分布する。いずれの種も体長1.0~1.5 mmと微小で、どの種も酷似し、種の同定には雄の交尾器を観察する必要がある。本種は、渓流域の細流の岩肌などから採集されている。渡名喜島および座間味島はいずれも渓流域が小さく、両島の産地では少数個体が生息するのみである。琉球列島のダルマガムシ属は島ごとに種分化しており、渡名喜島および座間味島の両個体群は種分化を研究する際にも貴重な存在である。

参考文献：青柳 克, 2013. 渡名喜島の水生昆虫(トンボ・カメムシ・コウチュウ). 琉球の昆虫, (37): 23-29.
青柳 克, 2013. 座間味島の水生昆虫(トンボ・カメムシ・コウチュウ). 琉球の昆虫, (37): 18-22.
吉富博之, 2003. 日本産ダルマガムシ科. 昆虫と自然, 38(2): 23-26.

執筆者名：青柳 克

和名：タマガムシ
分類：鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科
学名：*Amphiops mater* Sharp, 1873
カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄諸島)(LP) 環境省カテゴリー：該当なし

背方に強く隆起した半球状の体形をもち、全体的に暗褐色を呈するガムシ。体長は3.5 mm前後。複眼は上下に2分され、上翅には8点刻列を備えるが基部では不明瞭であり、中脛節には長い遊泳毛をもつ。体色は黒褐色・赤褐色・淡褐色などと変異に富む。県内では、沖縄島・伊平屋島・伊是名島・石垣島・西表島・小浜島および与那国島に分布する。国内では本州・四国・九州および甌島列島に、国外では中国および朝鮮半島に分布する。国内からタマガムシ亜科 *Chaetarthrinae* は本種のみが知られ、近縁な種はいない。本種は、水生植物がある池や水田に生息し、水草や枯れ枝などに白い卵嚢を産み付ける。1990年頃までは沖縄諸島の各島に少数見られた。沖縄諸島では、近年の採集例がない。一方、八重山諸島では、比較的安定して生息している。農薬汚染などが生存に対する脅威である。

原記載：Sharp, D., 1873. *Trans. R. Ent. Soc. Lond.*, 1: 62.
参考文献：神奈川県, 2008. タマガムシ. 神奈川県レッドデータブック 2006WEB版,
<http://conservation.jp/tanzawa/rdb/>, 2016年9月閲覧.
松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類(2). 北九州の昆虫, 37(3): 163-170.

執筆者名：青柳 克

和名：コガムシ
分類：鞘翅目(コウチュウ目) ガムシ科
学名：*Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)
カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(八重山諸島)(LP) 環境省カテゴリー：情報不足(DD)

楕円形で黒色の体に、赤褐色の脚をもつ中型のガムシ。体長は16~18 mm。小顎髭の第4節(末端節)は第3節より短い。中胸腹板隆起の中央に溝はない。後胸腹板突起は短く、後基節間からほとんど突出しない。県内では、宮古島・伊良部島・西表島および波照間島に分布する。国内では北海道・本州・四国・九州・対馬・徳之島および与論島に、国外ではロシア東部・モンゴル・中国および朝鮮半島に分布する。県内に同属の種は分布しない。本種は、水溜りなどの一時的な止水域に生息し、成虫は灯火に飛来する。八重山諸島では、近年の採集例がない。一方、宮古諸島では、近年も確認されており、低密度ながら生息しているようである。生存に対する脅威は不明であるが、圃場整備・農薬汚染などの可能性が挙げられる。

原記載：Sharp, D., 1873. *Trans. R. Ent. Soc. Lond.*, 1: 58.
参考文献：環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 5 昆虫類. ぎょうせい, 東京.
Satô, M., 1998. Some records of *Hydrochara affinis* (SHARP) (Coleoptera, Hydrophilidae) in the Ryukyu Islands. *Elytra*, 26(2): 398.

執筆者名：青柳 克

和名：ウスバカミキリ
分類：鞘翅目(コウチュウ目) カミキリムシ科
学名：*Megopis sinica sinica* (White, 1853)
カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島)(LP) 環境省カテゴリー：該当なし

体長は30~55 mm。体は暗褐色で触角節は無毛。成虫は6~7月に現れる。沖縄島北部で灯火に飛来した個体が少数得られているだけである。幼虫の生態は不明。沖縄島以北の琉球列島および九州~北海道まで分布する。石垣島と西表

島には八重山亜種 *M. s. validicornis* が普通に生息し、幼虫はスダジイの立ち枯れなどを食している。八重山亜種は触角に淡黄色微毛を備えているが、本亜種はそれがないので区別できる。

参 考 文 献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執 筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : **ベニボシカミキリ**
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
学 名 : *Rosalia lesnei* Boppe, 1911
カ テ ゴ リ ー : 絶滅のおそれのある地域個体群(石垣島) (LP) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長は23~31 mm。背面は深い赤色、前胸背板に4つ、上翅に5対の黒紋をもつ。成虫は5~6月に出現し、日中に活動する。国内では石垣島と西表島に、国外では台湾に生息する。奄美大島に分布するフェリエベニボシカミキリ *R. feriei* Vuillet に似るが、背面がより濃い赤色で触角第3~5節の毛房が顕著であるなどの点で区別される。西表島において成虫は原生林的自然林内のオキナワウラジロガシなどの倒木上や飛翔中の個体が発見され、幼虫は主にオキナワウラジロガシの朽木を食していることが確認されている。西表島では個体数は多いが、石垣島では天然林改良事業によりオキナワウラジロガシが減少したためか近年の記録は少ない。

特 記 事 項 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。
参 考 文 献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.
高桑正敏, 1998. ベニボシカミキリの世界. むし社, 65-67.
林 匡夫・森本 圭・木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV). 保育社, 438pp.

執 筆 者 名 : 松村雅史

6) 情報不足 (DD)

和 名 : **ミヤコモリゴキブリ**
分 類 : 蜚蠊目 (ゴキブリ目) チャバネゴキブリ科
学 名 : *Symploce miyakoensis* Asahina, 1974
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

体長13 mm、前翅長8.5 mm、後翅長7 mm。明るい褐色で無紋。雌の翅は短く、腹端が露出する。雄は未知。宮古島の固有種。洞窟内、洞口付近から得られている。1971年以降、記録がなかったが、最近再確認されている。宮古島には多くの洞窟があるが、その多くで環境が悪化している。洞窟の破壊、水没、消失、観光整備や、周辺の開発、土地改良、地下水位の低下などによる乾燥化が進めば、生態も未知のまま絶滅に向かう恐れがある。

参 考 文 献 : 朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京.

執 筆 者 名 : 杉本雅志

和 名 : **ヤサガタコカマキリ**
分 類 : 蠃螂目 (カマキリ目) カマキリ科
学 名 : *Statilia apicalis* (Saussure, 1871)
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長36~40 mm。スジイリコカマキリ *S. nemoralis* (Saussure) に似るが、小型で前胸背が短い。前脚の基節と腿節の黒斑は長く、基節では半分以上を占める。日本からは褐色型のみが知られる。国内では石垣島、西表島、与那国島から記録がある。国外では東南アジア、南アジア、オーストラリアから記録されている。国内での採集例の多くは灯火に飛来したもので、生態は不明である。スジイリコカマキリは草地に見られるので、本種も草地に生息している可能性がある。しかし、本種の発見例は極端に少なく、飛来による偶産記録とする見解もある。

参 考 文 献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.
青木一幸, 2008. 与那国島でヤサガタコカマキリ♀を採集. 月刊むし, (454): 45.

執 筆 者 名 : 杉本雅志

和名 : モザイクコマダラウマ
分類類 : 直翅目 (バッタ目) カマドウマ科
学名 : *Neotachycines moxaic* Sugimoto et Ichikawa, 2003
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長 6~9 mm。小型の種で、背中が高く丸まる。茶褐色の体に濃淡の細かい斑をもつ。他種の幼虫と紛らわしいが、前・中腿節の斑紋で識別できる。多くのカマドウマ類では前・中腿節の先端と、中央よりの二ヶ所に暗色の帯状斑があり、二つの斑の濃さは同じか、先端の方が濃くなるが、本種は先端のものが痕跡的で、中央よりの斑は濃く明瞭である。後脚腿節や脛節でも同じ傾向をしめす。現在まで、西表島の大正池付近からのみ見つかった。湿地脇の森林内で、落葉が豊富な斜面である。

原記載 : Sugimoto, M. and A. Ichikawa, 2003. *Tettigonia*, (5): 1-48.
参考文献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名 : 杉本雅志

和名 : ニトベノミバッタ
分類類 : 直翅目 (バッタ目) ノミバッタ科
学名 : *Xya nitobae* (Shiraki, 1913)
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長 4~5 mm。体色は銅黒色で微細な彫刻に覆われ光沢は鈍い。触角は黒色、後腿節に白斑がある。他の種は前胸背や後腿節に明瞭な光沢がある。沖縄島、西表島、徳之島、台湾に分布する。河畔林の路傍や林縁の耕作地脇など、日当たりの悪い湿った裸地で見つかり、生息場所は局所的。沖縄島の生息地では、近年生息が確認されてない。

参考文献 : 日本直翅類学会 (編), 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研, 東京.

執筆者名 : 杉本雅志

和名 : エゾカタビロオサムシ
分類類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科
学名 : *Campalita chinense* (Kirby, 1818)
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長は 23~31 mm。沖縄県唯一のオサムシ。成虫は沖縄島では 6~7 月に現れる。日本全土、朝鮮半島、中国他にも分布する。カタビロオサムシ類は他のオサムシ類とは異なり後翅があり飛翔できる。樹上の蛾の幼虫などを食している。また地表の小昆虫なども食しているようで地上に設置されたオサムシトラップでも捕獲される。本土では一般的には蛾が大発生した時に多くの個体が見られる。沖縄島では 1990 年代に北部のダムの灯りに普通に飛来していたが、2000 年代以降はほとんど確認されていないようである。個体数減少の原因は不明である。

参考文献 : 東 清二ほか, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑 2. 沖縄出版, 252pp.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正考, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社, 514pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : チャイロホソハナムグリ
分類類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科
学名 : *Callinomes ishikawai* (Y. Kurosawa, 1973)
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長は 17~19 mm。西表島の固有種で地表をハナバチのように飛翔する。背面は光沢のない橙色であること、触角第 1 節が板状であることで、容易に他種と区別できる。形態的にアリと関係していると推測される。国外の近似種はアリの巣内から得られている。5~8 月に記録されているが極めて稀である。

参考文献 : 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正考, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社, 514pp.
岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. 日本コガネムシ上科標準図鑑. 学研教育出版, 444pp.
酒井香・藤岡昌介, 日本産コガネムシ上科図説 第二巻 食葉群 I. コガネムシ研究会, 173pp.
丸山宗利ほか, 2013. アリの巣の生きもの図鑑. 東海大学出版会, 208pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : オオヨツバコガネ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科
 学名 : *Parastasia oberthueri ishigakiana* Nomura, 1964
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長は 17.0~19.3 mm。石垣島に生息する。個体数は少ない。体色は黒色で雄の前胸背板、尾節板は橙色、雌は全体が黒色であるが前胸背に赤紋がでる個体もある。幼虫はスダジイの太い朽木の赤ぐさを好む。同所的に生息する同属のヨツバコガネ *P.ferrieri* は夕刻に地表を飛び回り灯火にも飛来するが、本種成虫の生態は不明である。

参考文献 : 岡島秀治・荒谷邦雄, 2012. 日本コガネムシ上科標準図鑑. 学研教育出版, 444pp.
 酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第 2 巻 食葉群 I. コガネムシ研究会, 173pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : オオテントウ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) テントウムシ科
 学名 : *Synonycha grandis* (Thunberg, 1781)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長は 10.5~13.5 mm。本邦で最大のテントウムシである。沖縄県では石垣島、西表島、宮古島、沖縄島から記録があり、本州、九州、四国、東南アジアなど広く分布する。近似種のハラグロオオテントウ *Callicaria superbe* とは体下面に黒色部がないことで区別できる。先島諸島では 1980 年代に採集されているが、近年沖縄県内での記録がない。幼虫、成虫共にタケ類につくアブラムシに依存しており、沖縄県ではサトウキビにつくカンシャワタアブラムシの天敵として知られている。

参考文献 : 東 清二ほか, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑 2. 沖縄出版, 252pp.
 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 保育社, 500pp.
 初宿成彦 (編), 2015. 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録 (4), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 47 集, 大阪市立自然史博物館, 大阪.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : ヤエヤマクロスジホソハナカミキリ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
 学名 : *Parastrangalis ishigakiensis* Hayashi, 1970
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

体長は 6~9 mm、上翅は黒色で黄褐色の条紋がある。石垣島のみから知られていたが、2016 年に西表島でも発見された。成虫は 3~4 月にヤエヤマコンテリギの花を訪れる。1970 年代前半までは石垣島の於茂登岳で普通に得られていたが、近年の記録は少ない。

参考文献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
 鎌苅哲二・杉本可能, 2016. 月刊むし, (543): 60.
 草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執筆者名 : 松村雅史

和名 : オキナワクビジロカミキリ
 分類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
 学名 : *Xylariopsis iriei* Hayashi, 1976
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

体長は 10~13 mm。沖縄島と鹿児島県の奄美大島に分布している。体は褐色から黒色で前胸背板と上翅の後半部は黄白色。幼虫はテリハツルウメモドキの枯枝を食しているようである。沖縄島北部から得られているが、近年の記録は大変少ない。奄美大島からは比較的多く得られている。

参考文献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
 草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

<昆虫類>

執筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : オキナワセンノキカミキリ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
学 名 : *Acalolepta kuniyoshii* Hayashi, 1963
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長は 23~40 mm。沖縄島の固有種である。体の微毛は光沢の強い白黄~金色で上翅の黒帯は不明瞭。成虫はリュウキュウハリギリやタラノキの葉を後食し、幼虫もそれらの枯れた材部を食している。沖縄島北部に生息しているが、同属のキンケピロウドカミキリに置き変わっているようで近年の記録は少ない。

参 考 文 献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : オキナワサビカミキリ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
学 名 : *Diboma costata* (Matsushita, 1933)
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

体長は 8~12 mm。体は赤褐色~黒褐色で黄白色の微毛に覆われる。九州南部、屋久島以南の島々から記録されている。沖縄県内では沖縄島、慶留間島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島に分布する。古いリュウキュウチクの囲いなど特殊な環境から得られる。また灯火にもまれに飛来する。近年の記録は与那国島のみである。

参 考 文 献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : シロスジトゲバカミキリ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科
学 名 : *Rondibilis femorata* Gressitt, 1938
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

体長は 4.5~8 mm。石垣島、西表島、与那国島に分布し、成虫は 3~6 月に現れる。国外では台湾に分布する。体は黒色で、上翅は白色微毛による鎖線状の条紋がある。焼かれたススキに生える桃色の菌類に集まるようであるが、除草剤の普及などでそのような環境が減ったことが理由なのか近年発見される個体数は少ない。

参 考 文 献 : 大林延夫・新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 818pp.
草間慶一・高桑正敏ほか, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 565pp.

執筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : ダイトウサルハムシ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科
学 名 : *Basilepta borodinensis* Kimoto, 1979
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

体長 3.0~3.5 mm。体色は全体に赤褐色。前胸背板は中央やや後方でもっとも幅広く、全体に強い点刻で覆われる。上翅は強い点刻を有し、点刻間室は隆起する。大東諸島 (北大東島・南大東島) の固有種。耕作地周辺で少数の個体が採集されているが、発見例は少なく生息状況や生態については不明である。

参 考 文 献 : 東 清二, 1989. 南大東島の昆虫相に関する若干の考察. 沖縄農業, 24(1・2): 27-39.
木元新作, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 神奈川県.

執筆 者 名 : 佐々木健志

和 名 : ゴマダラオオヒゲナガゾウムシ
分 類 : 鞘翅目 (コウチュウ目) ヒゲナガゾウムシ科

学 名 : *Peribathys okinawanus* Senoh, 1984
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

大型で体長は 22 mm 内外。沖縄島の固有種である。雄の触角は体長の 3 倍以上あり、雌は体長の約 6 割で短い。体は黒色で翅鞘、前胸背はまだらの白色紋を装う。沖縄島北部の自然度の高い環境で 6~10 月に主に灯火で得られるが、個体数は少ない。幼虫は太い広葉樹の立ち枯れを食するようである。

参 考 文 献 : Senoh, T., 1984. A new species of the genus *Peribathys* Jordan from the Island of Okinawa, Japan. Trans. Shikoku ent. Soc., Matsuyama, 16(4): 33-35.
 久米加寿徳, 2002. 甲虫ニュース, (137): 17.
 妹尾俊男, 2008. 月刊むし, (443): 31-36.

執 筆 者 名 : 松村雅史

和 名 : ヨナクニウォレスブユ
 分 類 : 双翅目 (ハエ目) ブユ科
 学 名 : *Simulium (Wallacellum) yonakuniense* Takaoka, 1972
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

成虫の体長は 2~2.5 mm、胸部側面の膜質部と下胸部に微毛をもつ。繭は単純なスリッパ型で、一対ある呼吸管は基部から 4 本に枝分かれする。触角鞘には鋸歯がある。幼虫の頭蓋板腹面の切れ込み (クレフト) の先端は細長くのびる。与那国島と蘭嶼島に分布する。与那国島にはヒロシマツノマユブユ *Simulium (Nevermannia) aureohirtum* Brunetti も生息するが、成虫の胸部側面の膜質部と下胸部には微毛が無く裸出すること、繭の前方に突起があり、蛹の呼吸管は 6 本に枝分かれし、触角鞘に鋸歯は無いこと、幼虫のクレフトは短く先端は丸い、などの点で識別できる。多化性で 1 年中羽化がみられる。雌成虫の人吸血性は知られていない。幼虫と蛹は流れの速い水中の植物や枯木、石などの平滑面に付着している。主要な生息地である田原川の湧水地には堰堤が作られ生息範囲が減少している。

参 考 文 献 : 高岡宏行, 2002. 南西諸島におけるブユの分類、分布および生態. 衛生動物, 53(2): 55-80.
 志村 隆 (編), 2005. 日本産幼虫図鑑. 学習研究社. 東京.

執 筆 者 名 : 杉本雅志